

# 共産主義

共産主義者同盟理論機関誌

安保改定と「中立政策」

炭労の闘いは何を意味しているか？

芸術の戦術左翼

「哲学教程」の批判

共産主義建設の展望における

第二十二回党大会の意義

時評 科学・技術をプロレタリアの手に

国際共産主義運動史講座

ドイツ共産党の創立と

「スバルタクス蜂起」

共産主義者同盟規約

2

# 教育労働者

判頁 5  
刊 60  
季 80円  
定価 300円  
年

発刊の辞

創刊号

高校生徒会はどう闘ったか 高知の場合  
群馬の闘いをささえた青年教師の力  
勤評は実施されている！

神奈川教組の実態

☆安保改訂をめぐる情勢

☆アフリカの革命はどこへ行くか

☆春闘はいかに闘われたか

第九次教研集会への課題

—大阪大会の示すもの

職場の闘い一年

「けむりの子」「すぎなの子」

国民教育への現場からの発言

ソビエトの教育改革に思う

編集・全日本青年教師集団

発行・リベラシオン社

## 「共産主義」目次

安保改定と中立「政策」

山西 薫 (1)

炭労の闘いはなにを

意味しているか 坂田 静朋 (10)

芸術の戦術左翼

——批評的批評の批評—— 森 茂 (20)

プロレタリアートの

世界観はなにか？ 佐久間 元 (25)

共産主義建設の展望における

第二十一回党大会の意義 曾木晴彦・姫岡玲治 (36)

時評

科学技術をプロレタリアートの手に…… (61)

国際共産主義運動史入門講座I

ドイツ共産党の創立と

「スパルタクス蜂起」…… (64)

鏑木 潔

共産主義者同盟規約…… (83)

(83)

# 安保改訂と中立「政策」

山西 薫

資本案階級が、勤評闘争における勝利の勢いを駆って、安保改訂、警職法改正とやつぎばやにブルジョア独裁の斧をふりかざしながら労働者に襲いかかり、搾取する条件を大中に拡大しようとしていた昨年の秋、日本の労働者階級の闘いに、無視しえない影響もつであろう、二つの外交声明が、ソヴェトと中国から同時に発せられたのであった。十一月二十日、中国の陳毅外交部長は、たしかその下で日本の労働者階級とともに中国の人民も呻吟したはずの、日本の帝国主義としての歩ゆみを「日本民族の長期にわたる独立の伝統」として讚美しながら、「日本が平和な中立国家になることを心から期待」したのであった。一方、ダロムイコ外相も、折からアメリカとの間に安保改訂の取引をかわしていたかつての独占ブルジョアのチャンピオン藤山にあって「日本の安全は再軍国化と戦争を拒否し、日本の中立を守る可能性を規定している日本憲法の諸条項を守ることにによって保障される」との覚書を送った。

「地方的存在」に封じこめられているプロレタリア権力の維持を

自己目的化したソヴェト、中国の外交政策に、革命的闘争の基本的方法を従属せしめることによって、「かわることのないプロレタリアートの国際的団結を証明」してきた日本共産党にとっては、この二つの声明は政策転換の指令であった。日本共産党は十二月十一日に「日本人民の独立と安全への道」を声明して、「西国政府の声明を心から歓迎し」、一月十日と十二日の中央委員会において激しい討論の末「日本の中立化についての党の態度」を決めた。かくして、半年ばかり前、その労働運動の戦術指導においては、全面的に民同左派との愈着の傾向を示しながら、「この立場（「中立堅持」という立場——引用者）は、労働者と労働組合の平和と独立のたたかいにおいて、だれが敵であるかをあいまにするよりどころとなっており、真に平和と独立の敵、アメリカ帝国主義への労働者の思想的武装を解除させ、平和と独立の闘いの積極的な前進をおくらせる役割りにかわりつつある」（「アカハタ」五八・七・八、「日本労働者階級前進のために」と述べることによって、わずかばかりの原

則性(?)を示していた共産党は、ここにもつとも狂信的な中立論者としてあらわれることになった。平和諸団体を支配する多くの小ブルジョア平和主義者も、この声明と「前衛」党の變身に勇氣づけられて、前より大胆に資本家の政府に政策の転換を要求する闘いにとり組むことになった。

こうして、社会民主主義者たちは、自らの地位を守るための政治的支柱を、「前衛党」からふたたび与えられることになった。かれらは、「前衛党」のおどろくべき無能と裏切りによって、労働者の圧倒的部分をその支配下に収めることに成功しながら、五年の全面講和闘争、五年の破防法ストの過程で、左翼化した大衆の信頼をつなぎとめておくために、「全面講和、中立堅持、軍事基地反対、再軍備反対」を四原則とした帝国主義に対する抵抗の道を歩まざるをえなかったのである。しかし、かれらに指導される闘いはあいもかわらず、官僚的スケジュール闘争の谷間に行われる国民大会への割当て動員である。

その上、五年には、はなばなしの活躍を示したが、今は左翼理論戦線の全き権威の失速と沈滞によって、やや色あせた感じの総合雑誌も、ふたたび学者、インテリゲンチヤを動員しながら、「中立の経済的基礎」づけや、中立の現代史的意義、ブルジョア国際法の定義についての理論をふんだんに提供する。

こうして労働組合官僚、代々木官僚、小ブル平和主義者、インテリのそれぞれの思惑と願望は「中立化政策」に「統一」し、労働者を指令し、動員し、教育する。しかし、激しい階級闘争の渦中における労働者大衆は、安保改訂という資本家階級の陰謀の危険を本能的に感じとり、それと闘い始めながら、かれらの指導に当惑し、次の

ような真剣な闘いを発し始めている。どのような意図で、資本家階級は安保改訂を武器にわれわれに襲いかかろうとしているのか。いかにそれと闘っていくか、と。

### ▽「政治的決戦」か△

警職法をめぐる闘いがその頂点に達した十一月五日の前後には、国会周辺での「内乱」説がまことしやかに巷間に流されたほど、ブルジョアジーは己れの政治攻勢に反逆する大衆の力量に、本能的な脅怖心をかきたたせられたのであった。彼らは、そうした失敗をくりかえさぬために、「国会周辺の秩序保持にかんする特別委員会」を設置してデモの規制を狙ったり、最賃制の粉砕のためにおこなわれた労働者の国会デモに容赦ない官憲の弾圧を加えたりしている。彼らは、「将来安保批准の際にも、国会周辺であれほど派手なデモをやられては、大変な心配がおこる」(「サンデー毎日」三月十五日号)と、それがなんのためか布石としてうたれているかをかくそうとしない。ここにその一端が示めされるように、彼らは、安保改訂に「政治的決戦」のかまえをみせながら異常なほどに周到な準備をすすめているのである。

一方、改良的幹部でさえも、「安保改訂批准の際には政治的大ゼネストを」と呼号する。しかし、われわれは、単なる空語や、約束だけでは、闘争の成功を保障することはできない。

われわれは、安保改訂闘争のもつ階級的意義を正しく把握せねばならない。今日、安保改訂反対闘争が、官僚主義者や小ブル平和主義者の指導に委ねられているという事実は、いささかもその闘争の

もっている階級的意義を減ずるものではない。そればかりか警職法反対闘争の教訓を正しく学んだものは、彼らの闘争指導の中にある諸々の傾向を分析し、早くから誤ったブルジョア民族主義と日和見主義に対する闘争を非妥協的に行うことなしには、闘いの発展がありえないことをよく知っているのである。(読者は「プロレタリア通信」NO・8を参照されたい)

### ▽交渉の端緒△

安保改訂の交渉史は、五七年六月の岸訪米をもって始る。「神武景氣」と呼ばれた繁栄過程を経過することによって回復した自らの力量を、「日米新時代」の旗印の下に誇示しながら、岸は三項目(「第一に有効期間を五カ年とする」「第二に国連憲章に基礎を置く」「第三に米軍の配備使用について協議する」)「読売」五・七・七(二)にわたる改訂を、ワシントンに始めて要求したのである。当時、日本の資本主義は巨大な量の資本を蓄積していたが、国境によって封じこめられた生産力の拡大は、国際収支の逆調という型態をもって、その矛盾を発現しつつあった。日本の資本家階級にとっては、資本や商品の輸出を新たな動力を加えて展開するため

に、現行条約から生ずる制約から解放され、世界市場の競走場裡にしかるべき地位を与えられることが今や不可欠と思われていた。もちろん、日本の資本家階級は、中国革命と植民地革命に対抗し、とくに日本の労働者階級に根本的に対抗して行くために、不可避的な利害の衝突を調整しながら、アメリカとの間に国際的階級闘争における同盟者としての結束をかためなければならぬ。しかし、資本

家階級のこのような実践的友愛にもかかわらず、彼らは帝国主義戦争の敗北によってその受容を余儀なくされた不平等な地位の回復を要求し始めたのである。しかし、「いづれの国にもただ乗りは許さない」「継続的な目的と相互援助を基礎としなすいは、無限にその保障は与えない」(ダレス)ことを原則としている、世界市場の独裁君主は国際帝国主義者の強化のためには、一切の勢力の動員を求めながら、それらを自己の覇権の下に貶めておくことを常に心がけている。強力な反戦的抵抗の存在と、繁栄過程での資本蓄積の要求による、軍事化のための資金不足によって結果された、日本の軍事的力量の不足を理由に、「別個の双務的な日本防衛条約」を結びうるだけの資格を、岸に与えなかったのである。彼らは「現行条約でも本国は完全に満足している」「日本側は一生懸命にひとり相撲をとっている」と、岸の要求を足蹴にした。岸は「保守党としては、どんな抵抗を排除しても、憲法改正を中心とする自助自救能力を備えた独立の体制を、ここ数年の内に導かねばならぬ」(「読売」五・七・七・三)との、帝国主義者としての不載天の決意をあらためて堅めざるをえなかった。

こうして、五八年の七月の岸、マック会談で、あらためて西帝国主義者の思惑と、冷い打算とが火花を散らし、交渉が新しい展開をみせる迄約一年間の空白期間が支配するのであるが、このように交渉の端緒は、あきらかに日本ブルジョアジーの要求によって——そして、それは日本資本主義の合法的発展の結果として、アメリカ帝国主義者の力をもつても基本的にはおしとどめえない、そのような性格をもった要求によって、開かれたのである。もちろん、このことはこの改訂交渉に於けるにあたってアメリカ

帝国主義者の側に、なんらの野心も、要求もなかったというわけではない。逆に現実に適応した新しい覇権の形式の下に、極東における国際帝国主義強化の一策として、強化せる日本帝国主義の力を動員する新たな提案を、彼らがこの取引の過程で新しく打ちだしていることは、後にみるとうりである。

### ▽潜在的帝国主義△

だがこれらの経過を冷静に、事実即して分析するのではなく、一定のドグマにとらわれ、あらかじめ与えられた目的に向って分析を透導するのを、事とする人々には、次のような結論が定説となっているらしい。

アメリカ帝国主義者は、この「安保改訂」によって、「平等化」の名のもとに日本を沖繩、小笠原にも拡大した区域の「共同防衛」に引きずりこむことよって、日本の独立と安全をふみにじろうとしているのだ。岸内閣は、すすんでアメリカの要求に屈服して、国民の利益を裏切り、アジアで日本民族をして戦争と破滅の道ですすませようとしている。

しかし、それにしてもこの分析は、あまりにも生活過程にあらわれた表面的なものにとらわれすぎており、その内奥との関連を全くあきらかにしていない。その政策の必然性は、あきらかにされていない。したがって実践的には、その「戦争と破滅」の政策に対するに、他の恣意的な政策——日本民族にとって屈辱的な安保条約を破棄して、日本を自主的な外交政策をとる中立国家にする——をもつてすればよいというおそれるべき非革命的な結論に導かれるのである。

義に対するプロレタリアートの唯一の救となりうるのは社会主義だけであることをあきらかにするものとして意義を有するのだということ、彼らは忘れてしまったのか、あるいはもともと学ぼうとしなかったのにちがいない。

すると彼らは「君たちはさかんにレーニンを引用するが、それはもう古くさい。今日では社会主義は世界的体制となり、労働者階級も大きく強くなっている。」と臆面もなく反発する。しかし、彼らはそれによって帝国主義が変わったとでもいうのであろうか。あるいは、経済政策を否定する立場においてはじめて理論体系を確立する基礎を築いた自由主義時代のブルジョア科学を継承し、資本主義を否定するイデオロギー的立場において始めて首尾一貫した科学として確立したマルクス主義の方法そのものが変わったとでもいうのだろうか？ 法則の実体として法則に物化された人間が、その法則そのものを廃絶することなく、その法則にちがった方向を与えることができるようになったとでもいうのであろうか？ これこそは本物の「修正主義」に他ならない。

彼らは、あるいは「日本は潜在的帝国主義者にすぎず、したがって、それを民主中立日本に転換させることが可能なのだ。」とも強弁する。今日では、従属のドグマの呪縛にとらわれつつづけている人々といえども、日本独占資本主義の内在的な展開力を無視しえなくなっているのである。だが、その潜在的帝国主義という概念は、彼らの説明通りに解釈すればまだ帝国主義の胚種をそのうちに宿しているにすぎず、もしアメリカ帝国主義の桎梏をとりぞいでやれば、「自由、平等」の「最上の外被」におおわれた平等の商品交換を、その社会的再生産の原理とする、「民主主義的な資本主義」を実現

る。

しかし、資本家に中立を要求するというこの奇想天外な、非プロレタリア思想は、その政策の基礎にある客観的過程についての全くの無知から生じたものに外ならないのである。ここで四十年前同じように小ブル的な平和主義者と闘わねばならなかった革命家レーニンの言葉を引用させていただきたい。

重大な点は、カウツキー（今日の小ブル平和主義者と読め）が帝国主義の政策をその経済から切り離し、併合を、金融資本の基礎のうえで可能であるかのような、他のブルジョアの政策と対置させているという点である。もしそうだとすれば、経済における独占が、政治における非独占的、非強力的、非侵略的行動方法と両立できることになるであろう。……その結果は、資本主義の最近の段階のもっとも根本的な矛盾の根底を暴露するかわりに、それらの矛盾を塗りつぶし、鈍らすことになり、マルクス主義のかわりにブルジョア改良主義をもつてくることになるであろう。

彼は、帝国主義的な政策（侵略的、強盗的、略奪的な）が、特殊な段階にある資本主義と切り離しがたく結びついていることをあきらかにしているのである。

これらの言葉は、なんと激しく今日の小ブル平和主義者をむちうっていることだろうか。レーニンの帝国主義の分析は、たんに経済学上の労作としてではなく、第一次大戦が「どちらの側からしても帝国主義戦争」であること、そして帝国主義は「最高の発展段階にある資本主義」の必然的な結果であり、「たんなる政策の一形態ではない」こと、したがって「トラストや銀行の経済の基礎には手を触れずに、トラストや銀行の政策と闘争することはできず」帝国主

する可能性さえ拒否しないのである。しかし、民主主義とか、平等は、最早今日の経済的内容にふさわしくないイデオロギー的な外被であることをみないのは、歴史の歯車をさかさまにまわそうとする夢想家や、資本主義が生成、発展、消滅の世界史的段階をたどる特殊、歴史的な社会であることをみず、それを永久化するブルジョアイデオロギーのみ許されることであらう。

### ▽日本帝国主義△

極東における日・米帝国主義の衝突が、日本帝国主義の軍事的敗北をもって形式的な結末を告げた時にも、それは、解決のない展開によってその矛盾を解決したのにすぎなかった。「敗戦は日本の歴史にとってまさに重大な汚辱であります。しかし、わが天皇制を維持しうるかぎり、われわれはこれを承服しうるのであります。米英における世論は、大体においてまだ天皇制に対する根本的な変革を要求するところまでは行っておりません。従って、われわれのおそれなければならぬのはむしろ敗戦に伴って勃発するかも知れない共産主義革命であります。……」

このような状況でありますから、戦争を永く続ければ続けるほど革命の危険は増大するのであります。よって、一日も早く戦争を終了せしめねばなりません。」と近衛は、敗戦の前夜に天皇に上奉していた。当時プロレタリアートの戦闘組織は帝国主義者の攻撃の前に壊滅されつつしており、帝国主義者の支配の危機は、彼らが口の端にのべたほどに、目睫にせまってきたものではなかった。にもかかわらず、帝国主義戦争における劣勢によって、同時にその受容を迫



られていた降服の道を、彼らがすすんでえらぶことができたと  
 事は、日本の独占金融資本主義の運動法則そのものが占領という強  
 力をもつてしても変更せしめうるものではなかったからである。日  
 本の資本主義は、典型的には財閥コンツェルンの確立という型態で  
 すでに金融資本主義の段階に到達していた。その段階においては、  
 資本の蓄積が、直接的生産過程における搾取によって取得された個  
 々の資本の剰余価値を資本に再転化せしめるという形態をもって行  
 われる産業資本主義段階に現われるそれとは異った様式を展開する  
 ことになる。それは、重工業の発展がもたらした固定資本の巨大  
 化、経営に要する資本の異常な増加という現実的要請を、株式会社  
 制度の発展によって、社会的に蓄積された資金から、事業の経営に  
 必要な任意の額の資本を調達するという機構を一般的に確立したの  
 である。そして、その発展は、銀行の支配、合同による独占的利益  
 の確保、少数大資本への支配の集中をもたらし、この資本主義の新  
 たな発展は新たな資本の蓄積の様式を展開することになる。それ  
 は、労働力の不断の過剰を実現しつつ、貨幣市場に基礎をおく資本  
 市場に規制されるものとなるのである。この金融資本によって必然  
 的に形成せられる独占的資本は、生産を制限し、価格を決定し、世  
 界市場に進出し、資本を輸出し、競争のいっさいの可能性を敵の手  
 からうばうためにますます死物狂いになる。世界の分割と他国の支  
 配のための、他の民族的国家的金融団との激烈な闘争がひきおこ  
 れる。

この死闘における敗北にもかかわらず、日本の金融独占資本主義  
 は存続発展しつづけた。敗戦占領という事実は、自己の意見を貫徹  
 するための「強力」を、日本のブルジョアジーから、一時的に奪っ

の、国家権力に対する直接的な干渉を極端にたらしめずにはおかな  
 い。また労働者階級の反帝闘争もその激しさを加えずにはおかな  
 い。アメリカ帝国主義者は、これらの現実に対応した新しい支配の  
 形式を整え、また朝鮮戦争に象徴的に表現された極東における国際  
 帝国主義の動搖を安定化させるために、強化せる日本帝国主義の力  
 を利用せんと試みた。そのような客観的過程の運動と、それを反映  
 した両帝国主義者の打算と取引の産物が、日本の「独立」に他なら  
 なかつたのである。このように事実を冷静にみるならば、安保改訂  
 によつてますます「従属が深った」等ということが単なる一片のド  
 グマにすぎぬことはあきらかであろう。その後の事態も同じことを  
 示めている。

## ▽交渉の展開△

そのような過程を通じて五七年七月、改訂第一次案をもつて、岸  
 がアメリカとの間に改訂交渉に乗りだしたことはすでに述べた。そ  
 の交渉は彼らによつて、一蹴された。

だが一年の経過を経た五八年の七月の岸・マック会談において、  
 あたらしい取引が始った。アメリカ帝国主義は、岸の要求に応じて  
 交渉を開始したが、彼らは、日本のブルジョアジーの進出の承認を  
 代償に彼らに共同防衛の義務を課し、その適用地域の沖繩、小笠原  
 への拡大を要求したのである。極東における強力な軍事体制の整備  
 をますます緊急に必要としている彼らは、それに必要な費用を、日  
 本の資本家階級にある程度肩代りさせようというわけである。一方  
 この要求をうけいれることは、アメリカとの間に全面的な帝国主義

たとはいえ、日本資本主義の合法的発展を無視したアメリカ帝国  
 主義の専横な振舞いや、「全一的支配」を結果しはしなかったのだ  
 ある。むしろアメリカの占領「政策」は「民主化」の擬装のもと  
 に、日本資本主義の合法的発展をドラスチックに促進したにすぎ  
 なかった。財閥の解体は、戦争という要請に対して行われた重化学  
 工業の発展が、巨大な固定資本の調達という形で大規模の社会的資  
 金の集中を必然にし、財閥の封鎖的性格を解消せしめる方向に進ん  
 だのを加速化し、徹底化したにすぎなかった。そして、インフレ  
 ションの混乱のみを結果したようにみえる敗戦直後の臨時軍事費の  
 放漫な支出、日銀引受けの赤字公債発行を重要な財源とした二十  
 一年度の赤字予算、復金債融資、価格調整費、見返資金特別会計等の国  
 家による資金の援助又は補完は、戦争経済によって推転を必然なら  
 しめられた国家資本主義の機構を保存せしめようとする意図からで  
 たものに他ならなかった。かくして、これらを過渡的手段となしつ  
 つ、主に零細な国民貯金(資金運用部資金)を源泉とする長期かつ  
 低利の国家資金を、主として開銀、輸出入銀を通じ、他方では興銀の  
 金融債引受を通じて、動力、輸送、重要輸出品を生産するような  
 産業部門の中心的な巨大株式会社企業に、主として設備資金として融資  
 する機構を確立するに至る。そして株式による社会的資金の調達は  
 むしろ背景に退き、市銀はもっぱら短期的な運転資金を供給するも  
 のとなり、金融資本は新たな性格を帯びることになったのである。  
 それによつて蓄積の様式も、財政、金融、生産、貿易等を通じての  
 国家的諸操作により規制されるようになり、循環の周期性は攪乱さ  
 れ、資本の輸出も国家権力との一層の融合のもとに新たな動力をも  
 って展開するようになる。このような発展は、アメリカ帝国主義

的対立に至つていず、しかも国際階級闘争の利益の前に結束した同  
 盟関係を要請されている日本のブルジョアジーにとつても不利益な  
 ことではない。過剰な資本を輸出し、搾取する権利を世界的に拡大す  
 ること、巨大な資金を国際的な資本市場から獲得すること等々の要  
 求をもつ今日の国際帝国主義者にとって、ふさわしい政治的威信を  
 それによつてかちえ、かつまた、狭隘な国境の障害をこえて膨脹し  
 た生産諸力が、帝国主義諸国のそれ、乃至は植民地革命の衝突する  
 時を予想して、その戦略的整備を行うことは、彼ら自身の要求でも  
 ある。しかし、労働者を始めとした人民諸階層がそれにいかなる反  
 応を示すか、そして莫大な資金を費してまでもそれを強行すること  
 が必要かどうかを慎重に計算して、具体化せねばならない。——こ  
 れが日本のブルジョアジーの思惑である。

だから適用地域の拡大は、人民の抵抗が強ければ、一時的には背  
 後にかくしてもよいが、次のような条項は速かに具体化してしま  
 いたいと彼らは考えている。まず安保条約を国連憲章に基礎を置いた  
 ものとすることは、ブルジョア的コスモポリタニズムの「イデオロ  
 ギー的外被」という誤解もまぬかれるだろうし、アメリカも無茶  
 な直似はできなくなるだろう。内乱条項は削除しても、自分の国の  
 ことは自分でやれるようになった。その上基地を貸すのだから在日  
 米軍の配備、使用に対しては事前協議と同意を要求しよう。それに  
 よつて、軍事行動に対する発言力も増すだろう。そして最後に期限  
 を明記して、将来はもっと平等なものにあらためられることにしよ  
 う。これらの条項(以下第二グループと略称。条約の適用地域の問  
 題を第一グループとする)によつて、日本の「民族的威信」はおお

いにたかまるし、警職法で失った小ブルの信頼をつなぎとめておくのにもよい。

これに対してアメリカ帝国主義者、中でもベンタゴンの任人たちは、この在日米軍の配備、使用に対する事前協議、同意は軍事機密を漏洩するものとして、絶対に反対している。

このような相互闘争、葛藤の中で、昨年十月四日、藤山・マツクの間には安保改訂のための最初の交渉が始まったのである。

資本家階級が、戦間的な教育労働者の動員闘争を全体の労働戦線から分断し、孤立化させることに成功し、小ブル層をも広汎に獲得し、いよいよ自信満々と攻撃の手を打とうとしていた時である。「今や日本は自由世界を守るための闘いで、全面的役割を演ずる用意をしなければならない」と、岸は外国人記者にその侵略的野心をかくすことなくあきらかにしていた。この当時において資本家階級は、政治的決戦ともいべき安保改訂を、第一のグループをも含めて、全体の労働戦線の分散化の過程で強行突破しようとしていたのである。しかし、彼らの自信はあまりにも強すぎた。もう一つの資本家階級の攻撃的政治攻勢——警職法改正——に対する労働者階級の防禦的闘いの爆発は、逆に資本家政府をゆるがす政治闘争に発展し、安保改定交渉も三回にして蹉跎した。警職法闘争によってひきおこされた政治上の「混乱」を、社会党の裏切りの妥協によって辛うじて、安定させた資本家階級は、安保改訂のたくらみがふたたび労働者階級のエネルギーを解き放つことをおそれて、改訂交渉を公然とおこなうことを抑制し、また、当初の岸構想を若干変更することを、決意したのである。すなわち共同防衛地域の拡大の後廻しである。

しかし、資本家階級および自民党の意図は消えさったのではない。一方では自民党内の意見を調整することに全力をあげながら、偽瞞的な内容を宣伝しつつ、民族意識をあおり、失った小ブルジョアジーの信頼の獲得に必死になりながら、他方では、外務官僚によって秘密裡の交渉を続けていたのである。そして、二月十七日、改訂のもっとも熱心な推進者——藤山外相は、「条約の適用区域」に沖繩、小笠原を含めない「安保改訂藤山試案」を発表し、翌十八日開かれた岸、藤山、赤城、福田四者会談は、この藤山提案を検討した結果基本的にこれを了承し、「四月調印」の方針を堅持し、これに向けて党内意見調整を行うことになった。まず、労働者の抵抗がすくなく、小ブルの信頼をつなぎとめておくのに恰好であり、しかも国際場裡で面子をたてるのに必要な第二のグループの改訂を行うというわけである。

かくして、「安保改訂」をめぐる状況は、急ピッチに展開し始めるかにみえた。

しかし、それは彼らの思惑と計算通りには運ばない。この改訂案は当然アメリカ帝国主義者の反撃をひきおこし、また、労働者階級の抵抗の増大と、その評価の相異にもとづく自民党の内部闘争を激化しているのである。

アメリカ帝国主義者は、沖繩への共同防衛義務の拡大という代償を伴わない日本帝国主義者の一方的な利益の拡大に反対である。

「対等の立場にある以上、相互条約になるのはあたり前」なのに「一部を直すだけで名前も相互という言葉を避け、風当りのないものにしよ」という態度は、けしからんというわけである。

また、ブルジョアジーの侵略慾があまりに露骨にあらわれること

によってのみ可能なのである。資本家階級に対する労働者階級の徹底的な実力行動を組織すること。

は、労働者階級を行動の刺激にかりたてることになるし、それは警職法によって政治的に破産した岸の命とりともなりかねない。ここから「双務化には賛成だが内外情勢からみて改訂は慎重にせよ」という資本家階級の政治委員会に対する要求が生れる。またその政治委員会にも、いろいろな分派が生れる。だが彼らにあって意見の最大の調整点は「内外情勢の評価」すなわち「労働者をはじめとする人民諸階級がいかなる反応を示すか……」「政治的決戦ともいべきこの交渉の時期が、はたして適当であるか否か」「満身創夷となつた現在の岸政府が果して人民の闘いにたえうるか」ということであり、もしも、人民を偽瞞せることに成功し、労働者階級の闘いが強力になりえないという情勢をみたならば、急速に一致することは火を見るよりあきらかである。

したがって安保条約改訂に対する人民の闘いの大衆的展開は、緊急の必要事になっていく。自民党内の「中立政策に打開の道を見出そうとする現実的翼」なるものに期待をかけた「自民党内の有識の人士」の行動を支持したりすることは、問題の解決にならない。資本家階級のこの俊巡の中に、労働者階級の実力行動のくさびをうちこむことによって、帝国主義としての成長に不可欠の要石となっている改訂の陰謀を阻止せねばならない。

だが安保改訂の陰謀が、復活、強化した日本帝国主義の外への膨脹の要求と、アメリカ帝国主義者の反革命体制強化の策謀との合作によって企てられているという事実は、今日の資本制生産の客観的過程を政策的に反映したものに他ならないのである。だとすれば、それに対する抵抗は、ただそのような経済的發展の客体としてみられているにすぎない労働者階級が自己を積極的に表現すること——

# 炭労の闘いはなにを意味しているか

坂田 静 朋

## 一、春闘の様相はなにを

### 示したか

#### ▼炭労への挑戦▲

私鉄大手のストが中止になると同時に、ブルジョアジャーナリズムは、一斉に「春闘のヤマ終る」という宣伝を開始した。今年の春闘は「低調」で「盛り上らぬ」とわめきたて、資本家の願望を代弁して、労働者階級の氣勢をそぐのに懸命だった彼らは、この宣伝で春闘に止めの一撃を与えようとしている。

だが実際には、鉄鋼労連は八幡が脱落しても大手の富士、日鋼がいぜんとして重点ストを続け、紙バ労連王子では、昨年末結んだユニオンショップを認めない会社のまきかえしに対決しつつあり、炭

労は二三日から全支部無期限ストにはいるうとしている(三月二日現在)。

中でも炭労の闘いは、ここしばらくの期間の日本の階級闘争の命運を決するような意味をもつものといえるであろう。日本の労働組合の背骨といわれる炭労、その中でも最強の組織である三鉱連への攻撃は、日本の資本家階級の一大挑戦であり、またそれをいかに迎えうつかということは、日本の労働者階級にとって、一つの重大な試金石である。

だが、炭労の闘争は、このような一般的意味において敵と味方の対決点であるというだけではなくて、日本の階級闘争の現実の局面で特殊に重要な意味をもっている。

#### ▼警職法闘争は春闘に受け継がれてない▲

警職法闘争でやけどをした資本家階級は、年頭以来刺戟的な政治的攻勢をさけて、労働者階級を全体として労資協調の土俵にひきず

りこむのに主眼をおきつつ、こちらの出方を見すまして、一つ一つの政治的経済的施策を遂行してきた。

これに対して、社共両党と総評指導部は、警職法闘争で昂揚した労働者階級を、その階級意識をいかにして鋭く鍛えあげていくか、階級的組織をいかに強固なものにしていくか、闘争を通じて会得した攻撃方法をいかに豊富なものにしていくか、という内容で、現在の階級闘争を発展させるために導いていくのではなくて、警職法—安保条約改訂という概念的連関から、警職法闘争のエネルギー(それは社共両党の裏切りのため十分発揮され尽さなかった)を安保闘争のために「発展」させようとした。ちようど、安保条約改訂の問題が、もっと現実化した日にひき出すための、貯金でもするかのよう(そのことは、警職法反対国民会議の組織をどうするか、という問題にもっとも端的に表われている)そして春闘は、警職法闘争のエネルギーに肩透かしを喰わせたあとの真空の中に、全くの第一歩から「設定」されたのである。

#### ▼資本家に協力した指導者たち▲

このような形ではじめられた春闘が、そもそも敵の攻撃に噛みあって進められるはずもなかった。もっとも中心的な課題としてとりくまらるべき合理化反対闘争は、総評幹部によって、完全にわきにおしやられた。

春闘のスケジュールなるものの真先にやったことは、大会で何度も確認された原則を踏みにじる最賃制についての八人委員会の妥協であった。時を同じくして、全労との「労働戦線統一」の話し合いが始められ、職場では第二組合や御用幹部ともっとも鋭く対決してい

るまさにその時に、延々と労働憲兵との会合を重ねた。職場大会には、選挙のキャンパの議題が持込まれ、行動についての討論は添えものになってしまった。私鉄総連の悪名高き幹部、中でも東急では、他人の禪だけ借りて相撲もとらぬ協定を結んだ。共産党は例によって「行進」を春闘の「柱」にし、もう一本の柱の最賃制については、地評が正しくも総評幹部の妥協を非難したのを「セクト」だと攻撃した。

指導部のこうした指導は、春闘を巧みに外らして資本の支配を強化しようとした資本家階級の思う通りの、いや予想以上の結果さえもたらした。昨年夏、圧迫と弾圧と干渉が、立法で、政令で、露骨な暴力で、息継ぐまもなくひろがり、孤立した凄惨な闘争が火花のよう(明滅して、多くの人々が陰鬱に「暗い谷間」のことを想い出しつつあったとき、警職法闘争が一気に暗雲を払い、皇太子の婚約と景気の回復と滑稽な自民党内紛の漫画で晴ればれとした正月を迎えるようになり、それが今春には、自動電話の増設や高速自動車道路、東海道複々線の話などに喜んで耳を傾け、人情味溢れる社内報を大らかな気持で受取り、提案制度に積極的に協力するようになった)すれば、資本家どもの狙いはまずまず成功したものといつてよかつた。

#### ▼共産党は資本家を主人にした▲

「警職法闘争のとき、あさすれば岸内閣が倒れて、それからこうすればよかった」と一人一人の労働者に考えることをさせず、「社会主義国」の宣伝はするが日本のプロレタリア権力のことについては一言もいわずに、せいぜい「民族独立」ぐらいの夢しか与えない

なら、いかに賃金や仕事の不満があろうとも、労働者が警職法を粉碎した力を主体的にとらえて経済闘争をすすめることさえできないのは当然である。共産党がいくら言葉の上で「岸内閣打倒」のスローガンを並べたところで、警職法闘争が最高潮に達して岸内閣の命が旦夕に迫った瞬間に、アカハタで「参院選の方針」をでかかど報じて「来年の六月」に岸内閣を打倒しようというのでは、労働者が自分自身の力に不信を抱くのは当然ではあるまいか？

自称前衛党がかくのごとくであるとすれば、労働者は、自分自身を一個の細分化された無力な存在としか感じず、政治や経済については「お上」のやること、政府や会社のおえら方のする仕事、としか感じなくなるのは当然であろう。そして労働運動についても、せいぜいのところ、みるにみかねた暴政に対して「批判」し、「圧力」を加え、「変更を迫る」程度のものでししか理解されなくなる。労働者階級のもっとも革命的な部分がいぜんとして戦術左翼にとどまり、その理論的發展としては労働プランとか構造的改良の枠を出でない根拠はここにある。「対象、すなわち現実、すなわち感性が、客体あるいは直観の形式の下にのみとらえられ、感性的な人間の活動、すなわち実践としては、つまり主体的にはとらえられない」直観的唯物論の到達する頂点は、個々の個人と市民社会についての直観である、というマルクスの言葉は、ここでも完全にあてはまる。

### ▼戦術左翼の敗因▲

だから総評が、春闘を台風になぞらえて、「政府当局に台風のおそろしさを教え」、「しかるべき処置をしないと、台風の勢いをま

いる戦闘的労働者がある。そして彼らの表現を借りれば、「職場にはエネルギーがある」し、「問題は指導にある」のだが、戦闘的な労働者の立場はますます困難になりつつあるように思われる。それは、戦後十数年間となく闘ってきた職場では、組合意識もある程度高まり、たしかに「エネルギーはある」が、一人一人の労働者は、いぜんとして枠をはめられた企業内闘争や、「台風」の圧力で、要求をかちとることはきわめて困難になっていることを知っているからだ。「産業労働」三月号に紹介されている国鉄東灘分会のすぐれた闘争も、地本の執拗な妨害と闘いつつすすめられねばならなかった（「労働情報通信」NO・199）が、われわれが彼らの闘いを無条件で支援するのは当然のこととしても、彼らが「戦闘的には敵を軽視、戦術的には重視」という毛沢東の現象論しか与えられていないとしたら、その将来については楽観することはできない。

### ▼前衛党への結集▲

かつて職場闘争の積上げを誇った日産が、敵の攻撃によって粉碎されたあとにはなに一つ残らなかったが、これを単に官僚主義的おしつけ、と自己批判するだけだったら、一向に問題は前進しない。敵の攻撃と社民幹部の裏切りに抗して職場で闘争をつづけられるのそのときは、主体的な革命的思想の存在するときだけである。彼らは、たとえ粉碎され、一人一人に切離されたとしても、肉体的生命を奪われないかぎり、至るところで組織の中心になるだろう。職場のエネルギーなるものを引出すことができるのは、社民幹部の指導に期待できないとすれば、一般的な「指導」の有無ではなくて、革命的思想、革命的指導だけである。前衛党が存在しなかったこれま

すますます大きくするぞ」（「これからの労働運動」第二分冊・総評教宣部編）という発想で闘争に臨むとき、たとえ労働者階級を階級闘争の鉄火の中で鍛えようという戦闘性はもっていても、革命的展望を与えることのできない幹部は、「ストは伝家の宝刀だ。やってしまえばおしまい、やるぞ、やるぞというおどかしこそが効き目のあるものだ」という民同右派の主張に対抗しえないのは明らかである。マルクスのいう「新しい唯物論」の立場に立った政党が存在しなかったことが、実践的には左翼的であった高野を総評から追わせ、基幹産業をかくもおとなしく全労に手渡し、今また日教組役員から左派を追放したのであった。

警職法闘争は、「政府に一撃喰わしてやった」「完全な勝利」としてのみ理解され、口喧しい主人を女中がへこませてやったのと同じく、あとはまた平常の従属関係の下でまめまめしく働くだけの効果しか生まなかった。そして、春闘で給料値上げを要求はするけれど、「そうならならぬにまで文句をいってられないし」と、熱心に主人の商売を案じ協力する。こうした潮流が労働者階級の多数のものをとらえてくる。これこそ資本家階級が春闘に期待したものだ。

### ▼孤立する戦闘的幹部▲

もちろん、春闘で個々の単産でよく闘ったものがないわけではない。内外から春闘の中心の一つと目された鉄鋼労連では、産業別統一闘争を組み、例によって八幡が脱落してからもこれに引きずられることなく、富士、日鋼を中心に頑強に闘っている。

そして春闘といわずいつでも、各単産、各単組、各職場で闘って

での期間、刻々と資本の支配が強化され、ニエボン、社内報、提案制度、年金制度、社内預金などあらゆる方法でのHR・PRの強化とともに、他方では労働組合が圧力団体にまで墮落し、前衛党を僭称する手合いがこれに和するという状況の下では、経験的ではあれ、戦闘的に運動を發展させようとする労働者は、同情者は獲得できても、周囲の大衆の積極的支持をえて前進することは、ますます困難になっていきつつあったのである。戦術左翼の見通しのない方針は、彼らの孤立をいよいよ強めていかざるをえない。今年の春闘の過程は、このことを明らかにしたのである。

戦闘的労働者は、彼らの戦闘司令部である革同＝高野派や共産党に対する信頼がいつそうぐらつき始めた。これまで限定つきで頼りにしていた指導者たちが、実は全く空虚な存在でしかないのではなにか、という疑いを持ち始めたのである。模索が開始され、これまで一顧も与えなかったものがあらためて検討される。そしてその中から、マルクス主義の発見を通じて、あるいは現実の運動の過程を通じて、前衛党への結集に向う部分が生れてきつつある。結成後三カ月を経過した共産主義者同盟の現状は、このことを語っている。

## 二、そのとき炭労の闘いが……

### ▼炭労の闘争出現す▲

外面的に表われた春闘の全般的状況は、このような労働運動内部の動揺、総評指導部と社共両党の貴族化、労働者の多数の不活発化、戦闘的幹部の孤立——に輪をかけた。ブルジョア・ジャーナリ



ズムがこれを吹聴する。総評では、第五次、第六次の統一行動をきめたが、独自の要求を掲げて闘う単産の闘争がなければ、このような「統一行動」も形式化することは明らかである。三月一九、二〇日の統一行動には電通が実力行使を中止した。

こういふ状況の下で、炭労の闘争が、緊迫化した段階にはいつた。三月一九日、三井資本はこれまで示していた再建案について、六千名の人員整理を明らかにしてきた。長計協定を闘ってから二ヵ月もたたないうちに、三鉱連に対して再建案をつきつけ、一方八〇円の賃上げ要求に対して〇回答をもって報いた資本家側に対し、炭労は統一賃金を守り、賃闘と企闘を結合して闘う体制を作り、三鉱連を中心に全支部で数次の波状ストを繰返してきたが、二三日からの全支部無期限ストを前にして、その決意はいっそう固められた。この全山無期限ストは、初めから保安要員の差出しも極度に圧縮され、これまでにないきびしい体制で組まれていたのである。

### ▼全労働者階級の覚悟と奮起へ▲

炭労の闘いの決意は、ただちに闘争を継続中の鉄連、全造船、全鉱、私鉄中小、全港湾、紙パ、合化、電機労連、全国金属、全電線、車輛労連、公労協、国公、地公等の各単産の動向に影響を与えずにはおかない。炭労の闘いが、予定の規模で断乎として遂行されるならば、それだけでも重大な社会問題となるであろうし、私鉄、合化、公労協等の主なところがすでに妥結したとはいえ、正面衝突の紙バ、王子をはじめとして他単産の闘いが頑強に闘いぬかれるなら、春闘の様相は一変する。それは、昨年勤評闘争や王子、また中小企業も含んだ苦しい孤立した凄惨な首切反対闘争が、労働者階級

の意識を異様に目覚めさせておき、警職法闘争の急速な発展を準備したと同様に、単なる春闘の枠を越えて、全戦線的な大闘争へ発展するきっかけを作り出す可能性も生れてくる。

●春闘闘争の期間にもかかわらず、停滞した気分陥り、日々の生産過程の中でブルジョアの關係に思想も生活も捉えられつつあった大企業の労働者には、階級意識と共通の利益によって結ばれた整然たる産業別統一闘争の展開は、はっと目を開かせ頭を醒まさせる一撃となるであろう。それは彼らに、彼らの生活の一般的方向を示唆する。日本の全資本家階級の支援を受けた石炭資本と、三鉱連を中心に団結した炭鉱労働者の四つに組んだ闘いは、彼らもまたかつては資本家と互角の闘いを行ったという経験を感じ起させよう。

### ▼背骨を折りにきた▲

炭労に対する資本家階級の攻撃は、国鉄、全通、日教組に次いで、すでに昨年中から計画され、予定されていたはずのものであった。ところが炭労が、昨年の春闘を遙かに越えて賃闘を、闘い、警職法闘争の先頭を切り、これと同時に整然たる長計闘争、期末闘争、と相つぐ闘いを遂行し、彼らが攻撃の機会を見出しえぬまま、今日まで延ばされてきたのだった。しかし、昨春、一人二万四千円のカンパを出してわずか七七〇円を獲得したにすぎないのに一支部の脱落も出さず、そしてまた「王子は炭労が闘った」といわれるほ

どの共闘や、今春の鉄連の闘争にも富士鉄広畑に大量のオルグを送るなどの働きをし、官業労働者二〇〇万のスト権回復にはむしろ彼らの方が熱心なくらいだといわれる炭労を、資本家階級が黙って見ているはずがない。国鉄、全通、日教組に相次ぐ打撃を与えたあと、いよいよ日本労働者階級の背骨をなす炭労に、しかもその中心である三鉱連の組織の破壊に乗り出してきた、というのが今回の攻撃の本質であろう。

それは同時に、労働者階級にとってもそれだけの意義をもつ闘いであり、この攻撃をはね返すかどうか日本に階級闘争の将来が賭けられている。冒頭に述べ、前節で述べたように、それは一般的にだけではないで、現在の局面での特殊な意味において、そういえるのである。だが大衆運動は、意義とか政治的役割の訴えだけで前進するものではない。

### ▼闘いとは、やむにやまれぬもの▲

昨年末の長計闘争においても、「将来の首切りに備えて」などという悠長な考えからではなくて、年末から年初にかけて協定期限の切れる時を狙って資本家側が一斉に首切りを出してこようとするのを粉碎せねばならない、というさしせまった要求から闘いが組まれたのであった。いわんやまして、資本家陣営に協定をおしつけることによって労働者の状況を系統的に向上させる、といった構造的改良論などは全く無縁であった。だから、このような観念論者とはちがって炭労の労働者には、「協定」についてもなんの幻想も存在せず、協定などは形式的なものであり、こちらの力さえ弱くなったら、敵はいつでも遠慮なく破るであろうということを彼らは理解し

ていた。そして、三井や明治鉱業の再建案が出されるや、炭労の労働者は、「資本家の協定」なるもの本質が暴露した」と叫んだのである。彼らは、協定を闘いのテコとして用いながら、これを固定化したり自己目的化せず、すべては労働者と資本家の力関係によってきまることを、しっかりと把握しているのである。(東急の労働者諸君「休戦」協定を結んだからといって、安心するな！)

炭労の労働者は、今回の三井の合理化に対しても、自分たちの身にさしせまった、一歩も譲ることのできない攻撃として、これを迎えている。「三井の合理化案を粉碎しなかつたら、ただちに六千人の仲間を殺すことになる、そして、すぐさま他の山にも、攻撃がかけられてくる、そして企業格差を理由に統一賃金を破られる、会社の赤字にまで責任をとらされる、わが社わが山主義」が中をきかす、そうなら俺たちの炭労はどうなるんだ」と

### ▼内部の闘争を通じて闘争体制へ▲

しかし、炭労の闘争も、初めから労働者らしい意識に貫かれた戦闘的なものであるはずはなかった。戦後十年間、とくに六三スト以来鍛えぬかれた炭労にしても、今の局面で日本の組織労働者全体が置かれている状況から全くかけはなれたものであるはずはない。総評の基幹部隊ともなっていれば、総評主流の強味も弱味も炭労に反映してこざるをえない。昨年末の期末闘争にしても、三井の支払能力がないということで二回も分割払いを認め、これが炭労の統一闘争として闘われることになっていったのに妥結してしまったということについて、一月の中央委員会では、再三の質問が出されている。資本家側の攻撃は、炭労に対して、警職法後の政治状況の中

で、労働者階級の状況をにらみつつ、いかにして労働者を刺戟せず  
に労資協調の枠に引きずり込むか、という観点からかけられた。三  
井再建案は、新規採用中止、超勤の制限、能力向上、経費節約など、  
一見、きわめて消極的な形で示された。そして、これに対する三鉱連  
や炭労中央の態度も、初めから一致して反撃するというところに固ま  
ったのではなからう。回交を重ねるうちに、炭労の統一闘争と職場  
闘争をぶちこわし、職制の完全な職場支配と首切りを狙う資本家側  
の意図が明らかにされ、さらには標準作業量引上げや六千名の人員  
整理など、彼らの腹の中が明らかにされるにつれて、動揺する部分  
と戦闘的部分との闘争の中で、急速に闘争体制が固められていった  
ものにちがいない。現に、今でも三鉱連の幹部の中にも、よめい  
ている連中があるといわれている。だから問題は、いかにして戦闘  
的部分の力を強め、闘争の体制を強化し、外からこれを支えるか、  
ということにある。

### ▼裏切りの用意はできているか▼

この点では必ずしも、樂觀を許されない。それは、一つには総評  
指導部の動向である。彼らは、春闘を選挙前に終わらせるように仕組  
んでいた。炭労の非妥協的な闘いによって、春闘の性格が一変し、  
全労働者階級のエネルギーが、底知れず引出されてくるような、い  
つ終るとも知れぬ闘いに、本能的に恐怖を抱くだろう。そして、炭  
労内部の、妥協的幹部と協力し、闘争を打切ることをはかるに違  
ない。

三井資本が次々と出してきた苛酷な条件、すなわち、零回答から  
賃下げ(標準作業量引上げ)へ、「解雇はしない」から「勇退」募

### ▼敵はどこを狙ってくるか▼

すでに炭労中央からは、「一万円生活で三月の給料を四月中旬ま  
で食いのばせ。その後は、五月中旬までの労金からの第一次の融資、  
六月中旬までは二次融資の用意あり」という指示が山元に届いてい  
るといふ。炭労の労働者は闘争決意を固めている。これに対して、  
資本家側は、なんとかして三井の闘争と賃闘を切離そうとして、躍  
起になるにちがいない。炭労中闘は、すでに、一月二七日に三井の  
闘争を統一闘争で闘うことを決定し、二月二日には「賃闘と企闘  
は同時解決」の原則を決定し、「三井以外の各社が解決できる事態  
になっても、闘争体制はとかない」という基本方針を確認した。

一五〇万トンの貯炭を抱えているとはいえ、原料炭は野放し生  
産なのであるから、統一ストは資本家陣営の足並みを乱れさせるだ  
ろう。だがそれは同時に、好況の各社の労働者を誘惑する。資本家  
陣営がなにより恐れるのは、それよりもむしろ、炭労二〇万の総力  
をあげた実行行使それ自体である。資本家階級は、労働者の実力行  
動に、本能的に恐怖を抱く。なにが労働者階級の力を強化するか、  
ということについて、資本家の感覚は、労働者階級の前衛を僭称す  
る徒輩よりも、遙かに適確である。

### ▼社会の「秩序」を嘲笑せよ▼

労働者階級は、自分自身の要求を掲げて闘うとき、はじめて強く  
なる。しかも、搾取者にとって都合よくつくられた秩序に抗して闘  
うときに。資本主義社会において、労働者がストライキをするこ  
と、それは単に、労働力という商品の販売を拒否する、という以上

集へ、という条件を、資本家との取引きによってある程度引込めさ  
せることによって、「首切りは撤回させた」「賃下げは喰止めた」  
ということなどで闘いを打切る、ということも考えられないことではな  
い。

はじめから保安要員を極度にしばってあるのだから、自然発火、  
坑道崩壊などの事故も、予想されないことではない。そうなれば資  
本家側は騒ぎ出す。深刻な社会問題となることを恐れる総評幹部や  
炭労の一部幹部は、これを取引きの口実として、妥協工作を開始す  
るだろう。

第二に、社会党は、選挙前にして、もちろん、極力これをおさ  
えるだろう。共産党も、もちろん、これに異議をとらえるはずはな  
い。

妥協的幹部と右翼政党的逃げ腰に、決定打を加えるのは、資本家  
どもと政府である。

革命的労働者は、こうした予想される事態にもかかわらず、企闘  
と賃闘を一本で闘うという炭労の既定方針を守って、断乎として闘  
うことを主張せねばならぬ。北炭などの動揺がもしあったとして  
も、この方針を崩すわけにはいかない。そうなれば、春闘を望みの  
ままに導いた資本家どもは、選挙の平和的雰囲気の中で、労働者階  
級を議会主義的幻想に骨までひたすことに努め、総評幹部と左翼政  
党もこれに和して、階級闘争を選挙の「独自活動」にすべて解消す  
るだろう。

革命的労働者は、指導者の今の言葉を言質として捉えて放さず闘  
争体制を固めて闘いぬき、もし裏切れるものがあればその姿が万人の  
前に明らかになるようにしなければならぬ。

の意味をもつ。それは、現存の社会の秩序そのものに対する公然た  
る反抗であり、現存の社会の否定である。資本家は経営し労働者は  
働く、という世の常識を、一時にせよ打破り、こうして秩序を破壊  
することを利用して有利な地位を獲得する、という行為は、必然的  
に労働者の頭に社会の仕組みについて疑うことを教える。だからこ  
そストライキは、資本家政府の許可をえて行う街頭デモや集会など  
よりは、遙かに革命的なのである。(蛇行デモが交通を混乱させ、  
通行人に迷惑をかけるということで反対し、さらには警職法闘争の  
さなかに、正規の手続きをとらずに国会にはいったということで大  
衆集会で学生を非難する「志賀国会議員」のような共産党は、革命な  
どという非法的な、多くの人に迷惑をかけることは夢にも考えてい  
ないにちがいない。)

王子製紙だけの闘いでさえあのように恐れ、ゼネストをこの世の  
終りのように恐怖する資本家は全く正当なのであり、同時に、スト  
ライキを単に改良的要求獲得の手段としてしかみない指導者は、た  
だの改良主義者にすぎないのである。

### ▼資本家の戦慄を故あるものにせしめよ▼

問題は、これまでのストライキに資本家の恐れるほど「革命のヒ  
ドラ」を忍びこませることが行われず、前衛党が資本家の恐れる以  
上に革命的思想を吹きこむなどということは、絶えてなかったこと  
にある。いやそれどころか、資本家側の「某月革命説」の宣伝に対  
し、共産党は、「しかり、共産党は労働者階級が権力奪取に立上る  
のを指導するだろう。その機会は何カ月か先ではなくて明日にも来  
るかも知れない。ただし、資本家が宣伝するように、それは共産党

の恣意によってできることではない」と答えるのではなく、「当面の運動は共産党の指導によるものではないこと」(無力無能の告白)、「その目標は経済要求であり共産党はこれを支持するだけ」(1)だと誓うのが常であった。

炭労の統一闘争が、未だ流動的な状態にある労働者階級の戦列を揃え、その力を引き出す可能性があるとすれば、資本家階級の恐怖は倍加する。警職法闘争から今の状態まで、労働者階級の丸め込みがどうやら成功しそうになっているときだけに、それはなおさらのことだ。われわれの立場から見ても、それは同じことだ。そして、選挙をひかえ安条約の問題を抱えている今の政治情勢では、これは一層大きな意味をもっている。

### 三、安条約の闘争を担うもの

#### ▼経済闘争と政治闘争のすれちがい▲

警職法—安条約—春闘—参院選という直観的唯物論者あるいは観念論者の机上の図式を、資本家階級の思惑にしたがって、警職法—春闘—安条約—参院選という順序に並べかえたとしても、労働者階級の力がどこからも引き出されてくるわけではない。階級闘争は、現実の運動自体から発展する。共産党や、北京仕込みの東の風や西の風の「理論」をたまたま拾ってきた労働運動指導者は、春闘の目標に安条約改訂阻止や日中国交回復を掲げ、現実には資本家と対決している労働者の闘いとは全く別の次元から、「政治的目標」を持ち込んだ。職場で直面している労働者と資本家どもの運動自体

が、そうした政治目標を作り出していることを蔽い隠し、賃上げ闘争だけではなくて民族独立のための政治的階級的闘争もやれといったは、労働者を街頭にひきずり出した。かつては政治闘争の独自性を否定して、経済的要求の闘争がそのまま平和擁護闘争だといったことのちょうど裏返しとして、生産点での実力行使ではない政治カンプニアを強調したのである。労働者の切実な要求を残らず支持し、これを発展させれば革命の力になるといった、かつての主張はいつ自己批判されたのか？

#### ▼民族闘争と階級闘争の接木▲

彼らは、安条約の問題を、日本資本主義発展の内在的論理と市場争奪戦における国際ブルジョア間の協定として説明するのはなく、「わが国」の従属か独立か、戦争か平和かの問題として説明する。同様に、ILO条約の問題を、国際ブルジョア間の矛盾を利用して闘争を有利にすすめるものとして説くのではなく、国際ブルジョア間の国際市場のための協定機関であるILOを単純に賛美し、わが国の資本家階級も「外国」なみに開明的になれば、と訴える。この徹底した愛国主義からは、賃闘で赤裸々に資本家と対決している労働者階級の立場に立った「政治的目標」が出てくるわけがない。だからこそ、超階級的、民族的、国家的利害の問題が、賃金闘争、合理化反対闘争、権利闘争を闘っている労働者階級の階級的利害の問題に接木されるのである。

#### ▼階級闘争の主体は一つしかない▲

安条約等の政治的闘争は、現実の階級闘争を闘っている労働者

階級が、他ならぬ自分たちの階級の利害と結合してそれらの政治的問題を考えるとき、はじめて階級的な闘争となるし、そうでなかったら強力なものとはなりえない。そうでなくとももちろん、たとえ共産党のように、民族的観点(=ブルジョア思想)からこれら政治的問題に熱情を注いで、運動を起そうとするものもあるであろう。そしてそれは、ブルジョア思想に捕われた一定数の小ブルジョアや労働者の一部分を動員するかも知れない。だがそれ自体としては、このような運動は革命的観点からは全く無意味である。ただそれが、全社会的な運動を引き出すきっかけとならないかぎり(一般に、広範な社会的な運動は、条件さえ熟していれば、どんなつまらぬきっかけからでも起りうることは歴史の示す通りである)。

安条約改訂反対運動は、現に闘っている労働者—その中心が炭労だ—の行動を頑強につづけさせ、盛りあげ、拡大し、さらにそれに、全面的な政治宣伝を行うことを抜きにしては考えられない。現実の階級関係を変えていくことを考えているのだとしたら、その主体的力量をもっているものは、現在では、炭労の現実の闘争、運動、ただだからである。それは、賃闘と企闘を闘っている炭労に、「戦争」と「失業」とを強引にくっつけたようなやり方で安条約を持ちこむことではなく、階級的視点に立って、全面的政治宣伝を行うことによって、彼らが賃闘、企闘を一層革命的に闘うだけでなく、安条約についても賃闘、企闘で引き出されたエネルギーで取組ませ、労働者階級の他の部分をひきずっていくことができるからである。かつて論議されたように、「目前の経済要求から遡って政治的課題を明らかにする」のかあるいは、「経済要求とは別個に、政治的課題を示す」のか、というような技術的問題ではな

く、階級的視点に立って、国際的規模の資本家階級と労働者階級との闘争として宣伝煽動するか否か、という問題なのである。

炭労の闘争には、日本の労働運動の帰趨が賭けられている。あらゆる産業の、あらゆる職場の革命的労働者は、あらゆる方法で炭労の闘いに支援と激励を送らねばならない。自分の職場の闘いを盛上げ、これをあらゆる方法で炭労の闘いと結合させねばならない。一昨年の春闘で、国鉄の闘いが炭労の闘いと結合しようとするや、資本家階級は炭鉱資本に強制して、わずか二日のうちに五百円も譲歩させ、国鉄の闘いから切離そうとした。電通にいかなる事情があったにせよ、あいまいな交渉継続の約束だけで二〇日朝に実力行使を打ち切れ、鉄連とともに炭労と共闘する代表的単産であった公労協の闘争を、事実上終結に導いた電通幹部の方針は、全く理解し難いものであった。革命的労働者は、このような幹部を暴露し、批判し、革命的行動を彼らの行動に対置して労働者を前進させなければならぬ。

炭労の労働者諸君、がんばれ！ 妥協するな！ 統一闘争で闘いぬけ！

すべての労働者は、炭労の兄弟をあらゆる方法で支援せよ！ あ

らゆる方法で共闘を組め！

すべての革命的労働者は、共産主義者同盟に結集せよ！

(三月二十一日記)

# 芸術の戦術左翼

——批評的批評の批評——

森 茂

(1) 「エイゼンシュテインとチャップリン」と書いたとする。「ニューヨークの王様」と「戦艦ポチョムキン」が同時に封切られている、という以外には、この二人をならべて書く理由はなにもない、などと思つたら大間違いだ。

無声映画から出発した、というより主要な作品を無声映画で作り上げた二人、しかも、一方はこの無声映画という形式を、十月革命の歴史的な生活体験とみずから経験した二〇世紀初頭における芸術のもっとも進んだ試みを基礎にして、水兵の反乱を、世界プロレタリアートに訴える革命的映画として作り上げ、しかも一九二五年という世界革命とソヴェト権力にとって決定的な年に「ポチョムキン」を完成して、以後ごくわずかの映画しか作らなかつたエイゼンシュテインと、他方無声映画という型式から、地方のドサまわりの喜劇の経験と、貧民窟での生活経験をもち、数十の傑作を作り上げたチャップリンとを、芸術論、映画

論の問題としてとりあげることは、しかも問題をだれもそのようにとはとりあげないのだが、はなはだ興味ある対比なのだ。

だがここであつかうのはそのことではない。そのようにとりあげぬ批評そのものの批評である。

(2)

たとえば、現代日本の批評の最左翼「現代批評」に武井昭夫が、ちようど代々木共産党の分派闘争がやると激化しはじめた今、彼がかつて書いたどの批評よりも「政治的」な（五〇年の分派闘争のときは別だ）芸術批評をのせている。

「抵抗と革命と芸術」と銘うったこの批評で武井は、ポランド映画「地下水道」と「影」とから、どちらも「政治における指導者の責任」、「政治指導の誤謬」を、その映画の核心としてとり出してみせる。

芸術の場でこのように政治を批判できるポランドに、

武井が「あふれるような希望を感じた」ことについては、今はいうまい。たとえ、政治の批判を政治の批判として、指導の責任を追求し、大衆を結集して、新しい革命的エネルギーを社会的につくりだすかわりに、不可避的に人々をアトム化する映画館のくらがりの中で、まがりくねった画面からしか政治の批判が行えないということが、しかもその批判が、ほかならぬ「影」の追求でしかないということが、なんとなさけないことだということ、今は二の次のことだ。

この武井の批評は、たしかに正しい面をついている。この種の「政治的」芸術批評の最左翼の名を恥かしめない。けれども、批評がここで終るとき、そこには、芸術と芸術活動について本当に深く考えているものなら、かならず抵抗を感じるあるものが、ちようど、この批評に本当に政治闘争について深く考えているものなら、だれしもある種の不満を、文芸批評じゃないか！と軽侮したくなる不満を感じるように、あるのである。

一言にしていえば、「だからどうなのだ」というあの問が、これまでのすべてのマルクス主義芸術批評に、芸術家ら加えられる不妊の理論への直観的反撥が、芸術家をとらえるのである。

(3)

マルクス主義芸術批評が有効かどうかの問は、マルクス

主義の権威が、上るか下るか、どちらであれ境目のときはかならず論じられた。

五五年から六年にかけて当代最高の芸術的教養をもつブルジョアイデオログの一人、高橋義孝教授によってなされたマルクス主義芸術論への攻撃は、六全協後のマルクス主義の権威の全面的瓦礫を、芸術の面で仕上げたものだ。このとき戦士だった野間宏や除村吉太郎は今や沈黙し、若き戦士佐々木基一をはじめとする理論家たちも、マルクス主義理論をいつかまたとりださねばならぬものとして倉庫になげこんでしまったようにみえる。

このときから流行の左翼芸術批評は、ただの感想でなければ、芸術の中から政治と人生の批評を見出す、この「政治的」芸術批評だけになってしまった。自然主義芸術批評から発生した「人生いかに生くべきか」の答を現実生活にでなく芸術に求めるといふ奇妙な方法を、この左翼批評家たちは、「政治はいかにあるべきか」の問におきかえたのである。武井はおそらくその最左翼である。

この人々、ほとんどまじめな内面的な芸術愛好家たちである彼らは、芸術を、それを作った芸術家の政治的、人間的不徹底さにおいて、批判し、また批判する。左翼であればあるほど、多くの芸術を批判し、ついに最左翼は、すべての芸術を批判する。それだけみていると、私などは、まるで現在の物的関係の中に人間関係が封じこまれたブルジョ



プロ社会の変革が、暴力によるブルジョア独裁の打倒や、そのための政治闘争やをぬきにして、人間の主体性の批判だけによってなすとげられるような錯覚に、ついつい陥ってしまうのだ。

賢明な作家はこの潮流の上に、「人間の条件」の解明をなしとげて、莫大な資金を左翼出版のためにかき集めてきている。

けれどもこれらの批評は、残念ながら芸術のごくかぎられた部分、小説と映画と詩の一部だけをあつかい、音楽や美術や彫刻やには、まるでそれは芸術ではないかのように無関心である。

映画の中でもある種の映画には、たとえば、だれもが今世紀最大の傑作とほめ立てる「戦艦ポチョムキン」には「すごい」「革命的だ」というほめ言葉しか送らず、「ニューヨークの王様」では、チャップリンの進歩と反動の両面を分析して、まじめな読者に涙をロクに流せないようにすらしてくれるこの分析力は、ここでは一向にはたらかないうだ。

(4)

エイゼンシュテインの「チャップリン論」というのがある。モンタージュ理論を「克服」して、ついでに創作能力まで克服した四五年のエイゼンシュテインのこの傲慢な「大論文」は、チャップリンとはなんの関係もない「二つ

の社会体制」の比較論をのぞくとほんの少しになってしまふが、そこには「政治的」芸術批評家には気に入らぬまいが、チャップリンの「眼」と「子供との近親性」のことだけしか書いてない。

それが私には大変気に入るのである。

「ニューヨークの王様」からやさしい「眼」のかわりに「やさしい微笑」を、「子供との近親性」のかわりに、「大げさな身振り」をとり出せば、この映画の核心はもうとりだせた、と私は思う。これと技術との関連、これをどのように「社会」に、「現実」にもっともらしくはりつけるか、が分析されればそれでこの芸術の分析は終る、と思ふからだ。

芸術の批評は、直接の芸術活動から出発せねばならない。人間の芸術活動をのぞいた芸術批評など悪魔にくわせろである。

「今世紀最高の傑作」「戦艦ポチョムキン」ほど、まともな分析の少ない「傑作」もないと思う。人生的左翼批評家は、沈黙を守りつづけているように思う。

しかし、この人々は、この反乱とそれをあつかう映画を十七年二月革命の兵士の行動にくらべれば「蛆の湧いた肉のために勃発するような、たんなる兵士の反乱」と語った、もつとも革命的な批評家のいることを、知らねばなるまい。

このトロツキーのように、「ポチョムキン」を革命性の点で批判すれば、多くの点を抽出することができよう。たとえばいわゆる偶然的なものによりかかるその素材の排列法について、なぜ神父はあゝのときあゝのように出てこねばならぬか、なぜ蛆の湧いた肉事件の前に、政治の批判をもつとせぬか、等々。

しかし、こんな批評に、いったい創造的ななにかがあるだろうか！ 君らの政治に対する批評は、政治に対してやってくれ！ 政治がいやなら、芸術の中でそれをやるような卑しいまねをやめろ！

私には、芸術「ポチョムキン」の核心として「技術」、世界革命のパトスに魅せられていた時のエイゼンシュテイン自身ももっとも興味をもっていた「技術」に、すなわち、絵の連続である無声映画を、どのように人間活動一般に近づけて見せるか、絵を遠近法を發明に押しやったその同じ問題の解決として、エイゼンシュテインの発見したリズムに見出す。「オデッサの階段」。この映画の核心部分となるべきこの階段に行つて、エイゼンシュテインは、自分で何十回もかけ上ったりかけ下りたりしたという。

このとき彼の心は、人間労働の成果としての階段が感覚に与えるリズムを、革命的行動の象徴として無声映画に用いようという発見の喜びにふるえ、そこに湧くイメージをどのような画面として仕上げるかの考察にはちぎれんばか

りにふくらんでいたにちがいない。

エイゼンシュテインの革命的パトスそのものの、の批判は、必要なことだろう。けれどもそれはそれであって芸術の批判ではない。エイゼンシュテインの革命についての認識の批判もまた必要だ。だがそれは政治討論の問題である。

なにが「ポチョムキン」を成り立たせたかの、その把握にはならぬのである。

(5)

「芸術運動に何か政治的価値があるとかんがえるような、プロレタリア文学運動以来の政治的幻想の一切を否定しなければならぬ。このような政治的幻想によつてもたらされる害毒は、はかり知れないものがある」

一人の誠実な詩人が、独立でこのような思想に達している、ということを知ることが小躍りしたくなる喜びを感じさせる。

そうだ芸術を政治にまでひき下げることによって、芸術そのものを墜落させ、政治を芸術にひき下げることによつて政治についての無関心、うすぼんやりした関心を合理化しようとした、そしていまだにしている馬鹿者どもに、非マルクス主義の刻印をはっきりと押しつけよ！

芸術の戦術左翼ではなく、今や革命的左翼によつて発見されたこの真理を明確に、理論的に把握することが必要で

ある。  
単なる芸術批評のあり方の問題でなく、芸術の本質的把握の問題である。

ここでは、なん十年にもわたって芸術家を迷わせ、政治闘争を芸術によって行うなどという馬鹿げたことを考え出させ、マルクスがはつきりと語ったように、共産主義とともに死滅すべき芸術と芸術創造の契機である苦悩とを、共産主義、芸術の名の下に、温存させることを許す、あの「芸術認識論」に死を与えねばならない。

芸術を認識の方向からでなく、感覚の方向から、芸術を客体としてでなく、主体的活動として、展開することが必要である。ヘーゲル美学をベリンスキー的に倭少化するのでなく、マルクスの改作せねばならぬ。

だが、もちろんそれは時評に許されることではない。

ただここでは、あの芸術の戦術左翼に対する攻撃の火蓋が切れるだけである。

彼らは芸術を批判する。個々の芸術を批判し、批判し、批判して、ついにあらゆる芸術を批判する。芸術家の中にはある欠陥を、小ブル性を、いやというほどあばき立て、ついに厭世観におそわれて、いよいよ批判を強め、そしていよいよ政治から遠ざかる。

けれどもあらゆる芸術の批判は、芸術そのものの批判にとつてかわることはできぬ。

芸術における革命的立場は、個々のあらゆる芸術作品の批判にあるのではなく、芸術そのものの批判のうちにある。

ちようど、政治における革命的立場が、個々のブルジョアジーの政策とプロレタリアートの闘いの戦術に対する批判にあるのではなく、ブルジョアジーのプロレタリアートの実存諸条件そのものの批判にあるように。

\* 「世界映画資料」一月号

\* トロッキー ロシア革命史第一巻

\*\*\* 吉本隆明「芸術的抵抗と挫折」中の「芸術運動とは何か」

## プロレタリアートの世界観はなにか？

### 「哲学教程」批判

佐久間 元

#### まえがき

「共産党宣言」が革命的な共産主義の主張を公然と宣言して以来、百余年をへた今日、世界プロレタリアートの真の解放を追求する革命的共産主義者が改めて、「プロレタリアートの世界観はなにか？」と問わねばならないことの理由はどこにあるのだろうか？ それは若きマルクスが、「ドイツ人の解放は人間の解放である。その解放の頭脳は哲学で、その心臓はプロレタリアートだ。哲学はプロレタリアートを揚棄せずには実現されず、プロレタリアートは哲学を実現せずには自己を揚棄できない」（ヘーゲル哲学批判）ということ

題をプロレタリアートの解放と結びつけたのと同じ事情が今日存在しているからである。一方には、三十余年の長きにわたって国際共産主義運動の裏切りの指導をつづけてきた公認の共産主義運動指導部が、一国社会主義論と平和的共存の政策を、基本原則としてふたたび確認し発展させている現状がみられる。

他方には、ソ連邦の最新の哲学的著作「マルクス主義哲学の基礎」が、「レーニンの中の、傑出したマルクス主義者スターリンをふくめてかれの弟子たちが、マルクス主義哲学をさらに発展させた。スターリンの晩年に個人崇拜とむすびついた一連の欠陥とあやまりがあったにもかかわらず、かれの労作はマ

ルクス主義思想の貴重な獲得物をなしている」とこのように憶面もなく語っているという現実がある。それゆえに、一定程度の枠内において、危機を回避するために上からなくずしめにおこなわれた「スターリン批判」（ソ連邦共産党第二〇回大会）が、ただたんに個人崇拜の弊害を客体的に評価したにすぎず、その上、より反動的でさえある一連のフルシチョフ政策を推進しつつある現代の共産主義者が、同時にスターリン主義哲学（このマルクス主義哲学の客観主義的偏向、俗流化そのもの）を公認の哲学としてふたたび確認し、国際プロレタリアートを欺瞞している

のもみやすい道理であろう。わが国には戦後ただちに、現代マルクス主

義の客観主義的偏向を「唯研ミーンチン派的偏向」の旗印の下にはげしく追求しはじめた一潮流が存在した。だがこれらが純粹にマルクス主義の理論戦線の分野にその範囲をかぎられていたかぎりにおいて、それは哲学の党派性の名の下に政治的弾圧に屈して、ただたんなる理論上の一潮流にとどまるほかはなかったであろう。

しかしながら今日では、事情が異なる。昨年の勤評、警職法のたたかいの中で代々木共産党の労働者を欺瞞する裏切りのな政策を最後の確認し、あまつさえ、国際的規模での今日の公認の共産主義運動指導部の日和見主義への転落をも同時に確認して、本質的にプロレタリアートの新しい前衛党たるべき性格をもった共産主義者同盟に組織的にも結集した革命的翼がすでに存在している。したがってこのような現実には、かつての批判的批判家をして今日の眞の革命家たらしめるであろうし、理論はここにプロレタリア大衆をとらえて物質的な力となるにちがいない。

これこそがここにふたたび、「プロレタリアートの世界観はなにか？」という素朴な問題を発して、マルクス主義哲学の本質を語らねばならない現実的根拠なのである。しかも同

時にこのことは、マルクス主義哲学の革命的な本質の確認として再生しないわけにはいかなのである。

「哲学がプロレタリアートのうちにその物質上の武器をみいだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神上の武器をみいだす。そして思想の電光がこの素朴な国民の土壤を底ふかくつらぬくやいなや人間へのドイツ人の解放は成就されるだろう。」(マルクス)

### 一、フルシチヨフ路線の客観主義

中近東諸国、就中イラク情勢をめぐって、最近ナセル主義者による国際共産主義の陰謀が語られているときに、フルシチヨフはソ連邦共産党第二十一回大会の壇上から一連の弁解を試みた。かれはこれらアラブ諸国における一連の動きを、けっして「共産主義者の陰謀」によるものではないときっぱりと否定して、同時に「ソ連は他国内政に干渉しなかつたし、また干渉するつもりもない」と、かつてのスターリンの平和的共存にもとづく外交政策の原則を改めて、国際ブルジョア

の前に誓いさえたのである。そしてフルシチヨフは、「すべてのことを『共産主義者の陰謀』とみなすのはばかげている。社会発展の諸問題は、もっとほりさげて検討すべきである。社会の発展には客観的な法則性がある。そして、それらの法則性は民族の内部に利害関係の異なる諸階級が存在することをものがたっている」と、このように**社会の客観的法則性**について語り、これをもってナセル主義からする非難にたいする責任の回避をこたえたのである。

生きた現実の人間にかかわりのない、まして共産主義者には縁もゆかりもない社会の客観的法則性が存在することから、「帝国主義的抑圧から解放された諸国にこのような過程が(労働者・農民と資本家との争い——引用者)発生するのは、あれこれの政党的意志や願望によるものではなく、諸階級とそれらの利害関係が存在しているため」であるという重要な結論が生じてくる。そして、フルシチヨフによれば、これらの過程とは「植民地諸国で帝国主義的抑圧が掃蕩されてのち労働者は労働時間の短縮、賃金の引上げを達成しようとのぞんでいる。農民は、もっとおおくの土地を手にいれようとし、また自分の労働の

成果を享受する可能性をえようとのぞんでいる。そして労働者と農民は政治的権利をもつことをのぞんでいる。ところが資本家はおもとおおくの利潤を自分のものにしてしようとのぞみ、地主は手もちの土地を保持しようとのぞんでいる」というようなものである。

そして、これが社会の客観的法則性による歴史の必然的発展であるならば、どうして共産主義者がこの過程にたいして責任をもちえようか？ まして「内政不干渉」を基本原則とする現代の国際共産主義者になんの責任があるというのか？ したがって、ナセルの非難はいいがかり、というものではないのか？

しかしながらフルシチヨフが、ただたんに「共産主義者として、われわれが、またすべの進歩的な人びとが、**社会正義**のためにたたかっているものに共鳴するのは、いうまでもない」(強調は引用者)と声明するだけで現実には、「われわれは、われわれとアラブ連合共和国の一部の政治家たちとのあいだにイデオロギーの分野で見解のちがいがあつたことをかくすものではない。しかし、反帝国主義闘争の問題では、また、植民地主義から解放された諸国の政治的・経済的独立を強化する事業では、また戦争の危険にたいするた

かいでは、われわれの立場は、これらの政治家の立場と一致している」という態度をとっているというこの事実が、レーニンの柔軟な戦術として肯定するわけにはけっしていかないものである。なぜならば、今日の公認の共産主義運動指導部は世界の情勢を、社会主義と資本主義との二大体制間の多少とも恒久的な平和的共存としてとらえているばかりか、このことから、中近東諸国を平和地域として、これら諸国の指導勢力を平和勢力として把握することによって、これら諸国における民衆の革命的昂揚を自らその民族的国境の枠内におしとどめ、民族主義者の足下にひれふしさせてしまっているからである。したがって、かれらの柔軟な戦術なるものは、ブルジョア・ジャーナリズムも認めているように、これら諸国における共産主義運動を犠牲にするものであつたし、民衆を欺瞞する以外のなにもでもなかったのである。中近東諸国における昂揚は、これを資本主義本国内におけるプロレタリアートの革命闘争と結合させて世界革命を目指して発展させられる戦略的展望によつてではなく、逆にこれをおしとどめるやり方によつて民族主義者の思いのままに消滅させられたしまおうとしている。

しかも、このような裏切りのな政策をとりながら、これら諸国における最近の一連の動きを「共産主義者の陰謀」ではないと、わざわざ弁解して、「社会の客観的法則性」にその罪をなすりつけるやり方は、**弁証法は、その本質上、批判的かつ革命的である**と主張したマルクスにたいする直接の背信といわざるをえないのである。

したがって、社会の客観的法則性のフルシチヨフ流の把握においては、社会発展の歴史の必然性だけを強調することによって、世界革命を指向するプロレタリアートの主体的な契機の能動性を無視して、例えば中近東諸国における階級闘争を、その**自然生長性**にゆだねるほかないであろう。だから今日の国際共産主義運動の公認の指導部は、中近東諸国における共産主義運動を平和的共存の外交政策に従属させてしまうことによつて、直接にこれら諸国の民衆の利益を裏切っているだけではなく、また、裏切りのな「内政不干渉」の基本原則をわざわざ大声に声明することによつて、革命的なプロレタリア・インタナショナルリズムからの日和見主義への墮落を完成してしまつてさえているのである。そして、社会の客観的法則性の非弁証法的

なフルシチエフ流の把握こそが、社会発展の  
実体である人間主体の存在をみることででき  
ない、そして、現実の国際的規模でたたくわ  
れている階級闘争における階級主体「プロレ  
タリアートの主体的、能動的役割に依拠する  
ことをなさない現代公認の共産主義運動指導  
部の客観主義の典型なのである。

いまや国際的規模での公認の共産主義運動  
指導部の思考方法における客観主義的偏向は  
まったく許しがたいまでに裏切りのなものとな  
っている。そして、かれらの物質的な基盤  
が、平和的共存を利益とするいわゆる社会主  
義諸国の経済的現実のうちにあるのならば、  
その精神的な支柱は、ソ連邦の最新の哲学的  
著作「哲学教程」に端的に看取しうるマルク  
ス主義哲学の客観主義化の産物としてのスタ  
ーリン主義哲学のうちこそあるのでなければ  
ならない。

## 二、「哲学教程」にみら れる客観主義

### ——物質の哲学的概念——

点に要約してしまい、こうしてマルクス主義  
哲学の弁証法性を極端に図式化してしまい、  
全意識の外に独立した客観的実在について主  
張することのみに終始するところの、そして  
このことよって弁証法的唯物論から裏返え  
されたヘーゲル主義への、さらには機械的唯  
物論への転落を完成していったところの似非  
マルクス主義者の破産の歴史であった。そし  
て、この時代は、マルクス主義理論の領域が  
政治的党派性の大義名分よって踏み荒され  
独断論を否定する超独断論がかつぎまわれ  
た時代であった。

このような裏切りのな時代が現在でもつづ  
いている！修正主義退治の旗の下に！

▽「哲学教程」の拠るところはなにか△  
レーニンが指摘したように（唯物論と経験  
批判論）、マルクスとエンゲルスは、フォイ  
エルバッハをもふくめた唯物論の機械化、俗  
流化に反対して、弁証法的、史的唯物論を確  
立するために多くの努力をほらしたのであつ  
たが、これとはちがって、晩年の、自然弁証  
法の確立に努力をほらしたエンゲルスの場合  
には、その努力の重点が唯物論の根本原理の  
確認におかれていたのは当然であった。した  
がって、哲学の最初にして最後の問題である

▽「創造的マルクス主義」の客観主義△  
唯物論は、精神と自然との関係について、  
発生史的には自然を本源的なものとみ、認識  
論的には、思想は、外部の物質的実在を正し  
く反映する能力があるという立場にたってい  
る。

「物質とは、人間にその感覚においてあ  
たえられており、われわれの感覚から独立  
して存在しながら、われわれの感覚によつ  
て模写され、撮影され、反映される客観的  
実在をいいあらわすための哲学的カテゴリー  
である。」（レーニン、唯物論と経験批  
判論）

たしかに哲学的唯物論の根本原理は、客観  
的実在の、このような無条件の容認のうち  
こそあるであろう。弁証法的唯物論は、それ  
までのフォイエルバッハをもふくめた機械的  
唯物論を止揚するものではあるが、このこと  
によつて、この唯物論一般の根本前提をぬき  
にするものであつてはならないにちがひな  
い。しかしながら同時に、物質の哲学的概念  
を物質の客観的実在性という規定のみに限定  
すること、そしてこのことから自己運動する  
物質をたんに客観的実在として自然科学的分  
析の対象に限定すること（「哲学教程」を見

思惟と存在、精神と自然の問題を、専ら教育  
的に叙述することが、マルクスの後の晩年の  
エンゲルスの主要な関心であった。そしてこ  
のことからもエンゲルスは弁証法の客観性を  
証明するのに、実例で満足した。

「弁証法のこの側面には一般に（例えば  
プレハノフのばあい）充分な注意がほら  
われていず、対立物の統一は実例の総和と  
考えられていて（「例えば、種子」、「例え  
ば、原始共同体」というように。エンゲル  
スも同じだが、しかしそれは「大衆化のた  
め」……である）、認識の法則（および客  
観的世界の法則）とは考えられていない。」  
（レーニン、弁証法の問題によせて）

そしてまた、一九〇八年のレーニンの場合  
かれの関心は専ら、経験批判論の側からする  
マルクス主義哲学のこの側面への進撃から唯  
物論の根本原理を、またエンゲルスを擁護す  
ることにあつたのである。

したがって、「哲学教程」（スターリン主  
義哲学の最新の成果）の関心が、ただこの側  
面のみあるとするならば、われわれ、革命的  
な共産主義者の関心は、ここに必須化され  
た哲學における客観主義の克服にこそあるの  
でなければならぬ。

よ）、このようなとらえ方は、物質の哲学  
の概念の客観主義的把握として、断固として  
斥けなければならないであろう。

「哲学教程」がそうであるように、現代物  
理学のあれこれの成果を例証し、バゾフに  
よつて意識の機能を明らかにするといふ、こ  
のような専ら自然科学の分析のみをもつてし  
ては、けつして物質の哲学的概念を把握する  
ことはできないばかりか、逆に、物質の自然  
科学的分析をもつて、その哲学的把握にか  
えることによつて、自己運動するがゆえに主  
体的な物質をただ客観主義的に把握してしま  
うよりほかはないのである。

そして、「創造的マルクス主義」という政  
治的スローガンの下に推進されてきた三十余  
年来のマルクス主義哲学の歴史は、孤立して  
一時的に民族的国境の枠の中に閉じこめられ  
ることを余儀なくされた十月社会主義革命の  
成果を、現状の客観主義的受容にとまらな  
く「国社会主義論と平和的共存政策」とよつて喰  
いつぶしてしまつた公認の共産主義者の思考  
方法の哲学的普遍化の、みじめで、裏切りの  
な歴史であつた。

それは弁証法的唯物論を、単純に七つ（弁  
証法について四つ、唯物論について三つ）の

### ▽マルクス主義哲学における自然△

「われわれは唯一つの科学、即ち歴史の  
科学を知るのみである。歴史は二つの方面  
から見られて自然の歴史と人間の歴史とに  
区分されることが出来る。けれどもこの二  
つの方面は分離すべきではない。人間が生  
存するがぎり、自然の歴史と人間の歴史と  
は相互に制約しあう。」（ドイツ・イデオ  
ロギー）

実にこの点こそマルクス主義の創始者た  
ちの課題があつた。なぜならば、弁証法的唯  
物論が自己を旧唯物論から区別する点、人  
間の生存から必然的となつた人間と自然との  
相互制約から生ずるこの側面にこそ存在する  
のだからである。

マルクスが問うように、「産業と商業がな  
くて、どこに自然科学があるだろう？」（ド  
イツ・イデオロギー）。たえざる感性的な勞  
働と創造、この生産こそ感性的世界全体の基  
礎なのであつて、この感性的活動が中断され  
たときにも、なるほど外的自然の先行性はや  
はり存続するにちがひないが、しかしなが  
らこのような区別は、人間を自然から区別さ  
れたものとみなすかぎりにおいてのみ、意味  
をもつてにすぎないのである。したがつ



て、「人間をとりまく感性的世界は、直接に永遠の昔からあたえられたところのつねに自己同一な事物ではなく、産業と社会状態との産物であるということ」(同上)が忘れさられるならば、そのとき、マルクス主義における物質の哲学的把握は客観主義化されざるをえないのである。

「哲学教程」が自然科学的分析の成果のみを利用して、直接的に物質を規定するとき、たとえ「フォイエルバッハについてのテーゼ」が引用されようとも、それはなんらの意味をも有するものとはならないであろう。このソ連邦の最新の哲学においてとらえられた自然は、「客体または直感の形式のもとにのみとらえられ」(マルクス)た自然にすぎない。かれらの思考からは人間がぬけおちている。

#### ▽物質のレーニン概念△

レーニンはヘーゲルの「論理学」を研究しながら、「有と本質とは、このかぎりにおいて、概念の生成のモメントである」とするヘーゲルにたいして「ひっくりかえすこと——概念は、物質の最高の産物である。頭脳の最高の産物である」(哲学ノート)と評註を加えた。

哲学史的にみれば、ヘーゲルの「概念」が

認識論的には、カントの物自体の直接的な内在化によって、また存在論的には、スピノーザの静的実体と主体的契機を介入せしめた動的な実体とすることによって確立されたものであるのたいして、レーニンはこの概念をふたたびカントの超越的な物自体に返すことによって、カントの物自体とヘーゲルの概念との弁証法的統一をおこなうことによつて、それを転倒したのである。そして、このようなヘーゲルの概念のレーニンの転倒によつて、弁証法的唯物論の原理である「物質」の哲学的概念が正しく確立されたのである。

物質がレーニンによつてこのように把握されたということは、認識論的には、物自体は相対的真理と絶対的真理との弁証法的統一において、無限に認識されていく、超越的にして内在的な、内在的にして超越的な客観的実在であるということの意味するものである。

他方、存在論的には、物質は、人間の主体性をその最高の発展段階において生みだすところの、主体性一般を契機とするところの動的な自然的実体であるということの意味するものである。

そして、物質はそのうちに主体性原理をも

つがゆえに、その自己運動の必然的展開の最高の発展段階において人間の主体を生みだすことができるのである。したがって、主体性原理をもつということが、感性的な労働と創造をおこなう人間主体の意味にのみ解されることは許されないであろう。そうではなく、それは自然における主体性としてとらえられねばならない。「おのおのの段階のプリミティブな主体性が発展してくる。これは本質的な主体性とはいえないが、しかし主体性が社会になつてはじめてぼつたりあらわれたのではなく、このような発展を通じて主体性があらわれる」(武谷三男、経済学と物理学の交渉)という、この意味における主体性なのである。

物質のうちに主体性を介入させるばあい、その主体性をこの意味において把握せず、それが人間主体であり、そのようなものとして物質が「人間主体を介入せしめた自然」であるかぎり、機械論の前提する固定した客観的存在に、たんに認識過程の運動性を適用しただけの、認識の発展を存在の発展にすりかえるだけのヘーゲル主義へと転落することをまぬがれない。マルクス主義哲学における主体性の把握はもろんこのようなものであった。

#### (経哲手稿)

このようにして若きマルクスは、人間の自己創造の一つの過程として把握したところに陳外の規定の埒内でのヘーゲル弁証法の肯定的な契機を認めているのであるが、同時にこのことがヘーゲルにあっては、人間の本質が「自意識」であるとすると観念性のゆえに、労働がたんに観念的な抽象的形式においてしかとらえられていないという批判を加えているのである。だからマルクスにあっては、「人間は直接に自然本質である」というように、現実の人間としてとらえられる。

自己運動する物質は、天体的自然から生物的自然へ、生物的自然から社会的自然へと自己発展をとげ、この最後の過程において、主客の交互作用すなわち物質的生産あるいは対象的「生産的労働」の必然的所産である人間的自然として思惟する意識的存在となり、そしてまた、この人間的自然を媒介として自己を実現してゆくことによつてはじめて、物質の自己運動は真に自由となり発展的となるのである。だからマルクスが指摘するように、人

てはならないはずである。そして、スターリン主義哲学がその認識論主義的偏向のゆえに客観主義化をもたらしたものとすれば、このような立場は逆に、それが現代マルクス主義の客観主義化への正当な抗議をふくんでいるにしても、その存在論的偏向のゆえに主体主義的偏向をおかしているものといわざるをえない。

したがって、ヘーゲルの「概念」のレーニンの転倒は、存在論的には、物質がその自己運動において天体的、生物史的発展段階を経過し、その最高の発展段階である社会史的過程において、自己の他者たる人間的自然を媒介として自己の「本質」——普遍性を自覚し、逆に人間的自然は自己の「本質」を物質とするということの中にこそ意味をもっているのであり、他方、認識論的には、物質は、物質から概念への物質的発生の展開の後にはじめて自己のあらゆる規定性を無限に対象化し現実化する可能性を獲得するところの、それ自体としては合理的にして非合理的な、非合理的にして合理的な、無規定的な自然として把握されるということを意味しているの

でなければならない。

論的把握こそが旧唯物論から決定的に区別されるマルクス主義における「物質」の哲学的概念なのであって、それが弁証法的唯物論たる理由である。そしてこの立場からは、「哲学教程」のように、物質をたんに客観的実在としてだけとらえて、自然科学的分析の対象にするのは許されるはずもなく、物質は自己運動するがゆえに主体的な物質として、先づ哲学的にとらえられ、次に客観的に実在する自己運動の法則を自然科学を媒介にして規定していくということが当然必要となるのである。

#### ▽人間化された自然△

物質が自己のあらゆる規定性または実在性を全面的に展開するのは、即ち物質が自己の普遍性を自覚するのは、生産的労働の歴史的结果として思惟が生産されるときである。

「ヘーゲルの現象学とその究極的成果である運動し生産する原理としての否定性の弁証法で——偉大なものは、したがって、じつにヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程としてとらえ、対象化をむかいあわせにおくこととして、つまり外在化として、そしてこの外在化の揚棄としてとらえていることである。このようにしてかれが労働の

間と自然との交互作用がはじまって以来の客観的世界は同時に、それ自身が人間実践の歴史の所産であり、人間の実践によって媒介された人間化された自然なのである。

われわれをとりまく感性的世界をこのようなものとして弁証法的にとらえることができず、裏返えされたヘーゲル主義的に、それゆえ機械的に、ヘーゲル以前の把握するところに、ソ連邦の最新の哲学的著作である「哲学教程」の客観主義的、機械論的俗流化の一切の秘密が存在するのである。

「いままでのすべての唯物論（フォイエール、バハのもふくめて）のおもな欠陥は、対象、現実、感性がただ容体または直感の形式のものとのみとらえられて、感性的な人間の活動、実践としてとらえられず、主体的にとらえられないことである。したがって活動的な側面は、唯物論とは反対に抽象的に観念論——これはもちろん現実的な感性的な活動をそのものとしてはしらない——によって展開された……」（「フォイエール、バハについてのテーゼ、一」）

### 三、疎外とは何か？

マルクス主義哲学の本来の役割は、人間の無限の発展をおしとどめているあらゆる疎外にたいする敗北なき斗争である。そしてこの立場こそが、マルクスによって「経哲手稿」等の初期の著作から「資本論」に至るまで、一本の赤い糸のごとくに貫らぬかれたものであるはずだった。

「現代のある修正主義者たちは、マルクスとエンゲルスの基本的な、成熟した著作をひくくみて、かれらの初期の著作をもてはやしている。かれらは、これらの初期の著作を、そこから革命的な内容をとりきって、抽象的な観念論的な『ヒューマニズム』の精神でとりあつかおうところのみである。しかしこの試みは役にたたないやり方である。なぜなら、すでにこれら初期の著作で、マルクス主義の創始者たちは革命的プロレタリアートの立場にしっかりとたっているからである。」（「哲学教程」）

ソ連邦の最新の哲学はこのように語るのだが、これはまことに奇妙にきこえはしないだろうか？ マルクスがヘーゲルから受け継いだ偉大なもの、疎外概念についてはただの一言半句もふれることなく、しかもこれら初期の著作の革命性を云々し、あまつさえ、客

観主義化した自己の立場を棚にあげて、革命的な、主体的なマルクス主義者にいわれのない罵倒をあげせかけているのが、党派性豊かなこれらのスターリン主義哲学者なのではないのか？

マルクス主義哲学の最初の仕上げの中でとりあげられたこの「疎外」概念は、このような意味からも、われわれ主体的な真の共産主義者にとって、ふたたびとりあげて忘却の彼方からこの現実にはききもとどくる必要がある。

「ヘーゲルが疎外という哲学的概念をふたたびとりあげた。しかし、マルクスがその概念にその弁証法的、合理的かつ積極的な意味をあたえた。そしてそれこそマルクス主義の本質的な、しかも有名であるわりにまだあまり理解されていない哲学的局面である。」（「マルクス主義」）

公認の共産主義運動指導部にたいして「党活動停止処分を受けたことは、活動の自由を与えられたことと解釈する」といってたたかっている戦闘的なマルクス主義者ルフォーブルが、かつてこのように語ったとするならば、われわれ真の共産主義者は、公認のマルクス主義哲学の中でこの「疎外」概念がまった

く疎外されているのは、**新らたな疎外**が、いわゆる社会主義諸国において深化しつつありそれゆえこれをおいかくすためなのだと声を大いに語らねばならないだろう。

マルクスは次のように主張した。「労働の生産物とは、対象において固定化された物的ならしめられた労働であり、それは労働の対象化である。労働の実現は労働の対象化である。国民経済学的な状態では、この労働の実現が労働者の非現実化に、対象化が対象の喪失および隷属に、獲得が疎外、外在にみえるのである」（「経哲手稿」）と。

労働の実現が、労働者が餓死においやられるほど、それほどはなはだしく非現実化としてあらわれるのはなぜだろうか！

それは生産と所有との根源的な統一を実現する無階級のな社会から、この根源的な社会的生産の疎外形態としての様々な歴史的な現実形態が生み出されたところに、私有財産が成立し、生産と消費との社会的な統一がやぶれて、階級支配と搾取が発生したところに根拠を有しているのである。したがって「私有財産は、疎外された労働の、また自然および自分自身に対する労働者の外的関係の、産物であり成果であって、その必然的帰結」（マ

ルクス）なのである。

労働者の労働は資本家のために驚異的な作品を生産するが同時に、自分のためには赤貧を生産するにすぎない。しかし、疎外はたんに結果としてあらわれるのではなく、また生産の行為においても、生産活動そのものの内部にも現われている。

疎外された労働の下では、労働は労働者にたいして外的である。だから労働においてはかれは幸福ではなく不幸を感じる。さらに人間は一個の類的存在であるにもかかわらず、（というのには、生産的生活とは類的生活そのものであり、自由な意識的な行為が人間の類的生活であるのだから）疎外された労働は、労働、生活行為、生産的生活そのものを、人間にとって、たんに欲求を、物質的生存の維持という欲求を、充足するための手段としてだけあらわすことによって、人間から類を疎外してしまうのである。そして一般に人間からその類的存在が疎外されるということの意味は、ある人間が他の人間から、どの人間的存在からも疎外されるということのうちにある。

そしてまた、疎外された労働というこの現実には、人間にとって最も本質的なものである

人間の思惟と諸観念さえも、人間以外のところから生ずるような外観をもたらしさえるのである。

「宗教において、人間の幻想、人間の脳髓、人間の心臓の自己活動が、個人から独立して、すなわち一個の疎遠な、神的または悪魔的な活動として、個人にたいしてはたらきかける。」（マルクス）

かくして、人間の諸物神との関係は、人間存在とその生産物との真の関係をおいかくしてしまい、自己からもぎはなされること、自己を喪失することとしてあらわれるのである。

「人間の自己疎外態としての私有財産が積極的に揚棄されたものとしての、またそれゆえに、人間によるそして人間のための人間の本質の現実的獲得としての、それゆえに、社会的な、すなわち、人間的な人間としての人間の意識的に生じた、そして従来の発展の全成果の内部で生じた、自己にむかっただけの完全な還帰としての共産主義。この共産主義は、完成された自然主義人間主義としてあり、完成された人間主義人間主義としてある。それは人間と自然との、また人間と人間との抗争の真実の解決

であり、生存と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個体と類との斗争の眞の解決である。それは歴史の謎の解決であり、この解決を自認する。」(経哲手稿)

### 四、客観主義をいかにして

#### 克服するか

すでにみたように、マルクス主義の客観主義は史的唯物論の領域においてのみならず弁証法的唯物論のマルクス主義哲学をまさに特徴づける根本の点において(マルクス主義哲学において「物質」をいかにとらえらるかという)、はっきりとあらわれている。

現代マルクス主義哲学は、物質を旧唯物論と同じに、非弁証法的にしか把握できないのみならず、また疎外という重要な概念をとりあげようとするのである。そして、疎外された社会の革命的実践による止揚、疎外された人間の疎外の止揚による眞の人間性の回復をプロレタリアートによる自己自身によってなしとげていく共産主義は、このことによつて直接に裏切られざるをえないであろう。一般にフルシチエフ・トリアッチ路線とよ

ばれる今日の国際共産主義運動の公認の指導部の思考方法は極めて客観主義的であり、この意味でもはやそれはマルクス主義者の思考とはとてもいえないようなものとなつていゝ。直接に世界革命を裏切る一国社会主義建設の強行によつて必然的に価値法則が貫徹する社会主義社会もはや階級が絶滅されたと宣言されているにもかかわらず強大な国家権力を維持している社会主義社会をつくりあげざるをえなかつたソ連邦の共産主義者は、最近の二十一回党大会において恥じしらずにも共産主義社会の建設について語りはじめた。ここにおいてかれらは、生産力の高度の発展について、したがって七ヶ年計画の壮大な展望について語っている。

しかしながら、眞のマルクス主義者にとつては、生産力の高度な発展について語るのには資本主義の革命的打倒の直後にこそ必要なはずであつた。マルクスが指摘したように、共産主義の前提は生産力の高度の発展であり、そうであればこそレーニンが、十月社会主義革命の前後にたえず、いくつかのヨーロッパ先進資本主義諸国の社会主義革命について考へ、これを援助してきたのであつた。ところがレーニン死後のスターリンは、一九二三年

のドイツ革命の敗北のうちに生れた「資本主義の一次的、相対的安定」という現実を客観主義的に把握し、それを絶対化することによつて、一国社会主義建設と平和的共存の政策を強力に推進した。かくして国際プロレタリアートの意識的な主体的な革命実践のうちに、敗北的な、客観主義的な現状維持のスターリニスト官僚の裏切りがはじまつたのである。したがって、結果的にいえば、今日の「第三インター」の諸国共産党が一国社会主義論と平和的共存政策にあいかわらず依拠しているかぎり、かれらの思考方法は客観主義的たらざるをえないのである。

しかしながら、むしろ逆に次のようにいわれるべきであろう。今日の公認の共産主義者の思考方法が客観主義的であることは、いわゆる社会主義諸国に物質的基盤を有するのであり、プロレタリアートの世界的な革命的斗争を裏切りつづけてきたかれらは、客観主義化された非マルクス主義哲学を、その精神上の武器として、と。マルクス主義のこの客観主義的偏向にたいするたたいは、すでにわが国においては、「季刊理論派」と俗称されている一連の理論家たちによつて意識的に追求されてきてい

た。しかし、これらの潮流も、戦後の社会主義の世界体制化という小ブル的平和主義的雰囲気の中で、その鋭さをすりへらされてしまひ、個々ばらばらに分断されてしまった。そしてこの成果は、「スターリン批判」以後に現在の姿をもつて再生したのである。現在は何のような姿をとっているか? その特徴はどの点にあるのか? それはすでにふれたように、マルクス主義

の客観主義化にたいするたたいが、ただだんに理論戦線上のたたいとしてたたかわれるだけではなく、現実的な革命実践の鉄火の中でたたかわれているという点に最大の優越性をもっている。すなわち理論と実践を媒介する前衛的組織が現在すでに存在している。だからかつての一潮流は、その成果と欠陥を、世界革命を指向するプロレタリアートの革命的実践の中で余すところなくためされ

のりこえられるであろう。プロレタリアートの世界観は客観主義的偏向を理論的にも、実践的にも克服しつつある眞の共産主義者によつて回復された革命的マルクス主義として再生し、世界革命をたたく国際プロレタリアートをとらえて、その精神上の武器となるであろう。

### 社会主義青年労働者同盟中央機関紙

## 青年労働者

旬刊 七号まで発行 一部十円  
一六号 B3判 四ページ  
七号 // 二ページ炭労特集

社会主義によるプロレタリアートの解放をめざす革命的青年労働者の機関紙。

電通、電機労連、自治労、日教組などの職場闘争の現状、闘争方針、中小企業の組合づくりの経験、その他多彩。

月ぎめ送共五〇円。活版化近し。

申込 東京都文京区元町一の七世界労働運動気付 社青労同

### 革命芸術の会に結集せよ!

今日、生産力の驚異的な発展が芸術活動を人間労働の中に未曾有の範囲で広げておりながら基本的にはプロレタリアートの抑圧の道具でしかない。プロレタリアートの芸術を創造するための行動を、革命的な芸術家は急速にはじめなければならぬ。その趣意で、過去のあらゆる芸術についての批判であり、プロレタリアートの立場に立つ芸術家の結集体として革命芸術の会がつけられた。

革命的芸術をめざす者は結集せよ!

資料 イ、討論資料 ロ、革命芸術・芸術論叢書No.1 連絡先 東京都文京区元町一の七世界研究気付革命芸術の会

# 共産主義建設の展望における

## 第二十一回党大会の意義

曾 木 晴 彦  
姫 岡 玲 治

### 一、フルシチョフの共産主義哲学

- 一、フルシチョフの共産主義哲学
- 二、国家は死滅しないか
- 三、「共産主義ソ連」と七カ年計画
- 四、平和共存路線は階級闘争になにをもたらすか

「同志諸君、わが国がその発展のあらたな時期にはいった現在……」と、きわめてセンセーショナルな一大カンパニアである第二十一回大会において、このように語ったフルシチョフは、「共産主義社会の物質的・技術的土台をつくりあげること、社会主義的生産諸力をあらたに力強く高揚させることがこの時期におけるわが国にとって根本的な実践上の課題である」と強く主張した。

資本主義社会の後に生れる共産主義社会は本来、資本主義的外被を爆破せざるをえないまでに発達した生産力の高度な発展を前提とするのであって、もしそうでなければマルクスがいつているように、「ただ欠乏だけが一般化され、したがって窮乏ともにもまたも

や必要物のための争いがはじめられ、そしてふるい汚物がそっくり再生するにちがいない」(「ドイッ・イデオロギー」)のである。しかしながら、資本主義が帝国主義時代に突入して、十月社会主義革命が遅れた後進国であった当時のロシアで開始されたとき、「社会主義的プロレタリアートの小ブルジョア的同伴者が非常に多く、プロレタリアートの文化水準がたかくない」(レーニン)ロシアを、共産主義社会へ成長転化させるためには、この問題はどのようにして解決されねばならなかったのだろうか？ もちろんそれは、ヨーロッパのいくつかの先進資本主義諸国における社会主義革命にひきつがれて、世界社会主義共和国として完成されねばならなかったであろう。レーニンは、その死に至るまでたえずこのことについて疑問の余地なく明瞭に語っていたのである。

しかしながら、レーニンの死後、ドイツ革命の最後の敗北を契機としてしまった国際プロレタリアートの革命的昂揚の波の退潮は、「資本主義の一次的、相対的安定」をよびおこした。しかもスターリンはこの現実を、主体的、革命的にはなく、客観主義的に敗北主義的に受けとめて、一国社会主義の建設を強行し、平和共存の外交政策をとって、国際プロレタリアートの革命的昂揚を自らおしつぶしてしまつたのである。

「社会主義ソ連」は、このような裏切りの直接の産物にほかならない。したがってそこにおいては、後にみるように、マルクスが「たつたいま資本主義社会から生れて、たばかりの共産主義社会」(「ゴータ綱領」)と規定した社会は存在しなかったのである。そしてこのことから「社会主義から共産主義への移行」について語るフルシチョフの一切のこまかしが生みだされてくる。フルシチョフ

は、「社会主義から共産主義への移行と関連するマルクスレーニン主義理論の諸問題は、とくべつ重要な意義を帯びてきた」とのべて、「まず第一に、共産主義の二つの段階、社会主義から共産主義への成長、転化の法則性にかんする問題」にふれた。

この問題に関しては周知のように、マルクスが「たつた今資本主義社会から生れて、たばかりの共産主義社会」と「それ自身の基礎の上に発達したところの共産主義社会」(「ゴータ綱領批判」)というように述べている。そしてこれは「資本主義社会と共産主義社会との間には、一つの社会から他の社会への革命の時期が横たわっている。それに応じてまた、一つの政治的過渡期があり、そしてこの過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のものではない(同前)」(同上)とマルクスがのべたところの過渡期をへたのちにあらわれてくる「共産主義社会」そのものの区別にすぎないのである。しかしながらフルシチョフが誇らかに宣言するソ連邦の社会主義は、そのような過渡期を経過したのちにあらわれる社会主義社会(共産主義の第一段階)というよりは、むしろ過渡期そのもの、しかも疎外された形態における過渡期そのものといったほうがより適切であろう。

だから、「社会主義ソ連」にあつては、それが世界革命を放棄した結果として、マルクスのいう「あらゆる点において、すなわち経済的にも、道徳的にも、はたまた精神的にも、それが生れてた母胎であるところの旧社会の母斑をまだつけている」(「ゴータ綱領」)社会の基本的特徴を実現しておらず、そこでは新たな疎外が進行し、共産主義社会の第一段階から第二段階への成長転化が、「社会主義」から共産主義への移行として、種々、歪曲せざるをえない



のである。すなわち、そこではさまざまな疎外形態が止揚されるのではなく、フルシチヨフのいう共産主義社会にまで受け継がれていさざるをえないという奇妙な現象さえ生んでくる。

それだから、「共産主義社会は、われわれが発展した資本主義諸国の生産水準を追いこし、あらたな、資本主義におけるよりも、はるかに高い労働生産性を確保するという条件においてのみ、実現することができる」と、このようにフルシチヨフが主張し、「これはまだわれわれの運動の終着点ではなく、資本主義との競争における決定的段階であるにすぎない」と註釈を加えたとしても、それはせいぜい、いわゆる社会主義体制内の問題であるにすぎず、フルシチヨフの規野からは、いまなお帝国主義の極枯のもとに苦吟している国際的規模のプロレタリアートの運命は、完全に消え失せてしまっているのだ。おそらくは、いや疑いもなく、現在の公認の共産主義運動指導部のもとは「七カ年」後に、全世界的なプロレタリアートの解放はおこなわれえないだろう。かくして、一方には、帝国主義支配下の苦しみみちたプロレタリアートの存在、他方には、輝かしい共産主義社会の存在、という途方もない事態が出現するというのか。真のマルクス主義者であるならば、もちろんこのような未来図をえがくことは絶対にできないだろう。

共産主義の真の目的は、「人間を人間にとっての至高のもの」(マルクス)とする、疎外の止揚による真の人間性の回復である。そしてマルクスが、「人間からその類的存在が疎外されるという命題は、ある人間が他の人間から、どの人間も人間的存在から疎外されるということの意味する」(「経哲手稿」)とのべているように、帝国主義支配下のプロレタリアートが疎外されているという現実

は、必然的に「共産主義」ソ連における人間の疎外をもたらさざるをえないだろう。

「もしできるものならば、われわれの計画の『批判者』たちに、わが国とおなじほどの大規模の、国民消費の増大を計画しうる資本主義政府の名前を、せめて一つだけでもあげてほしいものだ。賃金据置きのまま、いや賃金をさらに引上げて、しかもなお労働時間の短縮を計画しうるようなブルジョア国家の名前を、できればあげてほしいものだ。」フルシチヨフはこのように大見栄をきるのだが人工惑星の打上げにせよ、生産力の急激な上昇にせよ、すべてが帝国主義のそれと比較されて「社会主義」の威信をますために利用されている。しかしながら、これはちょうど、資本主義社会においてプロレタリアートが、デパートのきらびやかなショーウィンドの品物を横目でみて素通りせざるをえないのと同様の効果しかもたらさない。社会主義革命を経過した国の偉大な発展は、それがプロレタリアートの全世界的な解放を指向するものであるかぎりにおいてはじめて、プロレタリアートの革命的エネルギーの源泉となりうるであらう。しかも、たんなるショーウィンドの効果においてだけではなく、現実的な物質力として世界革命を援助するときにのみ、プロレタリア国際主義は強固に発展し、ここにはじめて全世界的規模の「真の人間性の回復」が準備されていくであらう。

したがって「社会主義ソ連」から共産主義ソ連へというソ連邦の現実、世界史的存在としての共産主義というマルクス主義の根本原則からの背理であり、実現不可能な大ボラ以外のなにものでもないばかりか、同時に共産主義を疎外された人間の疎外の止揚として把握せずに、唯物主義的に把握する誤謬のあらわれなのである。

弁証法的唯物論と史的唯物論から人間を脱落させてしまっているスターリン主義哲学の客観主義を一身に体現しているフルシチヨフの思考の中には、愛国主義的匂いさえする「アメリカに追いつき、追いつく」生産力の増大という事実においてのみ、共産主義の実現をみる馬鹿げきった誤謬があるのだ。このような思考においては、共産主義の前提が共産主義そのもの、ととりちがえられているのである。

しかし、あるいはフルシチヨフの命題を次のように解釈しうるかもしれない。すなわち、七カ年計画による生産力の増大と共産主義社会の建設は同時に、社会主義体制の増大する優位性のもとの全世界的な社会主義への移行をとまなうものである、と。主観的願望としては、たしかにそうであるかもしれない。しかし、資本主義の全世界的打倒による共産主義への成長転化は、物神化された「社会の客観的法則性」によって自然成長的に実現されることはけっしてありえないだろう。それはただ激しい階級闘争にプロレタリアートが勝利するときのみはじめて実現されるものであって、階級主体の意識的なたたかきを現実的契機とするのである。

しかるにフルシチヨフを立役者とする公認の前衛組織、諸国共産党は、平和共存を基本原則として、共産主義運動の利益をこれに従属させている。したがって、国際プロレタリアートの利益よりも小ブル平和主義による現状維持の利益が先行している。多少とも恒久的な平和共存の政策によって社会主義体制の資本主義体制にたいする優位性が益々現実的なものとなり、それに勇気づけられた諸国民の圧力によって帝国主義ブルジョアジーが、その政策を転換するのを期待するのは空想的社会主義者だけにできることではあるまい

か？ かれらには、「社会の客観的法則性」による歴史的必然性だけが頼りとなるのであり、そのための時をかせぐことだけしかできないのである。しかも現実には、プロレタリアートの意識的能動性を客観的法則性そのものの中に捉えることができないために、日々世界革命を裏切りつつあるのだ。

世界革命の遂行による世界社会主義共和国の実現を指向しない共産主義論は、ただたんに一片の夢物語であるということにとどまらず、プロレタリアートにたいする反革命的な欺瞞であらう。

かくしてフルシチヨフの「共産主義ソ連」の展望は、疎外の止揚による真の人間性の回復を理念とする共産主義ではなく、人間の脱落した、生産力の増大のみを至上のものとする唯物主義的な似非マルクス主義哲学、主体ぬきの歴史的必然性という客観主義に導かれる似非共産主義にほかならないことがあきらかであらう。

## 二、国家は死滅しないか？

「社会主義革命が勝利したのちも、社会主義のもとで、国家は維持されるばかりか、もし資本主義諸国と資本主義陣営とのこつており、したがって、帝国主義者がわが国や他の社会主義諸国を襲撃してくる危険がまだとりのぞかれないならば、一定の歴史的条件下のもとでは、共産主義のものでも国家は維持されるということは、マルクスレーニン主義理論と歴史的経験とによって、確立されていることである。」(スースロフ)

第二十一回大会においてスースロフはこのようにのべたが、この

ことはとくべつに目新しいことではない。なぜなら、一九三六年にスターリンが「人間による人間の搾取は永久に廃止された」とのべ三八年に「ソ党史」が「ソ連邦が新しい発展の時期に入り、すなわち社会主義社会の建設を完成し、共産主義社会に漸次的に移行する時期」に入ったとのべたこの時期にスターリンは、「共産主義の時期にも、わが国には国家が保存されるだろうか。——しかし、もし資本主義的の包圍が掃き除けられなければ、もし外からの軍事的攻撃の危険が絶滅されないならば、保存されるであろう」と主張していたのだから。しかし、国家の死滅がおこらない共産主義(第二段階としての)社会なるものがはたしてマルクス主義における共産主義社会といえるだろうか？

本質的には、国家は階級社会における特殊利害と共同利害との矛盾にもとずいて、個別および全体の現実的な利害からきりはなされて、幻想的な共同性として、一つの独立な姿をとった共同利害であり、実体的には、武装した人間の特殊部隊、監獄その他を権力機構としてつづ階級支配の機関である。したがって一般的には階級の消滅とともに国家は存在しなくなるのであるが、これは突然におこなわれるものでももちろんなく、「国家の死滅」という漸進的な過程をたどらざるをえない。マルクスが指摘したごとく、資本主義から共産主義への転化の時期には一定の過渡期が存在し、この時期の国家はプロレタリア独裁の国家となる。レーニンがこのうえもなく明瞭にのべているように、プロレタリア独裁は、「より強力な敵にたいする、すなわちブルジョア階級にたいする、新しい階級のもっとも残忍な、もっとも痛烈な、且つまったく仮借するところのない戦争」(「左翼小児病」)であり、「抑圧者を制圧するための、支配

階級としての被抑圧者の前衛の組織」(「国家と革命」)なのである。プロレタリア独裁の国家は、転覆されたブルジョア階級の必死の抵抗を排除するための暴力的な権力ではあるが、この多数者による少数者の抑圧は、権力を握る側が多数であることから、「非常に簡単な『機関』をもってしても、いや、ほとんど『機関』なしに、特殊の機構なしに、単純な武装した大衆の組織(さきまわりして言えば、労働者・兵士代表ソヴェトのような)によって、搾取者を抑圧することができる」(「国家と革命」)のであって、その意味ではそれは「過渡的国家であり、すでに本来の意味での国家」(レーニン)ではなく、「半国家」ともよばれるべき性質の国家なのである。そしてこのプロレタリア独裁の国家は、一、すべての国家公務員の完全な選挙制とリコール制。二、国家の全公務員の報酬の労働者賃金の水準への還元。三、コンミュニオンは議会的制度たるべきでなく、立法と執行とをかねた行動的団体たるべきこと。四、民衆からかけはなれた軍隊や警察を民衆自身の直接的武装をもっておきかえる。という四原則の上たったコンミュニオン型国家とならねばならない。

ソ連邦の国家形態がいかにこのコンミュニオン型国家から遠いものであるかについてはのちにみることにして、ここでは「国家の死滅」という点を、先ずみることにしよう。多数者たるプロレタリアートによる少数ブルジョア階級への政治的抑圧は、政治的過渡期から無梯級の共産主義の第一段階への突入と同時に、単純な管理機能にとつかわられるだろう。「共産主義は、その第一の段階、その第一の階梯では、まだ経済的に完全に成熟したもので、資本主義の伝統や痕跡から完全に自由なものではありえない」(「国家と革

命」ということから、ここでは「ブルジョアの権利の狭い視野」が保存され、消費手段の分配に関するブルジョアの権利は、「もろろんまた不可避的に、ブルジョア国家の存在をも予想する」(同上)のである。「ブルジョア階級のいない——ブルジョア国家」としてこの段階の機能は、そのもっとも主要な部分が、労働者自身による記帳と管理に還元されてしまっている。この意味では、それは非政治的国家とも、半ブルジョア国家とも、よぶことができるものであり、そしてこの段階においておこなわれる不法行為にたいしては武装した人民がこれにあたることによって、「人間のあらゆる共同生活の簡単な基本的な諸準則をまもる必要」を、きわめてすみやかに習慣としてしまい、そのことによって、国家の完全な死滅を準備するのである。

#### 41 共産主義建設の展望における第二十一回党大会の意義

共産主義の第一段階は、その本質上、民族的国境の枠内では実現されえない。それにもかかわらず、「社会主義ソ連邦」は一国社会主義の強行的建設をもって、包圍された状態においてこの段階を生みだしているとい説されている。「共産党宣言」がのべたように、革命はまず一国的規模で完成されるであろうから、プロレタリアートの権力奪取に成功した一国が、残余の帝国主義諸国の包圍のもとに孤立させられるということも充分に考えられることである。十月革命後のロシアがそうであった。しかしそうであるならば、主として対外的な軍事的機能の面から国家権力の益々強化される事態もありうるのだろうか？ もちろんこれは社会主義ではないといわねばならない。しかも多少とも長期的な展望において、このように孤立させられた社会主義について語ることは許されないうだろう。世界的規模においてでなければ、この段階の実現の可能性は否定されねば

ならない。現実には存在する国家形態としてのソ連邦は、過渡期からぬけ出しえないために、種々の新たな疎外を生みだしつつある疎外された過渡期国家であって、すでにコンミュニオン型国家から変質をとげたものといふべきだろう。

次に、コンミュニオン型国家からの変質をみてみよう。第一の一切の官吏職員の選挙制やリコール制について。スターリン憲法にもとづく現行選挙法によれば、満十八才以上のほとんどの人民が選挙権をもち、満二十三才以上のものが被選挙権を有しており、秘密無記名投票となっていて、一見それは民主的であるかのようにみえるが、実はこれらすべてが、候補者推薦制度のために有名無実となつてしまっている。一九三七年の第一回選挙においては、まれに一選挙区一名以上の立候補があったといわれているが、今日ではこの制度のために、一選挙区一名の立候補のみ、しかも諸団体に推薦権があるのみなのである。これではなんのために選挙であるのか、まったくわからない。しかし勝手に立候補できないからこそ、平常から充分みんなに信頼されている人物が代表となりうるという主張もなりたつかも知れない。しかしながらスターリン批判をまつまでもなく、かかる制度下では「お茶坊主」的人物しか生みださないのであることは想像にかたくあるまい。

コンミュニオン型国家の第二の原則は官吏の報酬の労働者賃金なみの水準への引下げである。この原則については次のエンゲルスの言葉が余すところなくその意義を伝えているだろう。「従来の国家の特性はどこにあったか？ 社会はその共同の利害を処理するために、元々単純な分業によってそれ自身の機関をつくりだした。しかるに国家権力をその頂上とするこの機関は時をふるにつれて、それ

自身の特殊利害に仕えながら、社会の公僕から社会を支配する主人に変わっていった。……すべて従来の国家において不可避的であった国家および国家机关の社会の公僕から社会の主人へのこうした転化に対して、ベリ・コンミュニオンは、二つの誤りなき手段を講じた。

第一に、行政、司法、教育上の一切の官職を利害関係者の普通選挙権による選挙によって任命ししかも同じ当事者がいつでも解任しうるものとした。第二に、一切の官職に対して高い低いを問わず、一般労働者の賃金と同額を支払った。コンミュニオンがかって支払った最高の俸給は六千フランであった。それとともに、代議機関の議員が拘束力のある選挙者の委託をふんだんにうけていたことを別にして、猟官や立身出世主義に有効なブレイキがかけられた」(「フランスの内乱」の序文)と。この問題に関して、ソ連邦の現実はどうかといえども今さら多くをいうまでもない。これは、次章においてさらに検討されるだろう。

コンミュニオン型国家のもう一つの原則は、議会主義を止揚して、立法と行政の合一をもたらずということである。コンミュニオンは、ブルジョア社会の金銭づくの腐敗した議会主義を、そこにおいて、意見と討議との自由が退化して一つの欺瞞とならないような制度をもって、取りかえる。というわけは、その代議員はみずから活動し、みずから自己の法律を執行し、みずから実際上の結果を吟味し、みずから自己の選挙民に対して直接の責任を負わねばならぬからである。代議制度は残存しているが、しかし、特別の体制としての、立法と執行との分業としての、代議員にとつての特権的地位としての、議会主義はここにはないのである。」(「国家と革命」)

十月革命のロシアでは、「一切の権力をソヴェトへ」という形

区切られた「一定の期間」(けっして一歴史的時代として特徴づけられるほど長期にわたることはありえない)だけ、資本主義からぬけてた一国、あるいは数カ国が、帝国主義的包圍のものにおかれるであろうことを絶対的に拒否するのは、現実的な共産主義者にとつて許されることではないだろう。だから十月革命後の赤軍も「当初から、この二つの制度(常備軍と民兵)の間の、不可欠な妥協から創設せられたものであり、しかも正規軍の性質の方に重点がおかれた」(トロツキー)のであった。しかしながらソ連邦の現実、このことによつて肯定させられるようなものではないのである。一九二五年から始まる数次の兵制改革によつてポリシエヴィキ党綱領のマルクス主義的展望は、ここにおいて完全に裏切られてしまふのである。三五年以降にいたつては、帝政ロシアでもっとも憎悪的となつていた、そして十月革命後ただちに廃止された、士官位階制度が復活され、元師の称号までがふたたび設けられた。「軍隊は社会の鏡」であるといわれるが、そうであるならば、この士官位階制度に反映されるソ連邦の現実がどのようなものであるかは想像に難くあるまい。

しかも現在にいたつて、ソ連邦共産党の指導者たちが、帝国主義的包圍が存在するために、共産主義社会にいたつても「国家は死滅しない」と断言するならば、かれらのマルクス主義国家論にたいする背信はもはやおおうべくもない。たとえ「一国社会主義」の現実を全面的に肯定するばあいでも、「もしも、一国的社会主義社会の内部で階級が多少とも清算されたとしたら、それは国家の解体が開始したことを意味する。社会主義社会は、外部からの敵に対して、プロレタリア独裁の国家としてでなく、まして官僚独裁の国家とし

でこのことが実現されていた。ところで現在はどうなのか? 先のべたような欺瞞にみちた選挙で選ばれた、いわば官選議員による申訳的な形式的な「最高会議」が存在するだけである。「プロレタリア独裁」が、かくてレーニンの危惧したところのものに完全に転化してしまつたところでは、「すでに今日でも、以前には国家机关によつてはたされていたおおくの機能が、労働組合によつてはたされている」(スースノフ)と主張されても、その基本的な性格はならぬ変わらぬといふべきである。

最後に、コンミュニオン型のプロレタリア独裁国家を特徴づけるもので、今日のソ連邦において、もっとも裏切られている制度は、常備軍、警察の廃止と、「武装せる国民」による代替という問題である。

社会主義革命は軍隊をただちに排除することはできない。資本主義から共産主義への過渡期のプロレタリア独裁の時期には、残存せるブルジョアジーの抵抗を排除するために、「プロレタリア民兵」が存在しなければならぬばかりでなく、低次の共産主義社会の段階においても、不法行為をおさえつけるための「全国的な民兵」の存在が必要とされるのである。「赤軍は、プロレタリア独裁の道具であつて、必然的に明白な階級性をもたねばならない。……階級が廃止されたときに始めてかかる階級軍隊は、全国民の社会主義的民兵に転化する。」(ロシア・ポリシエヴィキ党綱領)

「社会主義の世界体制化」と称されようとも、今日のそれが、世界革命の直接の裏切りの結果として、民族的国境の枠内にとじこめられているという状況のもとでは、もちろん共産主義社会への生長転化など思いもおよばないのであるが、だからといって、歴史的に

てでなく、ほかならぬ社会主義社会として勝利的に闘うであろう」(トロツキー傍点引用者)といわねばならないはずである。それよりもなによりも、このような過程が共産主義からの後退として、一歩退却として、国際プロレタリアートの前に宣言され、世界革命への決意が固められねばならないであろう。原水爆兵器の物神化から民兵制度が全く意味をもたないものとして省りみられないということとはとても許されることではないのである。

かくみてくるならば、社会主義社会から共産主義社会へ突入するといわれる今日のソ連邦は、社会主義社会(共産主義社会の第一段階)であるどころか、その前段階である過渡期に固定されてしまつた、そしてこのことから種々の新たな疎外を生みだしている、プロレタリア独裁が歪曲されて、それが絶対的に固定化されてしまつている、社会だといえるだろう。

「国家は死滅しない」と語る今日の公認の共産主義者の欺瞞は、マルクス主義に対する裏切りであると同時に、このようなソ連邦の現実の卒直な表明だといふことができる。

国家が死滅しないまま、いやむしろますますその強化が必要とされる事態の中で、「共産主義建設の巨大な綱領を実現するためには、勤労者の広はんな大衆の共産主義的自覚をさらにたかめ、すべてのソヴェト人のマルクスレーニン主義的教育をつよめることが必要である」(スースノフ)と叫ばれている。かつて、いや今日でも共産主義社会の発展の法則性をマルクス主義的に解明することのできない共産主義者たちが、その発展の原動力を道徳主義的にしか提起しえなかつたことは周知のことであるが、これこそ社会発展の客観的法則性を、ただ客観主義的にしか把握しえないことから

る、逆の主観主義への転落を意味するものにほかならなかった。したがって、およそ共産主義社会とは縁どおいソ連邦の現実からくる種々の腐敗現象にたいして、「共産主義的モラル」を道徳主義的に、外からおしつけざるをえなくなるのである。「土台に対する上部構造の反作用の役割」が主観主義的に拡大解釈されてくる。教育制度が、学習と生産労働との結合の名のもとに、実利主義的に改革され、文学、芸術に思想的役割が上からおしつけられ、マルクス主義が図式化される。「同志諸君！共産主義の物質的・技術的土台をつくりだすためには、科学の開花が必要であり、わが国の生産力の全面的発展に関連する諸問題の解決に学者が積極的に参加することが必要である。七カ年計画は、わが国の学者と学術機関のまえに、この上もなくひろびろとした活動舞台をひらいている。そこにおいてほかに力と知識のふるいどころはないのだ！」（フルシチョフ）という呼びかけにすべてが応えねばならない。だから共産主義社会へ突入する前夜に、社会主義的愛国主義が強調され、全面的な人間性の開花を目指す教育の中へ、実利主義的で卑俗な職業教育がたえがたいまでもちこまれてくる。文学、芸術はその自由な創造力をおしつぶされて、ソ連邦の現実を正確に反映する鏡にまで墮落させられてしまう。

### 三、「共産主義ソ連」と七カ年計画

フルシチョフは、二十一回大会において、「共産主義社会の建設を大規模に展開する時期」に突入したソヴェトロシアは、いまや、

次のような課題を、この当面する七カ年の目標とすべきであると述べた。

経済の分野では——国の生産力を全面的に発展させ、重工業の優先的な発展を基礎として、経済のすべての部門で共産主義の物質的、技術的土台をつくりだし、資本主義諸国との平和的な経済競争におけるソ連邦の勝利を保障するうえで、決定的一步をふみだすことを可能にするような、生産の発展を達成することである。フルシチョフは最大の資本家的富を集積しているアメリカを、一人当りの生産量で追いつき、追いつくことによって、共産主義の勝利は保障されるであろうという彼の哲学をのべた。「ソ連邦国民経済七カ年計画」は、このフルシチョフの哲学をかならず現実にするであろうと約束している。

だが、革命的プロレタリアートを、生活水準の向上の約束や、無味乾燥な数字の羅列でごまかすことは、最大の侮辱である。世界的に結合した革命的プロレタリアートのみが実現するであろう共産主義建設の世界史的展望の中で、その経済的内容を正しく把握することが、必要なのである。

たしかに、革命ロシアが四十年前、国境によって封じこめられた孤立せるプロレタリア権力として出発して以来、その経済の建設と物質的力量の増大のためにはおおくのことがなしとげられたにちがいない。だが、物神崇拜的社会関係から完全に解放された「自由なる人間の一つの協力的体」は実現したかの間に世界プロレタリアートの闘いは、いぜんとして否と答えている、商品生産と価値法則にもとづく社会的労働の配分の規制が作用している。今日のソヴェト社会と、「もはや個々人の労働が、間接にはなく、直接に社会の総労働

働の構成部分として存在している」（「ゴータ綱領」とマルクスが述べた「たった今資本主義社会から生れたばかりの共産主義」との間に、いかに深い断絶をわれわれは見出さざるをえぬことであろう。

しかし今日では「近年、商品流通は社会主義から共産主義への移行の見通しと両立しない、というような考えがひろく普及した。このような問題提起は正しくない。社会主義経済の発展の弁証法は、まさにこの点にある。すなわち社会主義経済の発展の段階で、商品貨幣関係を極力発展させる結果として、われわれは、共産主義の高位段階で商品生産と貨幣流通の死滅に到達するのである」（オストロヴィチヤノフ「ソ同盟における共産主義建設の理論的諸問題と社会科学の任務」傍点・引用者）という珍説を吐く高名なマルクス主義イデオログも存在するのであるから、われわれはソヴェト経済の具体的分析に入る前にいくつかの理論問題をあつかわないわけにはいかない。

彼らによれば、十月革命後の社会主義建設の実績が、商品貨幣の存在の正当性を、理論的にも、実践的にも証明したというのである。では、マルクスがゴータ綱領でスケッチした共産主義社会（前に述べたように、彼は共産主義を第一段階と第二段階に区別していただけで、共産主義と社会主義というふうには区別していなかった）の展望図は、その見通しにおいて、誤っていたのであろうか？そうではなく、共産主義社会の一般的抽象の規定は、資本主義の場合と異って、それが実現されなければ与えられないというものではないのである。「人間の本質の現実的獲得」（マルクス「経哲手稿」）である共産主義社会の一般的规定は、人間による自然の取得が、人間自身の商品化という、もっとも非人間的な型態を通じて行

われる資本制社会の分析によって、あらかじめ与えられるのである。

「生産者の総労働に対する関係をも、彼らの外に存する対象的社会的关系として、反映する」とい錯倒した関係をうみだす資本制社会に対して「生産手段の共有の上立つ協同的社会の内部では、生産者は、自分の生産物を交換することはない。同様に、そこではもう生産に費いやされた労働が、この生産物の価値として、その生産物の有するある物的特性として現われることはない。なぜならば、今や資本主義とは反対に、個人的労働は、もはや間接にはなく、直接に総労働の構成部分として、存在するものだからである」という一般的规定を、動かしえない力を持つて語ることができるのである。資本主義社会では、もっとも根本的な分配関係をなす資本家と労働者との間の関係が、形態的には分配関係としてはあらわれず、労働者の所得は生産費用としてあらわれる。それに対して、共産主義社会の分配は、直接的である。すなわち、今やと資本主義から生じたばかりの共産主義社会では、「個々の生産者は、彼が社会にあたえただけのものを精密にとりもどすことになる。……彼は社会からこれだけの労働を提供したという証明をもらって（共同の基金に対するかれの労働を控除した上だが）、この証明でもって、消費財の社会的貯蔵から、その労働量に相当するだけの物品を引出す」のである。ここでは価値は生じない。生産物の分配はあっても交換がなく、社会的労働が対象化されないからである。そして「共産主義社会のより高度の段階」では「社会はその旗にこう書きつけることができる。各人はその能力に応じて、各人にその必要に応じて」と。

しかし、こうした一般的、抽象的規定をソヴェットの具体的過程に對置して、そのちがいを発見(✓)しただけではダメである。そのような方法論上の欠陥にこそ、価値法則の残存(国家資本主義)といういわゆる赤色帝国主義」という対馬氏の論理、公式主義の根拠を認めることが出来る。資本主義社会においても、一般的に原理的にあきらかにされたもの(原理論)が直接にそれぞれの時代の具体的過程の規定を与えるのではないのである。商人資本が商品生産者を分解することによって、資本的関係を形成して行く重商主義段階、個別資本が、産業準備軍によって労働力の商品化を確保しつつ、自ら取得した剰余価値を資本に転化するという様式をもって蓄積を行う産業資本主義段階、重工業の発展による固定資本の巨大化とともに、独占資本が株式制度によって社会的に資金を集中しながら蓄積を行う金融資本段階、と資本主義の生成、発展、没落の過程をあらわす世界的な「段階規定」の媒介をまわって、始めて個々の国の、それぞれの国の、それぞれの時代の「分析」がなされるのである。十九世紀から二十世紀にわたる資本主義の段階的な変化(産業資本段階から独占資本段階へ)に幻惑されてその資本制生産の本質的な性格までも犠牲にしようとした「超帝国主義論」は、対馬忠行氏の裏返しの誤りを犯しているのであるが、いずれも原理論から段階論、現状分析とそれぞれ段階的に具体化していくという、科学的方法論を全く欠いたものといわなければならないのである。

さて「資本主義の運動法則の闡明」を目的とした資本論によってその基本的特質を理解する鍵を与えられたところの共産主義の一般的规定も、このような段階概念を媒介として始めて現実に適用せられるものとなるのである。われわれが分析せんとするソヴェット社会

は、あきらかに二つの社会経済の特質をそれ自身の中に含した過渡期の段階として解明するべきものであり、資本主義的要素の残存をもって、ただちに国家資本主義であるとの断定を下すことはできないのである。ところで資本制生産が、原理論で抽象的に展開された理論をほぼそのままの形で具体化したのは、十九世紀末葉までのイギリスにおいてのみであり、その後は純粹の資本主義社会の実現に徹底的に進むとはいえない傾向をもつことになったということは、端緒的、過渡的段階の共産主義社会をも、内容的に規定せずにはおかないのである。

十九世紀の後半を劃期とする重工業の発展は、経営に要する資本の異常な増加をひきおこすのであるが、資本主義は社会的に蓄積された資金から、事業が経営に必要な任意の額の資本を調達するという、資本家社会的なる機構を確立するのである。株式会社形式がそれにほかならないのであるが、資本主義的の生産の最高の発展のかわる結果こそは、「私的所有の枠内での私的所有の止揚」にほかならず、共産主義への移行の「有力な槓杆」として役だつてであろうことはなんらうたがいがいもない。「マルクス」資本論」ここに共産主義の物質的前提は完全に用意せられるに至るのであるが、しかし、さらに重要なことは、この株式取引の発展が、貨幣市場を基礎とした資本市場を形成し、国家資金の支出によってなされる財政的諸操作とともに、蓄積の様式を規制する役目を与えられたことにあるのである。

この帝国主義段階に特有の、財政、金融制度は、過渡期社会においてはただちに死滅しないので、その内容をかえつつ、むしろ積極的に利用されるものとなるのである。それについて少し長い一九一九年の「ボリシェヴィキ党綱領」を引用しよう。

パリコンミュニョンの誤謬を避けてロシアにおけるソヴェット政府は直ちに国立銀行を占拠し、次に私立商業銀行の国有化を行った。かくしてソヴェット共和国の単一の国民銀行を建設し、銀行を金融資本の経済的支配の中心であり搾取者の政治的支配の武器である銀行を、労働者の権力の武器経済的変革の道具に変えた。ソヴェット政府によって始められた事業を終局まで徹底的に遂行することを目的としてロシア共産党は第一に次のごとき原則を掲げねばならない。

- 1 あらゆる銀行事業のソヴェット国家の手中への独占。
- 2 銀行機構をソヴェット共和国の単一計算および一般的簿記の機構たらしむることによってなされる銀行経営の急激なる変更と簡易化。計画的な社会経済の組織されるにしたがって、このことは銀行の廃止と、その共産主義的社会の中心的簿記への変更を導くであろう。

つづいて、綱領は貨幣なしの計算の領域を広め、貨幣の廃止を準備するため、銀行を利用する諸措置について述べたのち、財政について、「国家の予算表はあらゆる住民の経済生活全体の支出表となる」と規定している。

しかし、共産主義の物質的前提を作りあげた独占金融資本には他の一面がある。金融資本段階の蓄積では、相対的過剰人口はもはや産業循環の周期的反覆を規定しつつ、周期的に吸引と反撥をくりかえすものとしてはあられわれない。企業が株式会社形式をもって行われることにより、生産方法の改善は、個人的制約から解放されて、不断に行われる基礎を与えられるとともに、独占的地位を利用して膨大な資金を要する機械の採用をおくらせることもできるようにな

る。それは相対過剰人口を不断に形成する条件となる。慢性的に存在する過剰人口は今や農村人口のプロレタリア化を阻害し、小土地所有者を広汎に残存せしめ、他面では低賃銀を基礎として中小企業を簇生せしめる。金融資本はこれらの小ブル的要素を自らの政治的支柱として、また独占利潤の収奪の基礎として、むしろ積極的に保護しようになる。したがって支配階級に組織されたプロレタリアートが、労働を全国家的規模で集中化し、労働の職業的、地域的分散状態を克服し、都市と農村の対立を除去するために闘うことは、共産主義への過渡の典型的な規定をなすであろう。そして中小商品生産者は遅かれ早かれ、協同組合に組織されるであろうが、その間、生産と消費を完全に組織することはできないから、新しい社会でも商品価値関係を、一挙に、完全に、廃絶させることはできないであろう。しかし、そこに流通する貨幣は死滅しつつある貨幣であって、ソヴェットの経済学者の考えているように(「経済学教科書」三、第一版七一―七五五)一般的等価物ではない。それはマルクスのいわゆる「社会から受取るこれこれの労働を提供したという証書」と同じように、社会的労働の計画的計算の尺度として機能するが、「貯金帳や、小切手や、公共の生産物を受けとる権利をしめす短期の証券等を代用させること、銀行への強制預金制を制定すること」(ロシアボリシェヴィキ党綱領)等の「急進的な諸方策」によってその廃止ができるだけ急がれるのである。それはブルジョア的、小ブルジョアの分子が、投機や、金もうけや、勤労者の略奪のために、私的所有としてのこざれている貨幣を利用しつつづけるからである。一方生産物もこの期間商品の外被は保つが、経済学的な意味における商品ではない。商品、貨幣、信用等のあらゆる資本主義的要

素の残存にもかかわらず、それは、新しい社会的關係に道をゆずるべく、死滅し、つ、あるのである。「社会主義的發展段階で、商品貨幣關係を極力發展させる」ことが、どんな弁証法からもでてこないことぐらゐ、共産主義社会の原理論とでもいわれるべきものを、冷静に考えた人にはすぐわかることである。

また、この段階では商品貨幣形態が一時的に残存するから価値法則を「社会のために利用し、破壊的な作用にちがった方向を与え、その作用する範囲を制限し、たくみに応用する」ことができるという通説をしりぞけておかなければならない。これらの議論は法則の把握の仕方がおかしいのであって、社会科学における法則は、物と物との關係としてあらわれた人間關係に他ならず、社会経済法則の外に人間を想定して、それが法則に働きかけるなどと考えるのは、法則に対する物神崇拜ともいふべきである。われわれがそれらの「破壊的な作用」からのがれるために、その作用そのものを廃絶するために闘わねばならないのである。

このようにこの過渡期社会においては、二つの社会経済制度の特徴、または特質をそれ自身のうちに合一せざるをえない。「この過渡期は、瀕死の資本主義と生れいんとする共産主義の間の闘争の時期、いいかえれば敗北したが根絶していない資本主義と生れはしたが、まったく微力な共産主義との間の闘争の時期以外のものではない」といふ（「プロレタリア独裁期における経済と政治」）

そして、この段階において経済的には、生産手段の共有、小商品生産の絶滅と共同労働的關係、価値法則と賃金關係の死滅の条件が作りだされて行くのである。これは、もちろん政治上における階級および階級対立の死滅の時期に対応する。

市場は完全に復活した。これは「プロレタリア国家の統制と調整の下における資本主義」の導入であり、小ブル的な要素の優勢な国が、帝国主義段階によって準備された単一の世男経済体系からの断絶によって余儀なくされた「一歩後退」であった。これによって産業はふたたび活動を開始した。

しかし、蓄積および資源が全く枯渇したこの国において、工業發展の遅いテンポは、工業生産物と、農業生産物の差を拡大し、この連絡の切断は市場経済にとって必然であった。農村では階級分化が生じ、いわゆるネツプマンと呼ばれる農村の室内工業家と投機業者が生れた。国営企業は、原料の供給を個人商人との取引によって行うことを余儀なくされたのである。強大化したトラックは穀物ストライキによって、都市に対して穀物封鎖を行った。プーリンらは、工業の發展テンポを緩めても穀物の価格を引上げて農村の資本主義的傾向を助長すべきであると主張した。これらの傾向は、もはや私企業の絶滅と公企業に対する生産の統制の実施以外に出口がないことを教えていた。

一九二七年に至って、計画化経済が導入され、一九二七年には、「個人農業の終末」が宣言され農業の集産化が開始せられることになった。しかし、計画化経済は、蓄積を計画化のもとに統制せんと試みたものではあるけれども、資本主義的計算にもとづく独立採算制と賃銀制度はいぜんとして放棄されなかつたのである。

一九二九年の大恐慌はブルジョア世界を大きくゆるがし、ドイツ、スペイン、フランスなどにおいては二大階級の死闘が展開されるのであるが、国際革命の成功に依拠するのではなく、孤立したプロレタリア権力の維持を絶対視せんとするスターリンにとっては、そ

過渡期社会のポリシェヴィキ党の政策は、動乱のヨーロッパ革命の来援を確信しつつ、このような過渡期の方策を全的にとり入れることであった。最初の三カ年は、酸鼻をきわめた内乱と干渉の時代であったが、この時代に企業と商業は、全面的に国有化された。ポリシェヴィキ党は、戦争目的のために工業を軍事目的に従属させ、農民から「色のついた紙きれ」のかわりに穀物を徴収し、消費を組織化し、投機を抑制せんと試みたのである。彼らはこの戦争目的のために導入された組織化の方向を「戦時共産主義」から、計画的経済組織に直接發展せしめようとしてきた。ポリシェヴィキ党綱領には次のごとく記されている。「ソヴェト政権は、不断の努力によって計画的、組織的、国家的規模の下に生産物を分配し、不断の努力によって、商品交換に代らしめねばならない。」

しかし、減退せる工業生産に依拠した都市は穀物および原料の代りに、農村にはなにもも与えることができない。農村からの強制的徴収はたえず減退し、投機がはびこった。レーニンは「工業における少数の労働者と圧倒的多数の小農を有する」ロシアが、国際革命から孤立したことは、「国家的生産と国家的分配をプロレタリア国家の直接命令によって共産主義的に調整するという試みの失敗をあきらかにした」とのべた。社会主義のための直線コースは放棄され、小農経済から、「まずさきに国家資本主義に到達し」「資本主義をあるていどまで創造し」そののちに社会主義に転化するという迂回コースが採用された。国営企業はグラフィキ体制から独立採算制に転化し、農民は「直接的分配」の代りに、商業的取引によって工業と経済關係をとりむすぶことになった。

これは必然的な方策であったのだ。そして、それは、今日においてもうけつがれ、ソヴェト経済の内容をなしているのである。

生産力の高度發展のうえにたつ共産主義においては、総生産物から各種の社会的基金を除外した後の労働者の分け前は、「一方では社会の現存生産力が許し、他方では個性の發展が要求する消費範囲まで、拡大される」（「資本論」）のであるが、孤立せるソヴェートルシアでは、この後進性のゆえに、消費の無制限的拡大は許されない。労働者の消費生産物の量を抑制しつつ、蓄積の拡大を追求せねばならないのである。

それでは、賃銀型態をとった労働者の分配は、どのような法則によって規制されているのであろうか。定説によれば、労働者は生産手段の所有者であるから、労働力を商品として売る必要はなく、したがって賃銀は労働力の価格ではない。「社会主義賃銀」を規定する法則は、「労働（量と質）に応じた分配の経済法則である」といふのである。しかし、この理論は、完全に自己矛盾をさらけだしたものであるといわなければならない。マルクスは、共産主義社会においては「各生産者の生活手段の分け前は、彼の労働時間によって規定される」といっているのだから、賃に比例するとはいっていない。熟練労働と不熟練労働、生産的労働と不生産的労働というように、労働の質によって差などをつけようとするれば、前者はより高級の労働であるということになり、つまりその生産のためにより多くの労働時間を要するということになるのである。労働力そのものに対象化された労働量という概念を導入せざるをえなくなるのである。もともと、価値法則は、労働力の価値が、一般社会的には生活資料の生産



に必要な労働時間によって規制されるをえないという関係を基礎として、始めて必然的なる根拠を与えられるのである。労働力の価値が、それに対象化された労働量によってはかられるという関係そのものを否定すれば、価値法則はその根底から崩壊せざるをえないであらう。

われわれは、資本主義経済学において原理論的に解明された価値法則を、複雑なる現象をもった過渡期社会に直接に對置するわけにはいかなないのである。だが、最近のソヴェート経済学界が「生産手段をも含めた全商品に及ぶ価値法則の規制」を確認しながら、賃銀は労働力の価値表現であるという関係が、いかに偏奇せしめられているのかという点にふれていないのはたりないと思われる。

本来、分配関係を表現する労働者の消費生産物を賃銀としてあらわし、それによって労働者の消費生産物を労働力の再生産に必要な限度に抑制しつつ蓄積をはかるという方式は独立採算制によってより強力な動力を獲得する。蓄積が企業基金と、結びついた独立採算制度は擬制的なC+Vに對していかなる採算をあげるかという形で、労働者の消費生産物をも費用化せしめ、その低廉化に関心が持たれるからである。このような資本主義的な外被をもった関係が、いかに意識的にもソヴェートのイデオログに反映しているかは、過渡期経済学の体系では、本来、分配論としてのべられるべき賃銀が、経済学教科書では、資本主義経済学と同じように生産過程の分析の中で述べられていること、ソヴェート「経営学」というカテゴリーの存在とその学問的体系の内容などにみられる。

このような関係を基礎にした国有化経済が、社会化された労働と資金の意識的配分と結びついたときには、資本主義経済とは比較さ

れぬほどの急速な蓄積が可能になることはいうまでもないことである。

資本家的生産においては好況期における蓄積は、主として生産方法の改善を伴わない生産規模の外延的拡張として行われる。それは産業予備軍の急速な吸収と労賃の高騰をもたらすのであって、資本は利潤率の低落によって、より小なる剰余価値しか生産しえないことになり、資本の蓄積自身を無意味なものにする。資本は資本として過剰になる。そしてそれは低落する利潤率と高騰する利子率の衝突によって恐慌として現実化する。恐慌による資本の破壊と産業予備軍の形成による利潤率の回復を基礎として、不況期の末期に個別資本は生産方法の改善による新たな循環の出発点を与えられることになる。しかし、資本にとって新たな生産方法の導入は、特別剰余価値の追求に規定されるをえないのである。

このように資本主義的蓄積は、ジグザグの道をたどりながら一般的にはその規模を拡大するという方式によって発展するのであって、これは元來資本の生産物でない労働力を商品化し、これを基礎として生産を社会的に確立するために、避くべからざる廻り道なのである。

また資金にしても、資本家的生産方法の発展が株式制度の普及という形式によって、社会的資金を調達する機構を確立せしめ、またそれによって銀行資本も金融資本としての新たな性格を与えられるのであるが、蓄積は資本市場によって規制されるという資本家社会的制約から脱れるわけにはいかなないのである。

ソヴェートロシアにおいては、価値法則がいぜんとして残存することによって、労働力や資金の配分も、それによって多かれ少かれ規

制されざるをえないのであるが、全面的な計画化の導入によって現実的な解決を行いつつ発展することができる。ただ資金配分は取引税と利潤控除(いわゆる部分)からなる国家資金を工業銀行から融資することによって行われるのであるが、労働の配分については一面それによって制約をうけざるをえない。すなわち労働力は全面的に生産部門に配分され、また賃銀も計画的に定められているのであるから、資本主義のように産業予備軍の運動によって蓄積が制約されることはないのであるが、他方では新たな企業の拡張のために、労働力を産業予備軍の中から自由に調達するということもできない、という側面も合せものである。

これが、一九二七年、スターリンによって始められた計画経済の社会的內容である。それは、ネップによってうみだされた矛盾を現実的に解決しつつ、生産力の急速な拡張を目的としたものであったが、それを過渡期社会の課題である価値法則の止場の方向に向ってではなく、それに依拠しつつ行おうとするものであった。したがって、その矛盾の解決は、一方では、労働時間の社会的、計画的配分をめざしつつ(計画経済)、他方では、個人的労働が間接にしか総労働の構成部分としてあらわれぬ(価値法則)という矛盾を含んだ、解決のない展開によって解決しようとしたのである。

この過渡的な構成が社会的矛盾にみちているということは、強制的機構としての国家を不可欠の前提とする。それは、第二章にみたごときのものであって、労働が直接に社会的となった共産主義社会では、社会の上になつて主人が生みだされる必然性が全くないのに対応したものといつてよい。

一九三十年代のソヴェートは、五カ年計画によるめざましい生産

力の発展を実現したのであるが、それは強力な国家権力の干渉と、出来高払い制、ノルマ制度というもともと露骨な型態をとったところの労働強化と、独立採算制度によって可能にせられたのである。

たとえば、労働手帳を提示しないかぎり、労働者はどこにも雇傭されないことを規定した労働法典、企業からの労働者の任意退職を禁止した規定、技師、熟練労働者の一企業から他への義務移動に関する規定等の強力な干渉があつて始めて可能とせられたものといつてよい。そして、それは国家機構の官僚層、企業長、ホルホーズ長等の一般労働者から独立性を保ちつつ、いわゆる「労働の質による法則」によって莫大な報酬をうける特殊な層を生みだしたのである。

\* \* \*

このようなそれ自身として、矛盾をはらんだ矛盾の現実的解決は、生産力の発展とともに新たな解決を要する課題を提起せずにはおかなかった。

一九五三年のスターリンの死を期期として始り、一九五九年の第二十一回大会で一応の体系的調整の終ったソヴェートの工業、農業組織における一連の改革は、それに応えんとするソヴェート官僚の努力の表現に他ならなかった。たしかに、数次の五カ年計画は、ソヴェート・ロシアに世界第二の生産力を有する国としての資格を与えたにちがいない。しかし、それは価値法則の漸次的止揚の方向をめざして、コンミュニオン型の行動団体に直接生産者を組織し、生産物を直接に社会的生産物たらしめる世界を建設せんとするものでなかつた。

このような段階では、自己實現的活動と物質的生活とは完全には

一致してあらわれず、物質世界は、個人と並存する一つの独自の世界としてあらわれざるをえない。そして、労働の自己実現的活動への転化、つまり、価値法則の止揚の方向が意識的に追求されれば蓄積が進行すればするほど、ますますその関係は拡大して、あらわれざるをえない。著名なマルクス主義者、ポール・スウィージーは、ソヴェトロシアのそのような現状をすくなく見抜いたのであった。彼は、共産主義社会を団結と相互信頼の社会として描写したのち、次のようにつづけている。

私は、ソ連がそのような社会を建設していないということには、おどろかない。私もその間の不利な歴史的背景や、過酷な条件についてはよく承知しているからだ。だが、深刻に、私をおどろかせたのは、正しい方向を指すならぬの確証を見出しえないということである。人間による人間の搾取が除去されているというのはほんとうだが、疎外の新しい形態が生じてきており、あるいはまた古い疎外にとつてかわりつつあるのだ。指導者と人民のギャップはおどろくべき深さを持っており、せばまるべきでもない。若い人々は、公共生活については、それが有望な経歴を与えるようなものでないかぎり、無関心になったり、あるいは公然と冷笑的になったりする傾向を示している。人間の野望の普通あり方は、いい収入と、それで買える商品——とりわけ自動車——を手にいれ、それを楽しめるような平和な状態におかれることであるように思われる。古い世代の人々の多くが共通に持っている革命的理想主義も、若い人々にとってはほとんど無意味なのであって、かれらは全く別の力によって、個人的な出世の見込みによって、激しい労働と禁酒とを強いられているのである。これがすべ

てわるいというのではない——私としては、今日のロシアの状況の下では自然でもあり、また、賞賛すべきものもある慰安と私生活への要求を、みいだしているが——そしてまたそれは、そのことにかんするかぎり、合衆国や世界の他の大部分の国において見出されるものよりましではある。だが、わたしは、社会主義者たちがいつも心に描いてきたような社会のいかなる要素も、そのうちに認めえない。逆に、わたしはさらに一層深刻な傾向が、伝統的な社会主義的理想に向うよりも、むしろそれから遠いものとなることを恐れているのである。雌犬の女神の成功をあがめたてまつっている俗物の社会の方が、人類の同胞愛と団結の社会よりも、いっそう論理的な帰結に見えるであらう。（「ヨーロッパにおける社会主義」）

極端な窮乏の中にありながら、戦争目的のために、生産を自発的に組織し、「これこそが共産主義だ」とレーニンをしていわしめたいわゆる「共産主義土曜労働」とはちがって、そのような条件のもので生産はプロレタリアートの自覚的な規律によって支えられるものとはならない。生産者の物質的欲求がある程度満たされればさるほど、自発性は後退し、蓄積は根本的な障害をうける。

しかも、官僚機構による生産の全面的な統制は、一面では前述のように資本主義的蓄積とは比較にならぬほどの急速な蓄積を可能にするのであるが、同時に、それは、官僚機構の膨大化をもたらし、自覚的な規律に代えるに枯渇した官僚主義をもってかえる。激烈な市場争奪戦に耐え抜かんとする個別資本間の死闘が支配する資本主義社会とは異って、官僚主義に特有の無気力と沈滞とが生じ、蓄積はおとろえをみせる。また、国際革命の挫折と、ソヴェトロシア

の孤立とは帝国主義段階の資本主義経済によって作りあげられたところの世界経済からの断絶を余儀なくされたのである。一九三〇年代の計画経済の端緒的段階、ソヴェト「愛国主義」によって鼓舞された戦時期、そして、戦後の復興期を経て一九五〇年代は、そのような矛盾がようやくあらわにされてきた時代であった。農業生産には、おそるべき低滞が生れた。マレンコフは、「今日迄わが国は重工業と同一のテンポで軽工業を發展せしめる機会をあたらえられなかった。だが、現在ではそれが可能なのである。国民の物質的、文化的水準を急速に向上せしめるために、軽工業の全国的發展を強行することは、今日のわれわれには可能であるばかりでなく、必要なのだ」と演説して、大衆の物質的関心を刺戟しつつ、工業の拡大を強行しようとした。しかし、それはあまりに蓄積の要求と衝突した。第六次五カ年計画は、実施後目標数字をはるかに低くさせて、修正され、後には撤回されねばならなかった。官僚主義に対する声なき民の抵抗は、スターリン批判にもっとも鋭いイデオロギー的表現をもったところの、上からのなしくずしの改革を呼ばざるをえなかった。

もっと根本的な解決が必要とされていた。

それには、二つの道が存在した。一つは、数次の五カ年計画の成功によってかちとられた生産力の高度發展のうえにたつて、価値法則および労賃関係を止揚し、「商品生産と対角的に反対の生産形態」を創造する革命的コースの道であった。それは、政治制度におけるエンゲルスのいわゆる *Gemeinwesen* への転化と対応するものであり、国際的には現状維持の「平和共存」戦略コースの揚棄のうえにたつ世界革命戦略コースの採用が必要であつたらう。

第二の道は、国際ブルジョアジーとの共存のうえに、自国の生産力の拡大を、価値法則による規制によって、現実化せんとするものであって、価値法則貫徹に対する桎梏をとり払うことを任務とした反動的コースの道であった。

「民族共産主義者」で、「経験主義者」であるフルシチョフは、とうぜん第二の道をえらんだ。工業管理制度、およびホルホズ農業制度等におけるソヴェト経済制度のほとんど根本的といつてよいほどの改革は、その具体化に他ならなかったのである。

フルシチョフは、官僚的規制が、生産力の拡大のために、もはや桎梏に転化した事実を是認することから出発する。「現在の生産規模では、現行の工業と建設管理形態は、国民経済發展の具体的で、効果的な指導上のいよいよ増大する必要に應ずることはできない。」（「工業と建設の管理組織の一層の改善についてのテーゼ」）官僚的規制は、官庁の縄張り争い、機構の水ぶくれ、文書の洪水、重複する諸機関の存在等の弊害を生みだし、「国家に大損害をこうむらせている」というのである。農業においても「土地に二人の主人——ホルホズとMTCが存在する。二人の主人が存在するところには、りっぱな秩序がありえない」（フルシチョフ「ミンスタ農業先進者会議での報告」）とみとめる。

そのような矛盾を解決するためには、プロレタリア大衆がソヴェト組織を通じて、労働時間の社会的に計画的配分と、労働給付に比例した生産の分配を、直接的に行うという道によってのみ可能であつたらう。しかし、フルシチョフは、それとは逆に、プロレタリアートのあらたな疎外の形態を拡大する方法をとつたのである。フルシチョフの経験主義は、事実「あたかも資本主義的企業のような敏

活がいやおうなしにみられてくると想像できはしないだろうか」  
 「工業管理機構の分散化と企業経営」(岩尾裕純)とスターリン主義イデオログが誇りたかく自認するような、物神崇拜的關係価値法則の一層の貫徹を許す方向をうみだした。古い工業管理組織による計画化の基本的方法は、次のとおりであった。「計画を作り、その遂行を統制することは、ソ同盟閣僚会議の国家計画委員会と全同盟の省と加盟共和国の省とによっておこなわれ、」(「経済学教科書」)上から下に向ってのプロセスを基本的にしていたのである。新しいやり方では、「計画の作成は、まず企業ではじめられ、それから企業合同、国民経済会議をへて、共和国ゴスプラン、同盟ゴスプランで審議されねばならない。」(「最高ソヴェト第七会期にむけるフルシチョフの報告」)それは、一見下からのプロセスを基本とした民主的な組織方法であるかのよのみに見えるのであるが、実は資本主義的外被のもとに運営される「企業」のイニシアチヴの拡大である。つまり、生産の蓄積が「企業の採算制を高め、経営内蓄積をふやす」という形式をもって展開される。もちろん、資金を社会的に動員し、それを意識的に配分するという方法が放棄されたわけではないのであるが、独立採算制を大中に強化し、「企業や建設場の活動を計画化し、評価する基本的な指標として、採算制と生産フォンドを利用する」ことが強調せられるのである。かくして、労働者が貨幣形態で生産物の分配をうけ、蓄積が企業基金によって現制される独立採算制のもので、どれだけの「採算」をえるかという現実的関心は、生産のための費用や、なかならず労働者に対する支払部分にむけられる。

われわれは、ここにフルシチョフの改革のもつ根本的矛盾をみる  
 企業の「採算性」を追求する工場管理者と、生産の組織から疎外された一般生産労働者の二重的存在は、新たな矛盾を生みおこさずにおかぬだろう。そして蓄積が、企業の採算性によって左右されるということ、より改善された生産方法の採用も機械の価値と機械によっておきかえられる賃銀との差額によって限界づけられざるをえないであろう。事実フルシチョフは「企業内の蓄積が拡大再生産のための蓄積の源泉となつていくわが国ではもっとも厳格な節約体制のためのたたかいが、とくべつの意義をもっている。党はもっとも合理的な方法で、経営を行う必要性をつねに強調してきた。生産費の一歩切下げが年内一二〇億ルーブル、七カ年計画後には二一〇億ルーブルをこえる膨大な数字で表現される。現在ではコスト切下げ節約体制のためのたたかいはとくに重大な意義をもっている。」と述べている。

MTCの解散とそれに伴う一連のコルホーズ農業機構の改革は、この独立採算制度を農業生産部門にも全面的に導入せんと試みたものであった。

改革以前にコルホーズで生産された生産物には、MTCに属する過去の労働と生きた労働が体化しているから、その部分は「現物支払」としてMTCを通じて、国家に引渡されていた。このMTCには一九三三年から一九五七年まで政治関係事項担当副所長がおかれていて、コルホーズ員の政治指導にあたっており、MTCは将来コルホーズ的所有を国家的所有に高める組織者たるであろうと期待されていたのである。しかし、MTCを通じての支払は、国有される生産物の価値よりはなはだ大きく不生産的であり、MTCの独立採算制への移行を困難たらしめたのである。その上MTCの管理機関

ことができるのである。

企業が経営する企業長は、職務給制度によって、高額の報酬を受けるのであるが、同時にその報酬は、企業の収益率にしたがって左右されるものとする。彼らは、そのような物的刺激にかられて、労賃フォンドの自由な操作、事後通告だけで可能な投資の自由、労働ノルマの制定に関しての拡大された権利を行使するのである。価値法則による蓄積の要求を人格的に表現したともいうべき企業長経営者の権限の増大には、他の側面がある。それは、経営管理から疎外された直接生産者の存在である。五一年七月に発表された「労働組合の工場、地域委員会の権利について」が規定した管理機関との団体協約の締結、労働条件の改善についての上級機関の提訴、官僚主義、労働法の侵害についての機関の提訴等は、そのような存在としての労働者の抵抗に対する官僚の現実的妥協に他ならない。そして、個々の企業の「採算制」の要求は、賃銀制度においても、マルクスが最も露骨な搾取形態とよんだ出来高払い制度を重要な形態として、導入せざるをえないことはとうぜんである。価値法則の漸次的止揚の方向をはっきりと指向していた革命直後のソヴェト政権に、「一切の労働にたいする平等の報酬と完全な共産主義を目標とした」とは異って、今日フルシチョフが「もっとよく働き、労働生産性をたかめ、もっと生産物を作ろうとする物質的刺激が、均等分配によってうちころされるであろう。均等分配は、共産主義の信用失墜を意味するからに他ならない」と珍説を吐いたのも、やはり、直接生産者が新しい疎外的状態に陥入っていることを証明するものといつてよいであろう。

かくて、国家機関の官僚に代って拡大、強化した権限を手中に、の官僚的歪曲は、工業生産管理機関と同じく生産力の発展にとつて極端に転化したのである。このような事情はMTCを解散せしめコルホーズ生産費切下げによる努力を生ませて、農業生産力を拡大するという目的をもった一連の改革を不可避ならしめたのである。これまでMTC制度のもとでは、現物支払いを控除したコルホーズ生産物は、「義務納入」や増産刺激策として累進的報奨金の制度をともなつた予約買付、国家買付等によって国家に調達されたのであるがMTCの解散によって、それは国家計画にもとづく方法に統一され調達価格が一本化したのである。

こうして農業生産物は全面的な商品流通に委ねられ、国有企業にみられたのと同じような各コルホーズの採算の強化によって、生産力の拡大をはからんとしたのである。「農業におけるもっとも重要な任務のひとつは、労働生産性の向上と農産物の原価の引下げである。生産に要する労働と賃金の支払をへらしながら総生産高の大幅な増加を確保せねばならない」とフルシチョフは二十一回大会において述べている。しかし、これらは工業の管理機構の改革に伴つたと同じ内容をもつ矛盾の展開を、農業生産部門においても必然化せずにはおかぬであろう。すでにコルホーズ員の労働に対する支払として、月々固定した金額を彼らに支給しているコルホーズもすでにあらわれているのであって、本来その内部においては協同体的關係を保持してきたコルホーズにも、新たな疎外の形態が芽生えはじめてきたことを示している。

改革の内容は、このような官僚的極端から解放し、本来分配關係を表現する賃銀をも含めた生産費用の切下げによって各企業ごとの採算を強化し、企業基金を形成し蓄積の拡大をはかるといふもので

ある。その改革によって特権官僚、MTC官僚はその地位から解放され、かわりに地方コルホーズ長、企業長が強力なプレシヤグループにまで成長するという社会的変革をもなったのである。フルシチョフにその政治的表現を見出したところの企業長、コルホーズ長らに対して、その特権的地位を維持せんとする旧官僚の抵抗がロシア共産党内に形成されたところのいわゆる「反党グループ」である。その党内闘争において勝利を収めたフルシチョフは今や自信満々と、七カ年計画をそれらの改革の上に実現せんとしているのである。「おそらくその次（七カ年計画完遂の次——引用者）には、あるいはそれ以前に、ソ連は工業生産の絶対量でも人口一人あたりの生産高でも世界第一位に進出するであろう。これは国際舞台での資本主義との平和競争における社会主義の世界的勝利となるであろう。」と。

たしかにこの改革によって生産力の拡大は新たな動力をもって展開するであろう。しかし蓄積の進行とともに矛盾は拡大し、問題はふたたび敵としてこう提起されずにはいられぬであろう。価値法則の止揚のうえにたつ共産主義への移行か、それとも、さらに物神崇拜的關係を拡大する解決のない展開による、矛盾の解決か、である。

一のぬけ道である世界革命の展望を放棄して、共産主義者が「最大限に時間をかせぐ」間中、現状に甘んじなければならぬというのだ！

資本主義権力との平和的共存を基本原則とするソ連邦の外交政策は、革命的なプロレタリア・インタナショナルイズムを完全に放棄してしまつて、そのかわりに、ソ連邦の民族的国境を維持強化するために、国際共産主義運動がその世界革命の目的を放棄することを要求するのである。プロレタリアートが権力を獲得した部分が、その権力をもって世界革命を援助し、国際的規模におけるプロレタリアートの解放を一刻も早く推進するためには、ただ国際的な階級闘争の利益に、その外交政策を従属させることだけが、唯一の正しいあり方であろう。しかしながら現実とはちがっている。ただ外交的マヌーヴァーによって、資本主義諸国間の矛盾を利用してそれとの均衡を計ることだけが自己目的化されてしまっているのである。

\* \* \*

「ソ連邦の経済建設計画は、当面する七カ年におけるソ連経済が以前とおなじように、平和の方向をめざして発展するであろうことを、新しい力をもって、立証するものである。われわれは今後ともレーニン主義の平和政策を、一貫して実施するであろう。」（フルシチョフ）

帝国主義戦争の不可避性という客観的法則性を、客観主義的に把握するものにとつては、核弾頭をもったICBMの出現は、「人類皆殺し」を意味するにちがいない。いや、国際共産主義運動が今日の公認の指導部によって握られている現状にあっては、「両階級の

## 四、平和共存路線は階級闘争になにをもたらずか

今日のソ連邦の外交政策が、レーニン主義と称される平和共存を基本原則としていること、そして世界各国の公認の共産主義者たちが、今日の共産主義運動の基本路線としてこれを支持していることは、周知の事実である。

これまでのところですでにあきらかにされたように、今日のソ連邦は「一国社会主義建設」の強行によって、生産力の増大を自己目的化せざるをえなくなった。そこで共産主義社会の前提であるべきはずのものが、自己目的化されてしまつて、共産主義そのものどさされてしまつている。したがつてフルシチョフは、次のように主張する。「国際関係の分野では——ことなつた社会制度をもつ諸国の平和共存という、レーニン主義の原則にもとずいて、平和と諸国民の安全との維持と強化をめざす対外政策を、一貫して実施することである。『冷い戦争』を停止し国際緊張を緩和するために、努力しなければならぬ。社会主義世界体制と兄弟の諸国民の協同体を、あらゆる方法によって強化しなければならない。」

当面する七カ年間の根本的な問題は——資本主義と社会主義との平和な経済競争で、最大限に時間をかせぐ、という問題である（フルシチョフ、傍点は引用者）と。ソ連邦において共産主義者が、ただ生産力の増大だけを自己目的化した結果として、いままお帝国主義の軌の下に呻吟している国際プロレタリアートは、そこからの唯

共倒れ」も、あながちこれを否定するわけにはいかないような危機的状況が存在してさえている。客観主義の裏返しとしての主観主義的思考の結果として生みだされた二〇回大会の「戦争は宿命的に避けられないものではない」という非マルクス主義的な把握をふたたび確認したフルシチョフは、「帝国主義的侵略者が世界戦争をおこすばあいには、かれらに反撃をくわえ、かれらを敗北させる巨大な力がいまは存在する」とのべて、さらに「社会主義陣営の力をよりどころとして平和愛好諸国民は、帝国主義の好戦的なグループに新しい世界戦争計画を断念させることができるであろう」と、このようにしてカウッキの「超帝国主義」の幻想にくみするのである。

「ソ連邦は、ヨーロッパに『核兵器非武装地帯』をもうけ、この地帯内の通常軍備を縮小するというポーランド人民共和国政府の計画を支持している」とのべたフルシチョフはまた、「極東と全太平洋地域に平和地域を、まず第一に、核武装禁止地域をもうけることができるし、またもうけなければならない」とも主張した。国際プロレタリアートの階級闘争の現実から、特定の条件のもとでこのような提案をおこなうということは、かならずしもこれを否定するわけにはいかないであろうが、このさいにも「外交上のかけひきとはなにか」を国際プロレタリアートに理解させることが絶対に忘れられてはならないであろう。しかも現在の国際情勢は、このような外交上のかけひきによってのみ解決されねばならないような事態にはないのだから、フルシチョフのこの提案の欺瞞的性格は明らかにはずである。グロムイコ外相の日本中立化要請にみられるように、それは日本プロレタリアートの階級闘争を弱め、裏切ると同様

の効果も、国際プロレタリアートの階級闘争のうえにもたらすだけである。それはフランス、イタリアから南米キューバに至るプロレタリアートの昂揚を、公認の共産主義運動指導部が日々裏切りつつあるという現実を生みだしている。

「話し合いによる平和」、これが平和共存政策からでてくる必然的な帰結である。この目的からアメリカへの訪問の旅にのぼったミコヤンは二十一回大会で次のように述べた。「アメリカの人民や実業家の大部分がいだいている平和への渴望が感じられたし、また、かれらが『冷い戦争』を嫌悪し、世界にほんとうの平和が到来し、米ソ関係が良好な平和的なものになることを望んでいるのはあきらかだった。

原子兵器やロケット兵器などという致命的な兵器がある現在の状況のもとでは、世界戦争がいかにおそるべきものであるかをアメリカ人は理解している。実業界も、いまでは、昔ながら戦争でもうかりもしたが、いまになつてはアメリカのビジネスも人間自身も戦火のなかにほろびさつてしまうことも知っている（場内にぎやかになる）」（ゴジックは引用者）と。だからミコヤンの頭からは、国際的なブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争の現実、帝国主義ブルジョアジーの本質などは消え失せてしまい、その代りに共産主義者の主観的願望だけがあるのではないか。

そしてかれは「われわれは共産主義者として、他国の共産主義者に同情はするが、しかし、わが社会主義国家はいかなるばあいにもまたいかなるかたちによつて防がねばならない。けつして他国の政党内閣問題に干渉する意向はないことを言明した」（強調は引用者）というようにふるまうて、裏切りの「内政干渉」の原則を

「ドイツ国民の利益にこたえ、欧州情勢の正常化と全欧州諸国の安全保障のために重要な役割を果すであろう。」（朝日新聞）、西ドイツで顯著になりつつある独占資本主義の飛躍的發展、および軍国主義的ドイツ復活の危険は、なによりもプロレタリアートのヨーロッパにおける階級闘争の激発によつて防がねばならない。けつして「ドイツ人よ、ひとつのテーブルにつけ！」というスローガンを支持することによつては防ぐことはできない。それにもかかわらず、小ブルの平和主義の幻想のうえにたつて、アメリカ、イギリス、フランスとの話しあいを要求するだけにとどまっているのがフルシチフの現実的な政策なのである。ドイツ・プロレタリアートが権力をにぎつたドイツ社会主義共和国の実現をめざすプロレタリアートの国際的規模での階級闘争にソ連邦の外交政策を従属させることだけが、いま必要なことであろう。

一方、中近東諸国では、民衆の革命的昂揚が意識的、強制的にアラブ民族主義の枠内におしとどめられ、ソ連邦の外交政策が、アラブ民族主義を平和勢力として肯定していかざりにおいて、その昂揚は、帝国主義・本国の資本の危機と結合されて、世界革命へと発展させられていくことなく、アラブ民族資本の強化のために巧みに利用されて、そのエネルギーを分散させられてしまった。シリア、エジプトの合同によるアラブ連合共和国の成立を契機として、中近東最大のシリア共産党は非合法に追こまれ、このことによつてアラブ諸国における共産主義運動は、ブルジョア・ジャーナリズムも認めるように、ソ連邦の平和共存の外交政策の犠牲に供されてしまひさえた。ただイラクにおいては、最近になつて革命的民族主義の動きが活発になつてきた。ここにおいてアラブ民族主義の主流をな

ふたたび確認しているのである。おそらくは、かつてのスターリンと同じように、プロレタリア・インダナシヨナリズムの精神を「喜劇的だ」と考えているのにながらもない。

しかし、真の共産主義者は、このような民族共産主義の立場にはたたないであろう。帝国主義戦争にたいしては、世界革命を対置するであろう。世界革命の展望によつてのみ、帝国主義戦争をその真の根源においてくいとめ、核兵器の恐怖から人類も守ることができるのである。

ドイツとイラクに対するソ連邦の外交政策ほど、今日の共産主義者の裏切りの本質を露呈している問題はないにちがいない。

「ドイツの再統一は、まったく完全にドイツ国民自身の問題であるということ、はつきりと認識しなければならぬ。いま二つの主権国家が存在しており、世界戦争に火をつけなければならぬ、そのどちらをもとりのぞくことができない以上、ドイツ民主共和国とドイツ連邦共和国との話しあいによるほかに、ドイツの再統一を達成することはできない。その他の道はないのである（拍手）」（フルシチフ）

ドイツ問題に対するこのような原則的立場になつて、最近（三月十一日）、「ソ連・東独共同コミュニケ」が発表された。

「一、ソ連邦と東独政府は、すべての平和愛好諸国民とともに、過去のいまわし事件のくりかえしを防ぎ、新軍事冒険をひきおこさんとするあらゆる策動を阻止するために必要な一切の措置をとることを一致して決定した。双方は対独平和条約の締結をもつとも重要、もつとも緊急を要する措置であると考え、対独平和条約はド

オナセル主義者による共産主義運動への公然たる闘いが宣言されるにいたつた。このナセルの度重なる「反共声明」に応じて、フルシチフは二十一回大会の席上でどのような態度をとつたか？

フルシチフは、「わが国は、他の社会主義諸国と同様に、民族解放運動を支持してきたし、これからも支持するのである。ソ連邦は他国の内政に干渉しなかつたし、また干渉するつもりもない」と千一回目の主張をもう一度くりかえしたうえで、「すべてのことを『共産主義者の陰謀』とみなすのはばかげている」と責任を回避するための弁解をやつきとなつていっている。したがってミコヤンと同様に、せいぜいそれらの国の共産主義運動に「同情」を寄せるだけで現実にはこれら諸国の共産主義運動を窮地におとしめる「平和共存の原則」を声明する。ここにおいてふたたび、千一回目の世界革命に対する裏切りがなしとげられる。

\* \* \*

西欧最大の共産党の一つであるフランスの党が、ボナバルチスト・ドゴールとの階級闘争において敗北を喫した結果、「二つの宣言」に結集する今日の公認の国際共産主義運動指導部の一角に、大きな破綻がおこつた。いままた、ヨーロッパ共同市場の発足を契機として、はじまつた資本主義諸国の矛盾の激化と労働運動の昂揚との前に、イタリアにおいても、独占資本の狂暴化の兆がみえはじめ、プロレタリアートにたいする激しい攻撃がはじまつつある。したがって、今度は、フルシチフ、トリアッチ路線の一方の雄、トリアッチのひきいる、この西欧最大の共産党が試練にたたせられていゝる。そして、すでにみたように今日の共産主義運動の公認の指導部が、その裏切りの性格のゆえに、この闘いを勝利のうちに指導しえ

ないであろうことは明白であろう。そしてそのときには、今日「第三インターナショナル」ともいわれる国際共産主義運動の公認の指導部の最強の一角が地響きをたてて瓦解するだろう。

したがって、新しいインターナショナルの展望は、いまだちに準備されなければならない。かれらの自然崩壊を待つことなく、腐れはてた公認の指導部に代る新しい前衛党を全世界に準備しなければならぬ。このことが早ければ早いだけ、それだけ国際プロレタリアートのたたかいは、勝利を目指して進展していくであろう。

この新しいインターナショナルは、現在の共産主義者によって古くなったとして、ボロ靴のように捨てられて省みられない世界革命のために、全世界でたたかうであろう。世界のどの地域においてであろうと始まったプロレタリアートの革命的昂揚を、ただちに全世界に波及させて、「世界史」的な存在としての共産主義の理念を現実のものとするであろう。そしてこのことによって、平和的共存の基礎のうえにたつスターリニスト特権官僚の存在は消滅するにちがいない。帝国主義権力の打倒は、これら官僚を必然的に崩壊させずにはおかないのである。

このような世界革命の展望の中で、日本のプロレタリアートの果す役割には偉大なものがある。フランス・プロレタリアートがドゴールの前に敗北を喫していたとき、代々木共産党と民同左派幹部の裏切りの指導のもとにありながらも、日本のプロレタリアートは警職法反対闘争をたたかいぬく力量を示した。いまや日本プロレタリアートは、日本独占資本の前にたちふさがる巨大な壁となって成長してきている。日本独占資本がふたたび世界市場への進出をはじめているときに、かれらの蓄えられつつある力量は、国際プロレタ

リアートの力量のうえに偉大な貢献をなすであろう。

その上、現在ではこれまでの公認のプロレタリアートの前衛党からみずから区別し、既成の党の日和見主義を粉碎し、日本プロレタリアートのエネルギーを解放するための新しい前衛党が成長しつつある。この本質的にプロレタリアートの前衛党たるべき新しい前衛組織は、きたるべき激動期を積極的に準備し、その時の到来とともに偉大なる役割を果たすであろう。この組織は全世界に、世界革命を指向する新しいインターナショナルを準備するであろう。

世界各地に現在の共産主義運動の公認指導部の裏切りの本性に気づきつつある部分が生れてきている。それはスターリニスト官僚のもっとも強固な牙城たるソ連邦においてすら、ごく素朴な姿においてではあるが生れつつある。

「今日のソ連、とくに若い世代の間で、次のようなイデオロギイ上の疑問がいだかれていることを認めたものであった。すなわちソ連の経済的生長にもかかわらず、どうしてもまだ個人所得、生活水準や社会水準にこんな大きな差が残っているのか。肉体労働と頭脳労働の間のギャップ、都市と農村の間のギャップを埋めるためになにがなされているのか。国家は『枯死する』兆候が大きくなっていないのはなぜか——という疑問である。」(エコンミスト「ロンドン」特約、強調は引用者)

これらの疑問が真の前衛組織に結集するならば、それは資本の権力を打倒する物質力となるであろう。われわれ真の共産主義者は、このための準備を全世界的におこなうであろう。日本プロレタリアートの力量はその中核となるにちがいない。

(一)、二、四章は曾木、三章は姫岡が担当した。)

## 時評

### 科学・技術をプロレタリアの手に

——科学技術政策と研究者——

黒川五郎

(某科学研究所員)

なぜにプロレタリアートは科学技術の問題に無関心であってはならないのか。科学技術の進歩がもたらしうる被害からみずからを護るためだけではない。また進歩的な科学者技術者の行動を支援するためだけではない。

資本主義の発展とともに科学技術は人間の社会生活でその生産的実践でいちじるしく比重を増した。科学技術はもはや少数の人々の天職ではなく、一つの職業となりみずからの機構を持ち資本主義生産機構の一構成部分をなしている。それは、現在では原子力とオートメーションに特徴的にみられる。プロレタリアートは毎日職場で新しい機械の導入、合理化の問題に直面して

いるし、原子炉の設置一つをとってみても、それがただちに社会問題化するところまできている。強化された日本独占ブルジョアジーは、大学研究機関だけでは満足せず、とくに朝鮮戦争以後多くの大産業資本はそれぞれ自らの中央研究所を持ち、多くの研究者、技術者を擁し、さらにその拡充を進めている。一方資本家政府は科学技術庁の設置に始まり、原子力委員会の設置、首相直属の科学技術会議の設置(五八年)と一連の積極的政策を実行しつつある。

それでは現在進められている独占ブルジョアジーの科学技術振興政策の内容容はなにか。技術の本質的な点は、人

間が生産的実践において客観的法則性を認識し、それを意識的に実践に適用する点にあり、それに生産手段の進歩、生産工程の進歩という現象形態として現われる。これに対し自然科学は自然現象にひそむ客観的法則性を明らかにする学問であって、その研究が技術と結びつき生産的実践に適用しうる性質のものではない。同時に科学の進歩が将来技術の革新に影響する範囲について前もって予想を立てることは、基礎部門も含めて科学のあらゆる部門を発展させることは不可欠の条件である。両者を混同することなく、相互の関連を正しく把握することがまず必要である。資本主義制度のもとでは、プロレタリアートは、生産手段の私有により労働生産物から疎外されているだけでなく、科学技術の進歩からも疎外されている。科学技術の進歩は、プロレタリアートにとっては、新しい機械、新しい材料というでき上



た形骸だけが彼らの外部から与えられることを意味するにすぎない。政府のいう技術者の養成、職業教育の強化はこの形骸にとって能率的な人的資源を大量生産することにほかならず、この結果ますます労働を無味乾燥なものとし、人間の機械への従属を深める。科学技術者でさえ、とくに民間企業における大部分のものは科学技術自体の要求から決まる課題ではなく、資本の利潤の命ずる課題を研究することをよぎなくされている。

彼らの原子力の政策についても同じことがいえる。本来原子力の開発は多くの科学技術分野にまたがる問題であり、原子物理、物性物理、金属学、材料学、建築学基礎部門を充実し、基礎的素養を身につけた多数の研究者を輩出させることによって、始めて正しく発展しうるものである。にもかかわらず、基礎研究には乏しい研究予算しか与えず、でき上った原子炉だけを外国から輸入し、その操作要員を養成する

ことで事足りるとする、安易な政策を追求している。核融合研究という新しい原理にもとづく原子力開発の発展の可能性をはらんだ研究への科学者のイニシアチブに対して妨害こそすれ、積極的に推進することができない。

このブルジョアジーの科学技術政策に対し、社会党はみずから超党派的態度を宣言し、たとえば研究者の反対意見を無視し、研究の国家統制を狙う科学技術会議の設置に賛成した。また日本共産党はこれまで一貫した、科学技術に関する政策を持ったことがなく、地域人民闘争の時期には「国民の科学」の名の下に、人民の直接的日常要求に奉仕する科学を奨励し、これに科学者を動員した。また、困難な諸条件の中で研究者の努力により達成された原子核研究所の設立(五四年)に対しそれが軍事的に利用されるという、今では一笑に付される理由で反対した。この考え方は現在でも、とくに原子力研究の問題においてそれを機械的に軍

事研究に結びつけ、その面からだけ反対する態度に残っており、完全には克服されていない。核兵器に対する評価において、核兵器をなにか特別な兵器として神秘化し、畏怖させ、それがプロレタリアートに対する搾取強化の一つの手段にすぎないことを十分見抜けない弱さと表裏一体をなしている。

プロレタリアートの科学技術政策はなによりも科学技術をプロレタリアートの手に獲得する立場に立たなければならぬ。プロレタリアートが自らの手に科学技術を獲得するということは生産的実践において客観的法則性を認識して行動するようになり、真に生産の主人公となることである。資本主義制度のもとでは、科学技術は歪められた形においてしか発展できない。とくに基礎的研究は軽視される。資本家国家は研究者が研究の必要から創り出したごく控え目な研究予算の増額という要求にすら答えることができない。生産手段をみずから手に奪い返し、み

ずからを解放し、真の人間の歴史を拓り開く使命を持つプロレタリアートだけが、科学技術をみずからのものとしてそれを正しく全面的に発展させることができる。しかし、プロレタリアートが真に生産の主人公となるためには、資本主義制度のもとにおける教育制度、教育内容を根本的に改めなければならぬ。また、プロレタリア権力が、科学技術が生産に占める位置について正しい認識を持たず、生産に直結する科学研究を重視するあまり、あらかじめ研究課題に枠をはめ研究者の創造性をおさえるならば、かかる官僚主義はプロレタリアートにとって自殺行為に等しい。かような点を考慮した意識的な活動がともなわなければ、権力樹立後もいぜんとして自らの上に立つ特権階層として科学者技術者は残存し、プロレタリアートには科学技術の進歩の諸結果に驚異することしか許されないだろう。

科学技術をみずからの手に獲得する

ための活動は、今ただちに開始されねばならない。日本においてはこのための条件はきわめて有利である。原子物理等、とくに戦後新しく開拓された分野においては、困難な諸条件におけるその建設過程において、研究者はみずからの組織をつくり、科学を正しい

より、初めて彼らの間に革命の意識を目覚めさせることもできる。

科学技術の役割が増大したことは、それが国家の枠を破りすでに国際的性質を持っている点にも現われている。共通の研究課題のもとに国際的研究を組織することは、現在でも国際地球観測年の事業、国際原子力機構として始められているが、ブルジョア国家の枠はこれらの機能を弱め、その発展を制限している。原子核物理の巨大加速装置を各国がそれぞれ持つよりは、一つの装置をいくつかの国が共同に利用した方がはるかに社会的労働の節約となる。全ての国にプロレタリア権力を樹立することにより始めて、全世界の資源と労働をもっとも有効に組織し、科学技術の発展に役立てることができ

る。これは一刻も猶予を許されない課題である。

プロレタリアートの積極的支援により研究者を行動に起たせることに

## ドイツ共産党の創立と「スパルタクス蜂起」

——一九一八年〜一九一九年——

鏑木 潔

### 一、世界革命におけるドイツの位置

資本主義の内的必然性の結果として爆発した第一次世界帝国主義戦争は、世界プロレタリアートに世界革命の遂行の現実的条件をはじめと興えたのである。ポリシエヴィキに指導されたロシアプロレタリアートは「帝国主義戦争から客観的に避けがたいものとして生れて来ている一連の革命の火蓋をきるという偉大な榮譽を担う運命となった。」(レーニン)

そしてすでに多くの人々によって語りつくされているように、真の共産主義者として、国際主義に徹していたレーニンは、このロシアの革命を単にロシア一国のものとして完結的に指導したのではなくて、まさに世界革命の突破口を切りひらいたものとして、そして、ロシアの革命自体が世界革命によって支えられることによって、はじめて終局的に勝利しうるものと考えたのであった。

「ロシアのプロレタリアートは、自力だけで社会主義革命を勝利のうちにやりとげることにはできない。しかしロシアのプロレタリアートは、社会主義革命の最良の条件を生みだすような、あらゆる意味で、この革命の端初となるような展開力をロシアに与えることができる。ロシアプロレタリアートは自分の主要な、もっとも忠実な、もっとも信頼しうる協力者、ヨーロッパとアメリカの社会主義的プロレタリアートが決戦をはじめるために情勢を容易にすることができる。」

二月革命の報をチューリッヒで耳にし、開始された革命をみずから指導すべくロシアに旅だとうとしていたレーニンは、ロシア革命の展望をこのように描いている。「ドイツプロレタリアートは、ロシアおよび全世界のプロレタリアート革命のもっとも忠実な、もっとも信頼できる同盟軍である。」(ハスイス労働者への告別の手紙、一九一七年三月二六日)

革命の当初にすでに描かれた世界革命の展望の中で、ドイツの革

### 二、一九一八年十一月の蜂起

「戦争の終結を準備したのは、ドイツ人民の蜂起ではなかった。しかし、このことはドイツにとっては大きな不幸であった事が実証された。」

二度めの世界帝国主義戦争が、ふたたびドイツブルジョアジーを徹底的に疲弊させ、今やドイツプロレタリアートの手によるブルジョアジーの打倒を通じて帝国主義戦争の革命的終結が焦眉の問題となっていた一九一四年五月、ドイツ共産党の長老ビークは、一八年の革命の教訓からなにを学ぶかの問題に次のように答えている。

「それゆえに、一九一八年の人民の蜂起は、戦争の結末に、したがってまたドイツ人民の利益となるような講和条件に、決定的な影響を及ぼすにはあまりにも遅すぎた、ということが教訓として確認される。ここにドイツ人民が繰り返してはならない致命的な第一の基本的誤謬がある。」(「再び繰り返してはならない一九一八年の基本的誤謬」)

「帝国主義戦争を内乱へ」という革命的敗北主義の旗を放棄した第三インターの変節、したがってまた自国ブルジョアジーの打倒による戦争の終結、そして講和そのものを世界革命の利益からのみ考察するという、レーニンがブルジョア講和に際してとったあの態度を失って、ドイツ一国的利害、しかもプロレタリアートの立場を不鮮明にした問題想起そのものはさておくとして、「あまりにも遅すぎた」ことが一八年の革命に学ぶべき第一の教訓だったろうか。

一九一七年から一八年にかけて、帝国主義戦争の鉄の軌は、刻々

命は、ロシアで切り開かれたブルジョア支配の割れ目を世界革命にまで拡大する決定的な鍵であった。ドイツの革命は、「ただ特別な歴史的諸条件によっておそら、はきわめて短い期間、全世界の革命的プロレタリアートの先駆者に」されたロシアプロレタリアートを孤立から救いだし、帝国主義戦争の殺し合いによって疲弊しつくしたブルジョアの支配を、プロレタリア独裁にとって代え、この「一連の革命」を、生産力の普遍的な発展と、これに関連する世界交通、世界市場、そしてプロレタリアートの世界的存在を前提とする、マルクスのいう「支配的な諸民族の行爲として一挙にないしは同時」の革命として実現したのであろう。後進国ロシアの過渡期の経済建設は、ドイツの進んだ技術水準と生産力に結合されることによって何十倍も容易に遂行されたであろう。ロシアポリシエヴィキは、国際革命になんぞドイツ革命に賭けていたのである。

だからこそ、ドイツ革命がこの三、四カ月内に勃発する見通しの不明確だった一八年一月プレスト講和に際して、ドイツ革命の利益のために即時革命戦争を主張した左派の冒險主義と闘ったレーニンも、九カ月後、ドイツの革命が、現実の日程にのぼった時、世界革命の勝利の確信を数倍させてこれを迎えたのである。オーストリア、ハンガリア、そしてドトツの革命を祝う集会で彼は叫んだ。「いたるところで世界革命の第一日が行われる時期は、すでに間近いのである。われわれが活動し、くるしんだのは、むだではなかった。世界革命、国際革命は勝利するであろう国際プロレタリアート革命万才!」

ドイツの革命は、一七年のロシア革命にはじまる世界革命の鍵を握っていた。

とドイツ革命を準備していた。第二インターの精華であったドイツ社会民主党(SPD)の裏切りによって熱狂的におおりに立てられた愛国主義・排外主義から、労働者大衆は急速に離れはじめていた。一六年六月には、リープクネヒトの逮捕に抗議して行われたベルリンのストライキが、A・E・Gをはじめとするいくつかの主要重需工場をマヒさせ、ブルジョアジーを震撼させた。一七年の二月革命の波は、四月一六日に食糧の割当削減に対する三〇万の政治ストとなったが、ライプチヒ、ハール等々へ波及していった。そして一八年の一月末、ロシアボリシェヴィキが国際プロレタリア革命の利益のため、「テイルジットの和議」としてプレスト・リトウスク講和に応じた時、ドイツプロレタリアートは、このドイツ帝国主義者の侵略政策に抗議して「無併合・平和」をメイン・スローガンにかかげた大政治ストライキに立ち上っていた。第一日めの二八日に四〇万人が参加し、ストの行動委員会を選出したベルリンのストライキは翌二九日にはベルリンで五〇万人に拡大し、さらにキール、ハンブルグ、ライプチヒ、プレストラウ、ミュンヘン、ハール等々主要工業都市を嵐の中にまきこんでいったのである。下部労働者のイニシアティブの下に開始されたこの闘いは、組合幹部と政府の裏切りの妥協が見えすいていた故に、三一日の戒厳令の下に中止を余儀なくされたとはいえ、迫りくるドイツ革命の力強い靴音の高まりをはっきりと感じさせた。一月のはじめ、レーニンは、「ドイツ革命のためにソヴェト政府の生死を賭けても、革命戦争を継続すべし」とする「左翼」に対して、「ヨーロッパに社会主義革命が到来しなければならぬし、また到来するだろうという事は疑いない」のであり、「社会主義の最後の勝利に対するわれわれの期待はすべてこの

確信とこの科学的予見にもとづいているのである、「けれども」戦争第四年度の国際情勢は、ヨーロッパに革命が勃発して、ヨーロッパの帝国主義諸政府(ドイツ政府をふくめて)のいずれかは顛覆されるという時期は、とても予測できない、という有様だから」「ロシアの社会主義政府の戦争をば、ヨーロッパの、とくにドイツの社会主義革命が、この半年のうちに(あるいはこのように短い期間内に)やってくるかこないかを決定しようというところのみにうえに、うちたてることは誤りである」と語っていたレーニンをして、その数日後に「これらすべては、ドイツに革命が始った事を、事実として認めさせるものである。この事実ゆえに、われわれにとつては、なおある期間だけ和平交渉を遅延させ引きのばすことも可能となるのである」の一項を、テーゼの後につけ加えさせたのであった。

三月末に開始された西部戦線での総反撃が部分的勝利の後にアメリカの参戦によって決定的敗北にとかえられ、九月に入ってオーストリア、ブルガリアが戦線から離脱するにおよんで国内の反戦的潮流は急速に増大していった。

この状況の中で、リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグらを中心とするスバルタクス団、および一六年の春にベルリンの金属労働者を中心として日和見的組合幹部に対する反対派として形成されずでに数次にわたるストライキ(一八日一日のストもしかり)を指導してきた革命的オプロイテの二つの組織は、それぞれ独自に来るべき革命に蜂起の準備を開始し、労働者の武装にも着手した。

十月四日にに組織されたマックス政府は人民の圧力と参謀本部次長ルーデンドルフの督促により和平を申入れていた。和平交渉は遅

々として進まなかったが、この間に停戦を要求する声は日一日と大きくなっていった。革命の時を逸してはならない。

十月二六日、刑務所から釈放されたばかりのリープクネヒト、オランダの亡命から帰ったビークを加えて開かれた革命的オプロイテの会議は「国民蜂起(マックスは連合国が屈辱的条件を課してきた場合には「国民蜂起」によって最後の抵抗を試みることを主張しすでにその宣伝を開始していた)が宣言された時には万難を排して革命を執行することが決議され、十一月三日に集会デモを行うことを決意した。この日の会議で、革命的オプロイテ執行委員会に、スバルタクス団の正式代表として、リープクネヒト、ビーク、メイヤーの三人が参加が認められた。こうして蜂起の指導体制は形成されていったのであったが、その内部ではかならずしも完全な意志の統一があったわけではなかった。対立はオプロイテ内の独立社会民主党(以下USPD)員とスバルタクスの間におこり、行動の日の設定、及びその行動形態をめぐっておこった。十一月二日の午前開かれたオプロイテ執行委員会は、とみに緊迫化した情勢の中で十一月四日に武装行動に突入する事を決定し、夜の総会にはなかったのである。はげしい討論が朝の三時まで続けられた。一部オプロイテは時期尚早を主張し、スバルタクスは武装蜂起は一揆に終るおそれありとしてスト、デモを主張した。だがいずれにせよ、提案は否決され、行動は一週間延期されることになったのである。

だがこの間に革命は北方の海辺からはじまっていた。十月二九日、英軍との交戦のための出撃命令拒否にはじまったウイリアムスハーベンの水兵の叛乱は、十一月三キールに帰港した第六艦隊の水兵によるデモ、武装衝突、水兵評議会(UBG)の成立(四日)へ

と発展し、キールの叛乱は数日にして全国へ波及、ほとんどすべての港町に労兵評議会が樹立されて行った。

他方、ハブスブルグ帝国の崩壊から連合軍の侵入の直接的脅威にさらされた中部ドイツではSPD、USPD指導下に行われた反戦デモが武装デモに発展し、ついに十一月七日にはミュンヘンに労兵評議会が樹立されたのである。

今や革命はベルリンをまきこまずにはおかなかった、そしてベルリンの革命が各地の蜂起を一つの革命として完成するであろう。十一月六日のオプロイテ執行委員会は、蜂起の時期の決定権を獲得しながら八日に行動を開始すべしとするリープクネヒトの提案をしりぞけ、これをもっとも早くも十一月一日としたという。だがこの統一戦線の革命指導部が決定的時の設定にあたりあまりにも慎重になつている間に革命はみずからの足で歩みはじめていた。革命を阻止するために、六日にはマックス政府の休戦交渉団が発出していた。

七日、USPDの五つの集会が禁止され、八日にはオプロイテの主要幹部の一人ドイミヒが逮捕された。もはや一刻の猶予も許されなかった。「明日はなにかがおこなわれずにはいないであろう」全ての人の心をこの考えが把えていたに違いない。革命指導者たちの間で相互に連絡をとるとる暇さえなかったそれぞれ思い思いに集った三つの派、すなわちオプロイテの一部(バルト)、ビークを交えたオプロイテ執行委(USPDを含む)およびリープクネヒト、メイヤーらのスバルタクスが明日の蜂起を決定し、工場へ、街頭へ檄文を持って散ったのである。

九日全ての労働者はそれぞれの工場の指導者の下に行動に移っていた。デモ隊は固い決意をもって都心へ向って進んだ。街角での兵

士との衝突―一部では射撃が加えられる―死―だがそれは交歓に代る―そしてその後無数の市民が続いた。SPDは「フォアヴェルフ」紙を通じて労働者の「無分別」に忠告したが無駄であった。「即時停戦、平和、パンを要求したエネルギーがベルリンのあらゆる街路をうめつくして王宮に、政府へ向かっていった。このなものも止めない奔流に、具体的にどの目標を与え、どこへ、だれが導くのか？」

皇帝の退位は不可欠であった。マックスは皇帝の返答を待つことなく独断で退位を告示し、正午にはSPDのエーベルトに政権を譲り渡した。それが民主共和維持の最低の条件だと思われたからである。

議事堂は、雑多な兵士、労働者に満たされていた。エーベルトとともに革命の絞殺に主要な役割を果たすことになった社会民主党のシャイデマンは、リープクネヒトが王宮のバルコニーから、労働者大衆をアジっていることを聞くや否やSPDの手によってヘゲモニーをとり、革命を共和制の点で止まらせるために、即座に兵士たちの求めに応じて議事堂の窓から、帝制の廃止、共和制の樹立を宣言した。時は二時である。この宣言に歓呼した大衆のデモは一斉に王宮に向って流れはじめたのである。―常に大衆の革命的行動に立ち遅れ、これを阻止するために、ヘゲモニーを握ることのできなかったSPDは、こうして決定的瞬間に至って、大衆の先頭に立ちえたのである。―ということ、革命的オプロイテヤスバルタクスが完全には（否、全く細い糸でしか）労働者大衆をとらええなかったことを示すことになったのである。リープクネヒトが王宮のバルコニーから社会主義共和国を宣言したのは四時であった。

帝制は打倒された。共和国は成立した、だが、この共和国は誰のものなのか、権力はだれが握るのか？

十日の夜にツイルクス・ブッシュで開かれた第二回ベルリン労働評議会（レーテ）大会は、革命のこのもつとも重大な問題を決定するために開かれた。

シャイデマンの共和国宣言以来革命の阻止を主要な任務とするに至ったSPDには、まずUSPDとの連立政府（「社会主義者」による政府として）の樹立によって労働評議会から権力を奪い取ることが第一に必要であった。「ドイツの民主化」は要求したが、ドイツのポリシェヴィキ化を排する」ことに利益を持つ連合国は、労働評議会による休戦を拒否し、干渉戦争を以て威嚇していたが、SPDはこれを最大限に利用した。

労働者千人に一人、兵士一箇大隊に一人（計約千五百ついで三千人）の代表によって構成されるこの日の評議会に対し、革命の先頭に並んで立つに至った二つの派、すなわちSPDと革命的オプロイテ（USPD左派およびスバルタクスを含む）は、その代議員選挙に際して徹底的オルグ活動を展開したのである。このオルグの成否が、権力の帰趨を決し、革命の帰趨を決したからである。「一人のシャイデマンも政府においてはならない。……君たちを四年間も裏切りつづけてきた連中と手をつなぐことはできない。資本主義とその手先きどもを仆せ」十日の「ローテ・ファーネ」はこう呼びかけていた。

だが、五時に開会された大会は、すぐにSPD派の優勢を示したのである。大拍手をかけたエーベルトの演説の後に、オプロイテ

のバルトが立って「諸君の真只中にすでに反革命がいるのだから、軽々しく信じるな、そしてそれはSPDである」と警告した時、多くの兵士たちの激しいヤジがこれに応えた。議論は権力の問題をめぐって、実権を労働評議会におき、政府を監督せよとする革命派と連合政府に実権を渡せと主張するSPD派の間にそうぞうしく闘わされた。結果は明白にSPD派の勝利を示したのである。SPD三、USPD三、計六人による人民代表委員政府が設立され、一方実権を握るべき労働評議会執行委員会を、オプロイテ（スバルタクスを含む）で独占しようという革命派の意図は敗れ、オプロイテ六SPD六、兵士評議会四（その大半はSPD派であった）計二十四人の構成となり、二重権力は、いずれもSPDの実権の下におかれるに至ったのである。

十一月から十二月にかけての一連の民主共和的諸政策、休戦の締結とともに、人民委員政府と執行委員会との協定の締結によって実権は完全に人民委員政府に移行させられていった。

十二月十六日、四百八十八名の代表を以て開かれたドイツ全国労働評議会（ここにはスバルタクスは十名しか入りえず、リープクネヒト、ルクセンブルグは選出されなかった）は、圧倒的多数で労働評議会制を廃棄し、国民議会選挙を一月十九日に行うことを決定した。十一月九日の革命の過程で生み出され、革命派が、ロシアに於けるソヴェエトと同様に革命の権力としようとした労働評議会は、こうしてみずからの手でみずからの命を絶つたのである。

として権力をミリュエフ・ロジヤンコに譲り渡した過程は、ここでもくり返された。ただ、ミリュエフはいやいやながら権力をひきうけたのに対し、エーベルト・シャイデマンは政治的術策のすべてをつくしてこれを奪い取ったのであった。

だが、ミリュエフらの臨時政府成立をもってブルジョア民主主義革命とし、三月から十月迄を「第二段階」とするおなじみの定式化と同様に、エーベルト・シャイデマン政府の成立に結果した十一月革命を以って「ドイツ革命は社会主義革命ではなくて、ブルジョア革命であり、そのソヴェエトはブルジョア議会の柔順な道具であった」（ソ党史）と客観主義的に規定することはドイツの十一月革命から無限の教訓を学びとらうとする者にとっては全く無意味である。全く同様に、「ドイツ十一月革命に……争う余地のない主体的弱点があるからといって、社会主義革命の性格を否定することができるだろうか？」といい、十一月革命は「敗北に終わった社会主義革命」だったということを証明しようとした」人々に対し、それは「ある程度プロレタリア的な手段方法で行われたブルジョア民主主義革命だった」（ウルブリヒト世界政治資料NO61）と主張して論争に終止符を打とうとすることも、前者が無意味である以上に無意味である。

二月二十三日から二十七日まで五日間の流血の闘いによってツァーリを打たれたロシアの二月革命が、勝利の歓呼のうちに易々

われわれにとつて問題なのは革命指導部のインシアティブを待たずに下から開始された革命的大衆行動の結果が社会民主主義者たちによって民主共和制の点で固定化されようとしている時、これをいかにして打ち破り、革命をトロンまで、つまりプロレタリア権力の樹立にまで推しすすめるか、にある。われわれが、ロシアの二月とドイツの十一月から学ばなければならないのは、なぜにロシアボ

リシェヴィキは二月を十月にまで推しすすみえ、スバルタクスがドイツの十月を実現しえなかつたかの真の原因である。

### 三、スバルタクス団とオプロイテ

往々にしてドイツ十一月革命の敗北の最大の原因は、ドイツに革命党が存在しなかつたことにあるとされている。いかにもそれはドイツ革命の困難さの決定的な一面を語っている。スバルタクス団が、党内左派から独立した組織として明確に分離したのは十八年の十二月三十日であった。だが、このことを指摘するのみでは十一月革命の経験からなにもものも学びとることにならないであろう。

十一月革命が全く自然発生的におこり、これを指導するいかなる革命派も存在しなかつた、のではなかつたことはすでにみたとおりのである。そこには、独自の宣伝組織をもつたスバルタクス団があり、数十万のUSPDがあった。しかし、実際の革命の指導部として活動したのは革命的オプロイテ、なかんずくその執行委員会であった。

革命前夜の革命的オプロイテ執行委員会は本来のオプロイテ執行委員のほかに、みずから革命派として活動していた二つの党派、すなわちUSPDの左派と、スバルタクス団(それ自体、USPD内の最左翼分派としてあったのだが)の主要幹部を含むことによって、諸革命派の合同の統一的戦闘司令部としての役割を担っていたのである。USPD左派からは、レーデポール、ディットマン、ハーゼ等々、スバルタクスからはリープクネヒト、ピーク、メイヤー。こうしてスバルタクス団は統一的戦闘司令部の一翼を占めることによ

って革命を指導したのであるが、問題はスバルタクスの指導がいかなる物質的力としてオプロイテの方針に影響を与え、オプロイテ傘下のもっとも革命的労働者をその影響下におきえたかであった。

革命的オプロイテは、すでに徹底的に墮落し官僚化し、文字通りの労働貴族になりさがった労働組合幹部の手から下部労働者の手に労働運動指導権を奪回するために、独自に選出された代表による対立的指導部として、一九一六年に金属工業労働組合からつくり出されたものであった。したがって政治的には無党派といつてよく政治方針、闘争目標等は不明確であつてUSPD支持の部分が多かつたのではあるが、純粹に労働者の闘うための組織であり、そのかぎりでは労働者大衆の意欲、動向をもっともよく代表していた。

これに対しスバルタクス団は決して労働者を中核とした組織とはいへなかつたし、労働者をその独自の政治的影響下に組織する点においても徹底的に遅れていた。当時のスバルタクス団の組織人員については数百人ともいい、千を単位とした数だともいわれているが、とにかくその大部分は急進的インテリとルンペンプロレタリアートであつたという。グロートヴォールは「なお理論的欠陥をもつたイデオロギー的な一流派」にすぎなかつたといひ、ラデックによれば「胴体なき精神」であつたという。が、いずれにしろ、スバルタクス団は近代のプロレタリアートの接触を欠き、彼らをもつた旗の下に結集する仕事において全く成功していなかつたのである。それはスバルタクスの致命的欠陥であつた。必然的にスバルタクスは、革命的労働者を自己の政治的影響下に闘争に組織する道は、革命的オプロイテを通じるしかなかつたのだが、この両者の間では、成術の問題で対立することが余りにも多かつた。オプロイテは、ス

バルタクスはあまりにも街頭行動が多すぎるといつて非難し、スバルタクスは逆に合法主義、議会主義的だと攻撃したのである。

革命の期間中、スバルタクスと革命的オプロイテ(したがってUSPD左派は)は共同して闘つたのであつたが、この二つはついに組織的合一の方向に歩むことなく、二つの分裂した組織として止まつたのである。

そしてこのことのもっとも重大な要因はスバルタクス団が労働者の組織として確立しておらず、労働者をその独自の影響下に組織しえていなかつたことであつたであろう。

「ドイツの労働者は、あまりにもおそく行われた分離のために、墮落した(シャイデマン、レーギエン、ダヴィッド等々)無性格な(カウツキー、ヒルファーディング等々)資本の従僕との統一」という、にくむべき伝統のために、危機の瞬間においてなお真に革命的な党をもたなかつた」(レーニン、「ドイツ共産党員への手紙」一九二一年)

スバルタクス団がドイツ共産党(KPD)としてはじめてUSPDから組織的に分離したのは十八年十二月である。だが、このこと、つまり十一月革命の後にはじめて分離したことのみが「あまりにも遅くおこなわれた分離」の内容ではない。それはスバルタクス団の全歴史の問題であり、すでに墮落し、ブルジョア第二党になりさがつた党から、革命的翼をきっぱりと分離する全過程の問題として、われわれは学ばなければならぬ。

マルクス・エンゲルスの直接の指導の下に一八六九年アイゼナツパで創立されたドイツ社会民主労働党(USPD)は、その以後も、

もっとも正統的な労働者党としての位置を国際的に占め、第二インターの中核となつたのである。一八九〇年エンゲルスの援けによつて作成され採択されたエルフルト綱領は、社会主義党の模範的綱領として認められた。だが、後進国として出発したドイツ資本主義が、九〇年代の不況の後、急速な発展の道をたどるにつれて、SPD内の右派の形成が進んだのである。一方では選挙における成功と、それによる国会議席の急速な拡大は、議会主義的幻想と、改良主義的方向を強め、それが労働組合幹部の墮落、資本の従僕への転落と密接に結びついていった。他方、理論の面でも一八九五年に「社会民主主義の諸前提」という形で集大成されたベルンシュタインの修正主義の提起となつてあらわれた。九五年から九九九年にかけてベルンシュタインとカウツキー、ローザ・ルクセンブルグ等の間に闘わされた激しい論争によつて修正主義は排除され、その過程で左右の対立にはつきりとあらわれ、分極作用が進行したのである。

が同時にベルン・シュタインを除名することを敢えてしなかつた党は実際活動においては一層合法主義的、議会主義的、改良主義的方向へ向つたのである。平和的發展の時代にあつては、革命ははるかかなたに見え、究極目標と現実の運動を分離して考えることはしごく当然のことのように思われたのであり、革命は、たかだか、その党の政治綱領を決定する際にあらわれる理論的問題とみなされていたのである。この改良主義にもかかわらず、理論における「正統マルクス主義」はSPDが第二インターの中心の地位を保ちつづけることを妨げなかつた。試練は帝国主義戦争に於ける決定的分裂、第二インターの崩壊まで延引された。

帝国主義戦争の硝煙の臭が血生々くすべての人の鼻をうって

た七月二十六日SPD機関紙「フォアヴェルツ」は「ドイツ兵士の一滴の血といえども、オーストリアの権力者や帝国主義的利潤追求者の肉欲のために流されてはならない。……大規模なデモンストレーションによって階級意識あるプロレタリアートの不動の平和の意志を表明せよ……われわれは戦争を欲しない戦争をやめよ諸国民の国際的友愛万歳」といささか抽象的であり、帝国主義戦争に対するプロレタリアートの立場はきわめて不鮮明であってプチブル平和主義的色彩をはっきり示してはいるが、とにかくきっぱりと反戦を主張していた。だがそのわずか一週間の後、国会において軍事公債への賛否を迫られた時、八月三日の秘密代議士会は七四対一四で賛成を決議し、翌日あのレーニンを驚倒させ、第二インターの歴史的潰滅の印となったSPDの軍事公債への賛成投票となったのである。骨の髄まで日和見主義と改良主義・議会主義に侵されていたこの党の幹部たちは、権力の弾圧と労働組合官僚・社会愛国主義、社会排外主義に屈したのであった。

ここではじめて党内に三つの分派が公然と形成されたエーベルト、シャイデマン、ベルンシュタイン等々の社会愛国主義・排外主義派（右派）、カウツキー、ハーゼ等の社会平和主義派（中央派）そして最左翼のリープクネヒト、ルクセンブルグ、ツェトキン、メーリング等である。この三派は戦争の過程で一層分離をおしすすめ、一九一七年にはSPD、USPD及スバルタクス団の三つの政党として出現していた。

最左派は十五年に入って独自の組織的結集を開始し、国会における公然たる反戦宣伝とともに、四月には機関紙インテルナツィオナールを発刊し、労働者に新匿名執行部によってアピール、「SPD

「スバルタクス派の人々については社会民主党から組織的にも分離しはじめたこの分離はまだ首尾一貫したものでなく、戦争反対闘争には完全に中途半ばな態度をとっていたドイツ独立社会民主党（USPD）に加わり、宣伝組織としてのスバルタクス団を結成するというにとどまっていた。」

ピークは当時を回想してこのように語っている。

たしかにスバルタクスはUSPDの最左派として形式的には存在し、完全に独立した党ではなかった。だがここに全ての問題があるとするのは明らかに誤りであろう。なぜなら思想的、政治的に既存の日和見的指導部とキッパリと袂別した部分が、実践的革命家としてみずからの思想、政治方針を組織に定着させ、「批判の武器を、武器の批判」に転化しようとする時、彼にとって問題なのは、その思想、政治方針の下にいかにか革命的労働者を獲得するかのみだからである。既存の諸政党、諸組織はそのためだけに利用しえ、またどう利用するか、として問題になるのである。組織的分離、独立の党がしたがって既存の労働者党に対して競争的、対抗的存在としての党が出現するためには、一個の物質的力を獲得して既成諸党の官僚的圧迫にも対抗しうる政治勢力にまで成長することが必要である。だから、新たな革命党の組織を追求する者にとってなによりも重要なことは、まず第一にその区別された思想的、政治的内容を鮮明にかかげ、腐れはてた諸方針にみずからのそれを旗色鮮明に對置して大衆に示すことであり、第二に——これこそが決定的なのだが——この旗の下に革命的部分を、そしてなによりも革命的労働者を、独自に、日和見的諸党と区別して組織することになければならない。そのためには利用しうるすべての組織が利用されね

幹部、代議士に与える公開状」等を発して大衆の宣伝活動を開始した。そして十六年一月一日にはじめて左派全国協議会を招集し、「帝国主義戦争を内乱へ」の実践的遂行、第二インターの崩壊の確認と第三インターの創設等の綱領的要求を明らかにして「スバルタクス団」として独自の組織として全国活動に入った。灰色またはバラ色のペラペラの紙に印刷された「スバルタクス文書」が労働者の前に現れたのはそれから間もなくであった。

完全にブルジョア第二党に転落した、またプチブル平和主義の粹を決して越ええない部分から袂別して、新たに革命的労働者党をめざす組織的、目的意識的闘いがこうして開始された。

「ドイツ社会主義の未来を代表するものは、ジャイデマン、レーニン、ダヴィッドの一派のような裏切者でもなければ、ハーゼ、カウツキー、その他これに類する諸君のような、動揺する、無定見な、「平和な」時代の古いしきたりでしめつけられた政治家でもない。

この未来は、あのカール・リープクネヒトを出し、「スバルタクス団」を生み、ブレーメンのケアルバイターポリテイクで宣伝を行っている流派のものである」（レーニン十七年三月二十

六日）  
第一次帝国主義戦争の最中に、組織的結集と分離をなしたとげ、新たな労働者階級の革命党を結成する闘いに入ったドイツの古い同志達の活動から、今まさに無定見な「平和な」時代の古いしきたりでしめつけられた党から断絶して真の前衛党を創造する活動を開始したわれわれが学ばなければならないのは、単に分離を開始した、ということだけではないだろう。

ばならない。（ドイツの場合、革命的オプロイテなどはその最も重要なものであっただろう。）一定の期間、それから分離すべき日和見的党内に止まることは、この党の指導部に対してあまりにも多くの不満と怒りを持ちながら、見通しのなさからあるいは、この党の「革命的再生」の幻想にとらわれていまだ組織的につなぎ止められている多くの革命的労働者大衆に、その指導部を暴露し自らの旗の下に獲得するために、不可避であり、必要である場合があるのだ。ヨーロッパの多くの共産党は（今はまさに日和見主義そのものになり下っているが）フランスにおいて、イタリーにおいて、このようにして社会民主党の胎内から生れ出たのであった。

だが、さきにかかげた第二の任務、革命的労働者大衆の独自の組織化がなおざりにされて、第一の任務のみに没入するならば、それはピークのいうように宣伝組織に止まらざるをえないだろう。そしてこのある場合には不可避的に存在する分離のための過渡的期間は一瞬一秒でも短縮すべく努力されねばならないだろう。そうでなければ、この「長すぎた資本の従僕との統一」というにくむべき伝統は、「危機の瞬間においてなお真に革命的な党をもたなかった」という結果をもたらすからである。

日和見的党からの革命的翼の組織的独立の問題を、即時の機械的分離とのみ捉え、スバルタクス党のための闘争の歴史をこのようにしか学ぼうとしないのは無意味である。と同様に、分離の過程で不可避的に存在する過渡的期間と状態を固定化し、絶対化し、歴史的一時期にまで拡張し、一個の体系にまでひきあげるのは、全くの組織論における日和見主義である。

そもそも、党は、理論と実践を媒介するものとしての組織、ブル



ジョアの生産様式の中にあつては、単なる物、単なる客体としてあらわれるプロレタリアートを、まさにこの諸関係の廃棄の運動の主体として、社会発展の協同的決定にあずかる主体として登場させるものとしての組織であるとすれば、党はプロレタリアートをその階級意識、徹底的で明確な革命に対する意志にしたがつて組織し、プロレタリア大衆をこの方向に向つて組織しなければならぬのである、このことによつてはじめて、党とそれを生み出した階級、およびその主体的実践によつて展開される社会的変革の過程との生き生きとした相互関係をうちたてる条件が与えられるのである。党形成のための闘争はプロレタリアートの階級意識のための闘争であり、前衛党のプロレタリア大衆からの分離は、到達しうべき階級意識の最高水準を鮮明に物象化し、その均等化を促進するためにこそ必要なのであり、かくしてはじめて階級としての独自の存在を全階級に意識させることができるであらう。

「一定の時期に客観的に存在する『階級意識の』最高の可能性を、明確に作り出してゆくこと、したがつて意識の前衛が、組織上独立することは、この客観的可能性と事実上の平均的意識状況との開きを、ある方法で、つまり革命を促進する方法で、うめてゆく手段にほかならない」(ルカーチ「階級意識論」一九二三年)

一八年および一九年にかけてのドイツ革命の敗北と一九年に彼自身中心的に参加して敗れたハンガリー革命の後に、階級と党に対する痛烈な自己反省の究明の結晶としていわれたこのルカーチの言葉をわれわれは、深く心に刻む必要がある。

ドイツ共産主義者が、この党のための闘争において決定的に立ち遅れており、のみならず誤つていたことを、われわれは明らかにしなくてはならないのだ。この点において、全ての社会民主主義者とは異つて大衆行動の意義をはつきりと認めながら、また「究極目標」と「運動」を分離することによつて改良主義を持ちこもうとした人々に対して徹底的な批判を加えながら、この「究極目標」と「運動」との弁証法的関係、すなわち理論と実践の具体的媒介としての組織に対する明確な理論的実践的方針を持ちえなかつたということ、すなわちプロレタリアートの革命運動をかなり空想的に、直接的無媒介性においてしかとらええなかつたという組織方針におけるローザの誤りは致命的になつたであらう。

この党、すなわち彼自体は単なる一個の商品であり経済過程の客体にすぎないプロレタリアート(なぜなら、すでに述べたように、階級意識の形成、主体への成長は、彼が生産過程の中におかれて位置そのものからは必然的に、自然的には生れないからだ)に、階級意識を覚醒させることによつて、ただ潜在的にのみ主体であつたものを現実の主体として登場させるものとしての党が存在せず、あるいは、その階級との生きた相互関係を失つていている場合には、資本主義の内存的矛盾の一つの爆発が自然発生的大衆行動として開始されても、これをただちに革命にまで導くことはできないのだ。多くの場合、自衛行為として勃発するこの大衆の闘いは、しかしその無自覚性、無目的性の故に、その直接的目的——たとえば、パン、平和、または警職法阻止等々——が達成されたいと思われた瞬間、もしくは達成されえないことが明らかになつたと思われた瞬間終熄に向うのである。

ここに二月革命とドイツの十一月の決定的差がある。たしかに二月にロシアポリシエヴィキも革命を指導する準備を持たなかつた。

メンシエヴィキがその先頭に立ちえなかつたのは当然としても、ポリシエヴィキにしてもその主要な地下指導者たちは、二月革命の期間中これをこれまで度々あつた革命的表示であつて、決して武装叛乱ではないと考へたのであり、中央委員会代表、同志シリヤブニコフは明日にたいするいかなる指示も与えることができなかったのである。だがにもかかわらずベトログラドの市街戦を五日間継続させ、ツアーを打倒したものは、無名の革命家たちのイニシアティブ、すなわち首はなかつたけれど、一人一人の革命家として、まさに徹底的で明確な革命に対する意志に貫かれて大衆を導きその先頭に立つて闘つた無数のポリシエヴィキの行動であつた。ここに於いて、党と階級の間には生き生きとした相互関係が危機の瞬間において成立していることが証明されたのである。もちろんこのことはロシアの二月革命が自然発生的段階をつきぬけて、プロレタリア権力に到達しえなかつたことを否定するものではない。しかし、ここで重要なのは、にもかかわらずロシアポリシエヴィキは労働者、大衆との生きた相互関係をしっかりと持っており、この、途中で足ぶみさせられた革命の過程で、このキズナを強めえ、一月をレーニンの指導の下に準備しえたことである。

これに対してドイツの「スバルタクス」が、戦争の五年間の闘争の後にも、大衆を独自の影響下に獲得することに決して成功してはいなかつたことを一月一日の労兵評議会総会で確認されたのである。

SPD 反対諸派中の多数派であつた中央派が独立社会民主党(U SPD)を正式に結成したのは十七年の四月であつた。U SPD 結

成の過程で、一切の反対諸派の糾合による統一戦線組織、及その中の組織・宣伝活動の独立性の保持を条件として提起していた「スバルタクス」は、この要求が容れられることなくU SPD がつくられた時、多くの討論の後に、軍事独裁に対する防壁の必要と、U SPD 傘下の労働者を「スバルタクス」の影響下に入れる必要の二つの理由によつて、いざんとして党内左派として止まることをきめたのである。この躊躇は、独立的宣伝・組織活動の一層精力的な展開を妨げるものではなかつたが、革命の過程は眞の革命派の前衛党への組織は一刻も遅らすことのできない問題であることをあまりにも明らかに示した。一月一日には占拠した印刷所によつて「ローテファーン」を発刊し、一日にはリープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ、レオ・ヨギヒュス等一三人による中央指導部を結成し、任務分担を明確化して組織としての体制をつくりあげていった「スバルタクス」は、U SPD 全国大会招集の要求が、ハーゼ等々の幹部によつて拒否された時、はじめて完全な組織的分離を日程にのぼせたのであつた。革命の初期、大衆の先頭に立つかに見えたU SPD 指導部は、革命の一时的停滞とSPD による反革命の組織化の進行、そして大衆の分極化という中で急速に保守的になり、「秩序」の回復のために労働者を重要な闘争から引き離す努力を開始していた。下部黨員の批判の声は増大し、革命的オプロイテ議長として政府に参加したバルトに対する不信は二月一日のオプロイテ会議における不信任決議となり、リープクネヒトの党大会要求の提案は全面的支持をかちえたのである。革命的オプロイテに結集する労働者、およびU SPD の平黨員の中に左傾化が進んでいたに違いない。新らたな革命党の結成はこのような動きを基盤として行われるであらう。

だが、スパルタクス団の非労働者の性格、行動における街頭的急進性に対する不信とをぬぐい切れなかった革命的オプロイテが、新党結成に対する両派の統一条件として、国民議会不参加決議の撤回、党幹部委員会・新聞委員会の構成における平等、街頭戦術の詳細な規定、街頭闘争を行う際のオプロイテの同意、新聞、ピラに對するオプロイテの発言権の強化、スパルタクスの名の削除、等を提出した時、これを拒否したスパルタクス団（私には決してうけいられない条件とは思えないのだが）は、決して広くもなく、またかならずしも労働者のでもない基盤の上にその創立を余儀なくされたのである。

十二月三十日、党創立大会はブレイメン左派を含む四十六地方八十三代表、赤色兵士同盟から三代表、青年層から五十一代表（その他外国の来賓）計八十七人の出席で開かれた。USPDから袂別した共産党の創立、組織はSPD、USPDとは逆に工場を基礎に確立されねばならぬ等々をなんの異議もなく確認し、ローザ・ルクセンブルグの提出した綱領を採択したこの大会は、しかし一月十九日に予定されていた国民議会選挙への参加をめぐって、その重大な弱さを暴露したのである。「われわれは議会主義的活動をするためではなく、国民議会というこの反革命の牙城に対して大衆を動員し、尖锐な闘争を行うためにこそ、国民議会の演壇を利用しなければならぬ」として選挙への参加を訴えた提案は六二対二三で否決され、「現在選挙の時期ではなく、国民議会に對抗して、大衆ストライキと機関銃をもって闘争せよ」と主張し、国民議会をベルリンから放逐し、そのあとに新政権を樹立しようという提案が支持されたのである。大会は極端な急進主義が冷静な情勢の判断と戦術の決定を

#### 四、一月闘争——ドイツの七月？——

反革命の準備は着々と進められていた。社会民主党が革命の抑圧と反革命の組織の先頭に立った事は革命の勃発の瞬間から明らかであったが、十二月六日に時を同じくして起った三つの事件——すなわち武装兵士の一団によるエーベルトの大統領推挙、他の一団によるベルリン執行協議会の政府の名をかたつての逮捕のくだり、およびスパルタクス団のデモンストレーションと近衛騎兵隊の衝突——は反革命が武装した準備的行動を開始したことを示していた。この日を契機としてSPDとUSPDの対立は激化し、十二月十六日に行われた全国労兵評議会が執行機関として選んだ、中央協議会への参加を拒否したUSPDは、十二月二十日の人民海兵団事件——すなわちベルリンに駐留しとみにUSPDへの傾斜を濃くしていた人民海兵団を武装解除しベルリンから追放しよう、政府は大砲で武装されたポツダム近衛隊によって攻撃させた。数時間の戦闘の後に大衆のデモが人民海兵団を救った——を契機として政府から人民委員を引きあげるに至った。

この二つの社会民主党（SPDとUSPD）の決定的対立への移行は、労働者大衆の分裂が生み出されはじめていることの反映でもあった。労兵評議会から政府への権力移譲によって革命は頓座したとはいえ、労働者大衆の革命的情熱は冷却してはいない。革命諸派、とくにスパルタクスによって行われたデモンストレーションには莫大なエネルギーが結集された。十二月六日の事件に抗議する十二月二日のデモ、全国労兵協議会への圧力として行われた数方のデ

誤らせる危険を明らかに示していた。

創立された党はすでに著しい困難さをそのうちに持っていた。そして革命派はオプロイテと共産党の二つに分裂したままであった。

だが、いずれにしろ党は創られたのである。

「リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ、クララ・ツェツキン、フランツ・メーリングというような、世界的に知られ、世界的に著名な指導者、労働者階級の忠実な味方を擁しているドイツの「スパルタクス団」が、ドイツの略奪的な帝国主義ブルジョアジーおよびヴィルヘルム二世とむすんで、永久に恥をさらしたシャイデマンやジュデウムのような社会主義者、これらの社会排外主義者……との結びつきを最後のに断ちきった時、「スパルタクス団」がみずから「ドイツ共産党」と名のつた時、——そのとき、真にプロレタリア的な、真に国際主義的な、真に革命的な第三インターナショナル、共産主義インターナショナルの設立は事実となった」（「ヨーロッパとアメリカ労働者への手紙」）

レーニンが歡喜して迎えたドイツ共産党の創立はまさにかかる国際的意義と任務を負っていたのである。

そして「若い党は誤謬をのりこえて自らの途を発見するである」（ローザからツェツキンへの手紙）

国際革命の鍵を握ったこの若い党が、自らの道を見出すための試金石は創立大会のわずか四日後に到来した。

モ、十二月二十五日の「人民海兵団」襲撃に抗議するデモ、等々。だが同時にこれらのデモは反革命派の旗の下に独自の大衆デモが組織される方向を明らかに示していた。十二月二十九日に行われた十二月二十四日の事件の犠牲者の葬儀において、一カ月前に行われた十一月九日の犠牲者の葬儀の時と全く対照的に、二つの派に属する二つの大衆デモンストレーションが鋭く対立したのである。

ドイツ革命に劃期をもたらすこととなった十九年一月はこのような中に行ってきたのである。

反革命と労働者の衝突は、ベルリン警視總監アイヒホルンの罷免によって火を点じられた。すでにUSPDが政府から退き、プロイセン政府からも退いた後に、ベルリン警視總監を握って反革命の障壁となってきたUSPD左派のアイヒホルンを追放することは、SPDの最後の「浄化」作業であった。一月三日のプロイセン政府からのUSPDの退場を契機として四日アイヒホルンは罷免された。その日の夜行われていた革命派の二つの会議、USPDベルリン支部幹部と革命的オプロイテの合同会議（これにリープクネヒト、ピートクも参加していたという）及び共産党（KPDスパルタクス団）はアイヒホルン罷免阻止のデモンストレーションへの旗を發した。

五日午後二時、激昂した大衆は続々とジグスアツレーへと結集したのである。

——こうして、闘いの絞殺者たちによって「スパルタクス蜂起」と年代記に書き込まれた一月闘争は始まったのである。

五日のデモは、しかしその指導者たちが予期したものよりはるかに大規模なものとなって警視庁前広場を埋め、レーデブーア、リープクネヒト、アイヒホルンらが次々にバルコニーに現われて激しい

政府攻撃のアジテーションを行った。だが明確な闘争の指導方針を持たなかった彼らは、具体的行動の提示を夜の指導者会議までのぼさざるをえなかった。——この間に、混入した一部熱狂的分子を中心にした一団はフォアヴェルツをはじめとする大新聞社、ヴォルフ電信局を占領していた。

五日の夕方、指導者会議、このある意味ではドイツ革命の生死を予示することになったこの会議には約七十名のオプロイテ（内五分の一はKPD）、USPDベルリン支部幹部、およびKPDを代表してリープクネヒトとピークが出席していた。闘争の目標を政府打倒、権力奪取とし、その戦闘の開始を決定するに至ったこの会議の主導権はリープクネヒトとピークが握っていた。彼らは、「人民海兵団」の指導者ドレンバッハラによってなされた、軍隊は闘争へ参加するであろうという報告（それが誤りであったことは翌日の闘いが証明した）、デモの一隊による新聞社などの占領の報道などによって異常に昂揚させられた会場の雰囲気の中で、慎重論をとなえた一部オプロイテ幹部に反対して政府打倒、戦闘開始を主張するに至ったのである。会議の決定権を握っていた革命的オプロイテおよびUSPDベルリン支部幹部たちは、スバルタクスによって常に攻撃されていた革命的エネルギーの欠如という汚名を一時に返上せんとして、この会場の空気の中で、KPDとその勇敢さを競ったのである。こうして、政府打倒の方針は、ドイミッヒ、ミュラーら六人の反対のみの圧倒的多数で可決され、権力奪取の暁に、政権を担当すべき革命委員会がルーデプーア、リープクネヒト、ショルツェを議長として選出された。こうして無準備のまま開始されたアイヒホルン擁護の闘争は、一夜にして権力を直接の目標とするに至ったので

ある。

だが、リープクネヒト、ピークによって主張されたこの方針は、明らかに前日の党指導部の決定と矛盾していた。当時の党指導部は徹底的な経済闘争によって労働者のエネルギーを引き出し、それを評議会に結集させ、政府の根柢を掘り崩すという大会の方針（この方針自体は「政府のけつこうな命令や、立派な国民議会の決議をまつかわりに、大衆は本能的に、社会主義へ、資本との闘争へとみちびく唯一の現実的手段をとったのだ。……いま開始されているストライキ運動は、政治的革命的な、社会の社会的基礎におそいかかった証拠である……」というローザの言葉にみられるように、権力の問題を経済闘争で解決しようとする点で誤っていたが）に基いて行動しており、今権力を奪取しても、二週間とはそれを維持できないだろう、という現実的判断の上に立っていた。

大衆の熱狂的エネルギーに押されて、革命党として不可欠の主体的力量の現実的評価を忘れたまま、KPDは闘争に突入していったのである。

六日のデモも大規模なものであったが、反面SPDを支持する大衆行動が発生し二つのデモの緊張した対立がすでに形成された。指導部が大衆を街頭に残して協議に時を費す間に、反革命は急速にその牙をみがいていた。SPDの武装部隊の編成の進行、ベルリン守備隊の政府側への傾斜、そして「人民海兵団」の中立化。このような情勢の中でUSPD右派の幹部は妥協工作を開始し、九日には、A・D・Gおよびシュヴァルツコップ工場の数千の労働者が集会し、労働者相互の殺戮に終止符を打つためSPD、USPD、KPDの各派労働者から成る調停委員会を選出するに至った。こうして

闘争が前進を躊躇する間に政府は公然たる武装反撃を開始した。十一日三千名の義勇軍（ドイツ帝国軍隊の旧将校団の下に組織された）を率いたノスケのベルリン到着によって、まずフォアヴェルツ社が惨虐な砲火の下に奪還され、十二日には警視庁も占拠されるに至った。敗北は決定的となった。オプロイテ幹部もまた妥協工作の方向に向い、革命指導部が自ら決定した権力への闘争の開始の直後に不統一を露呈し、総じて全くの不決断に陥ったことは、敗北を一層致命的ものにしたのである。一月十日KPD指導部はリープクネヒト、ピークを革命委員会から召還せざるをえなかった。

\* \* \*

一月闘争は革命的労働者大衆の老大なエネルギーを空費させながら敗北に終わった。そしてこの敗北の傷手は余りにも大きかったであろう。もちろん、十九年のドイツ革命の昂揚はこれで終りはしなかった。ベルリンの斗いは、次々とドイツの諸都市に波及し、三月のベルリン大ストライキとしてふたたびベルリンに戻ってくるまで続いたのである。一月下旬のブレイメンの人民委員政府の樹立、一月下旬から二月中たかかわれた、ラインランド、ヴェストファーレン炭鉱地帯の社会化を要求する大ゼネスト闘争、二月下旬の中部ドイツ鉱業地帯のストライキ闘争、そしてそれに続いた三月のベルリン大ストライキと一週間に亘る市街戦。だがそのいずれもが統一した指導を与えられぬまま、いちじるしく強化され、熱狂的反革命テロリストの集団として登場した義勇軍によって、次々にげいしい武装闘争の後に流血のうちに各個撃破されたのである。

そして一月闘争の敗北の主要因としてSPDの白色テロルとともに、USPDオプロイテの不決断と妥協にあげられるのを常とす

る。たしかにそれは明らかな事実であり、決して忘れることのできないことであろう。だが、なによりも決定的であったのは、最高度の階級性によって他と区別され、革命の指導部隊として組織されたKPDが、若かったとはいええん争の開始の時にすでに正しい方向を明らかにしえず、闘争の進展と共に明らかにした労働者大衆の分裂、指導部の逡巡、反革命の急速な成長という中で、革命的大衆を正しく次の闘いを準備する方向に導くことに失敗したことにあった。

ここにも、十数年の合法・非合法の闘いと数度に及ぶ武装闘争の経験にきたえられたロシアボリシエヴィキとの決定的差異があった。ロシアボリシエヴィキは、労働者を決定的瞬間に武器をとって権力につき進ませる確固とした指導能力を具備していたが、同時に彼らは、叛乱を欲して猛進しようとする労働者大衆をデモンストレーションに止まらせることによって最後の勝利を確保する術をも体得していたのである。

二月革命において、血を流して闘い続けた全成果をプチ・ブル民主主義者達に横奪された労働者大衆が失望と憤激をもって、無準備のままに、綱領もなく冷徹な予備軍の評価、闘いの結果の考察もなままに、彼らが決定的に達成しえなかったものを遂行し、纂奪されたものを奪還しようとする新たな一撃を加えるべく叛乱にかり立てられていた七月、ボリシエヴィキが数十万を巻中にまきこんだこの闘争を一個の示威運動に転ずるために全力をあげたことはよく知られた事実である。彼らの努力にもかかわらず、闘いは「示威運動をはるかにこえたもの」に発展したし、危機の二日間というもののベトログラードの権力は全く政府の手から離れていた。だが、彼らボ

リシエヴィキは、この斗争を「自然発生的であり時期尚早である」と空論的・客観主義的に評価して大衆に背を向け斗争の指導権を一撥主義者・無政府主義者に譲り渡すのではなくて自からデモの先頭に立つという革命家としての主体性を持っていたと同時に、彼らはただ大衆の爆発するエネルギーを讃嘆するばかりでなく「ポリシエヴィキは権力を維持できるか」という冷徹な問にみずから答え、その答えにしたがって闘いを導く主体性と能力も持っていたのである。

革命の成功のために最大の犠牲を払い、もっとも多くを期待した階級が、もっとも少ない獲物しか得る事が出来なかつた多くの革命——これを現代マルクス主義者たちはブルジョア民主主義革命、民族独立革命等々と好んで呼んでいる——において、革命の過程で同盟者をいち早く裏切ることによって成果を独占しようとする「革命的」ブルジョアたちが、革命の一層の進行を抑制して「秩序」を回復するために、革命で打倒した当のものとも手を結びながら反革命に転ずる時、大衆は憤激を挑発され自己の力を過信して新らたな一撃のために闘いにかりたてられる。このような時、ブルジョアジーは今や不倶戴天の敵となつたプロレタリアートを決定的に清算するために、この下からの叛乱の爆発をまぢかまえ、時にはみずから火を点じようとするのである。そして、この「補足的半革命」は、十分経験を つんだ革命党と、その党と労働者大衆との生きた相互関係が存在しない場合には、往々勝利的反革命をもつて終るのである。

ロシアの七月事件は、百余の死傷者を記録しレーニンに地下潜行を余儀なくさせたとはいえ、すぐれた党の存在によってプロレタリアートの勝利の一道標となりえた補足的半革命の数少ない例となつた。

月事件」を二度とくりかえすことは許されなかつたであらう。

だが「七月事件はドイツでは一九一九年の一月週間、一九二一年の三月事件、一九二三年の十月敗退等、各種の版を重ねては反覆されたのである。ドイツのその後の歴史全体は、これらの事件から結果しているのである。不成功におつた革命は、ファシズムに切り換えられた」(トロツキー「ロシア革命史」第二巻)

た。これに対して、ドイツの一月斗争は勝利的反革命に大道をひらいたのである。

一月斗争の犠牲は、その数において他の「補足的半革命」——たとえば一八四八年のフランスの六月斗争、パリコミューン等々——に比して決して大きいものではない。だが、その敗北の政治的内容は余りにも大きくドイツ革命史をおおっている。この敗北によってUSPDは数十万の大衆的労働者党であつたにもかかわらず、その日和見主義、狐疑逡巡、無定見の故にプロレタリアートを勝利に導く能力に欠けることを露呈したのであり、他方生れて二週間を経ない若いドイツ共産党は、物的に首をはねられたのである。

一月十五日の夜、ローザ・ルクセンブルグとカール・リープクネヒトは、「ローテ・ファーン」の編集者、義勇軍の手によって秘密の宿舎で逮捕された。一日斗争の全期間中、常に労働者とともにあり、もっとも危険な所に身をさらすことによつて革命的労働者たちの精神的支柱となつていたリープクネヒトは、動物園で背後から射殺された。レーニンとともに生まれ出さずべき第三インターの秀れた理論家と目され、獄舎から釈放のその日から「ローテ・ファーン」の主筆としてドイツ共産党の頭脳となつていたローザ・ルクセンブルグは、運ばれる自動車の中で射殺され、運河に投げこまれた。

一月斗争の敗北は、三人の(レオ・ヨギヒェスも三月十日に暗殺された)もっとも卓越した指導者を一挙に失つたのである。

ドイツプロレタリアートの勝利が、ローザの死体とともにラントヴェール運河の底深く沈められないためには、レーニンのポリシエヴィキ党をドイツにつくりあげることが不可欠であり、ドイツの「七

参考書目録

紙数の関係で十九年の一月斗争までしか触れる事ができなかったが、一層具体的、かつ深い論点の究明のために、参考文献を、現在容易に入手可能なものにかぎって掲げる。いうまでもないことだが、プロレタリアートの斗争の敗北の歴史の後にファシズムの登場を許したドイツの革命運動史からの無限の教訓の摂取は、みずからの頭脳で考え、あらゆる文献に対して徹底的批判的検討を加えうる者にとつてのみ可能であらう。

1 通史として

「ドイツ革命運動史」 吉村 励・青木文庫

徹底的にスターリン主義の立場によつて貫かれていたが批判的に読む目を持つならば全体の概観をうるのに便利である。主として十八年からファシズムの勝利まで。

「ドイツ現代史」 村瀬興雄・東大出版会

「ファシズムの誕生」 小此木真三郎・青木文庫

2 とくに一八一九年の革命について

「ドイツ革命史序説」 篠原 一・岩波書店

一八一九のドイツ革命の全貌はきわめて明らかに描き出されてゐる。革命の背景となつたドイツ資本主義に対する分析が捨象され、政治過程の近代政治学的追求のみに止まつている点を意識するならば充分利用できる。

「ドイツ共産党の創立」 ビーク・青木文庫

「ドイツ共産党の歴史」 所収

中心的指導者による記録

「歴史と階級意識」ルカーチ(全六章中「階級意識論」「組織論」(未来社)の二章のみ邦訳)

ドイツ革命の敗北、ハンガリーソヴィエト革命の敗北の後、これに対する鋭い反省と深い理論的究明をルカーチは、この中でこころみている。そこで彼が鋭くエグリ出しているローザ・ルクセンブルグの組織論における誤りの追求は、われわれにきわめて多くを与えるであろう。

○ロシア革命との比較において見るには

「ロシア革命史」 トロツキー・角川文庫(既刊五冊、七冊中) 党の歴史について

「ドイツ共産党史」 猪木正道・アテネ新書

例によって「西欧社会主義」としての社会民主主義、「東欧社会主義」としてのポリシェヴィズムという観点に貫ぬかれてはいるが、資料としては利用できるだろう。

「独逸社会民主党史」河合栄治郎  
SPD史を簡単に知るにはよい。

「ドイツ共産党の歴史」 ビーク・青木文庫  
ビークの演説、論文集。

4

一九二三年のドイツ共産党及革命について「共産主義の左翼小児病」およびその他一九二二年のレーニンの著作、全集二

九「三三卷」 Documents of Communist International vol. 1」 Oxford Press 「ニンテルン最初の五カ年」トロツキー

「レーニン死後の第三インター」(内「革命的戦略の学校」一九二一年「帝国主義時代の戦略と戦術」一九二八、はトロツキ

スト同志会による邦訳あり)

## 共産主義者同盟規約

|| 万国のプロレタリア団結せよ! ||

**第一条** 同盟の目的は、階級対立にもとづく古いブルジョア社会の止揚および階級と私的所有のない共産主義社会を建設するにある。その実現のために同盟は日本におけるブルジョアジーの打倒とプロレタリアートによる政治権力の奪取を当面の任務とする。

**第二条** この目的のために、同盟はプロレタリアートによる全世界の革命的変革においてほかに活路はないことを確認し、プロレタリアート解放の第一条件たるプロレタリアートの国際的団結とブルジョアジーに対する明確な敵対的意識の喚起を阻んでいる公認の共産主義運動指導部と自らをはっきりと区別し、それとの非妥協的な闘争を行い、新しい革命的階級政党の結成を目指す。

**第三条** 同盟員の条件は次の通りである。

- (イ) 規約を認め、同盟の一定の組織に加わって活動する。
- (ロ) 右の目的に合致した生活と実践。
- (ハ) 右の理想を宣伝するための革命的エネルギーと情熱。
- (ニ) 同盟の決定の実践。
- (ホ) 同盟のあらゆる事情にかんする機密の保持。
- (ヘ) 真のマルクスレーニン主義の復活、創造のための努力。
- (ト) 他のあらゆる団体に関係した場合は、同盟に報告の義務を負う。

# 理論戦線

第三号 四月下旬発行

学生運動特集

学生運動——それはなにか

岸本 健一

全学連の春の闘い 清水 丈夫

特別読物

戦後学生運動略史

Ⅱ 反戦学生同盟受難史Ⅱ

中村 光男

共産党の学生運動方針批判

大瀬 振

理論学習のために

『ドイツ・イデオロギー』 戸坂 賢一

リベラシオン社発行 定価八〇円年四回三〇〇円

第四条 同盟は細胞、地方委員会、中央委員会、大会に組織される。中央委員会は、事務遂行に必要な書記局員とその長（書記長）を選出する。

第五条 右の目的に有効な活動を規約の範囲内で自己の責任において、積極的に遂行し、これを中央委員会に報告することは全同盟員と各組織の義務である。同盟員は一切の討論の自由を保障され、その行動に

おいては統一を守る。  
第六条 同盟の資金は、同盟費、同盟の事業収入、寄附などによってまかなう。同盟費は一人月額一〇〇円とする。

第七条 同盟員の条件に違反した同盟員は除名される。除名については細胞が決定権を持ち、最終的には大会が承認する。

第八条 新同盟員の採用は、細胞の承認をえて行われる。

《付一》 細則は規約の精神にもとずいて中央委員会が別に定める。

《付二》 この規約は一九五九年三月九日から効力を持ち、最終的には次の大会で確認される。

◎編集・印刷とも遅れましてごめいわくをおかけしました。次号は六月一日の予定です。  
◎御投稿は五月十日までにおねがいたします。

## 共産主義 第二号

発行日 一九五九年四月一日

(年六回 偶数月の一日発行)

編集 共産主義者同盟書記局

発行所 リベラシオン社

練馬区豊玉北五の八の一  
振替 東京 三七〇九九

印刷所 東銀座印刷出版株式会社

定価 一部 一〇〇円  
年(六回) 五五〇円

☆五部以上九〇円、十部以上八〇円(すべて前金)に割引します。定価、定期購読料ともすべて送料は当社負担。



# 共産主義復刻版(中巻)

近 刊  
予 告

共産主義者同盟共産主義復刻委員会編集

## \* \* 取扱店

- 神田ウニタ** 東京都千代田区神田神保町1~53  
TEL03 (291) 7586
- 吉祥寺ウニタ** 都下武蔵野市吉祥寺本町2-20-7  
TEL0422(22) 9618
- 大阪ウニタ** 大阪市浪速区新川町2-681  
TEL06 (632) 0471
- 八重州書房** 仙台市中央1-9-16  
TEL022(22) 9809

\* 連絡先 東京都千代田区神田三崎町2-7  
戦旗社内 共産主義復刻委員会

## 内 容

共産主義復刻版(上)に続く四号から七号迄の全てを完全復刻する。六〇年ブントの綱領問題を初め「国際共産主義運動講座」、昂揚しつつある日本の新左翼労働運動をめぐって、その総括と展望。世界階級斗争を領導する党派の内容豊富な理論体系の全て。

# 労働戦線

第一号 内容

春闘をさらに発展させよ 編 集 部  
合理化反対を春闘の柱に 本郷博(全電通)  
賃上げ闘争をどう進めるか

賃銀斗争の革命的立場と改良的立場

山本五之助(全国金属)

会 談 春期闘争と今年の労働運動の展望

座 談 国鉄中執・細井宗一 炭労政治部長・土屋正則  
全金書記長・松尾喬 全電通・大西諱

労働者の眼・世界と日本

特集・労働者は世界情勢をいかにとらえるか

勤評闘争の問題点とその将来

日教組大会傍聴記 森田 実(社青労同中央書記局長)

ジョン・リード「世界をゆるがせた十日間」を  
読んで 小川忠巳

学習らん「なぜ経済を学ぶのか」 柴田規雄

職場の発言 三菱造船・炭労・王子製紙

発行 リベラシオン社 東京都練馬区豊玉北五の八の一

B6判・40頁  
隔月発行  
定価 60円  
1年 300円  
第2号5月  
1日発行